

千六百八十六年一月廿六日ゴロウイン莫斯格を發し九月廿八日上チユングスカ(或はアンガラ)の河口に隣するリピンスキ―塞に達して冬季を過したり時宛かもアルハツンの攻圍終り戍兵悉くネルチンスクに退却したりとの報に接したり思ふに是れ千六百八十五年第一回アルハツン陥落の報なる可し翌年五月十五日ゴロウイン船をアンガラ河に浮べ七日ブラツキ―塞に到るや露人は再びアルハツンに於て支那人を撃逐し其兵千五百を殺戮たるの報あり是千六百八十六年に於ける第二攻圍の初なる可し九日ゴロウインは後員加爾のヴェルクンツヂンスクの塞に達し莫斯格より來たる緊急の訓令を落手したり、

一、兩國の境界を黒龍江と定め、已むを得ざる場合に於てセヤ河となす可し、
 二、前記の境界をだも協定する事を得ざりし時は其地方に交易を行ふの許可を得可し、
 三、若是をしも拒絶せられたる時は談判を全く後日に譲る可く主張す可し、
 十月廿五日クロウインはヴェルクンツヂンスクを去り支那の國境に近きセレヒンヌクに淹留し先北京に使を發して其到着を報ずると共に兩國大使會見の地を

定めん事を請へり、是第一着の措置を謬り一大失策を致せるものにして支那人は是に乗じて談判の終局に到る迄空も退讓する處無かりしなり、千六百八十八年七月使者はセレヒンヌクが會見の地と定められたる事大使は各々兵五百を以て警護す可きの報を齎して歸れり、時會々莫斯格より急報を以つて更に左の訓令をゴロウインに與へたり、

一、直に疾驅してアルハツンに到る可し、
 二、到着の後支那の使節に接し曩の訓令に據り國境の談判に着手す可し、
 三、國境及黒龍江上に於ける貿易の自由は斷乎たる要求をなし若容れられざるの時は特に黒龍江の自由貿易を要求す可し、
 四、支那の使節既に支那に去りたる時は前記の條件に就き公書を支那に送る可し、
 五、クチユクチユに仲裁を依頼しドーリアン人の土地に於ける支那人との葛藤を停止する事を務む可し、
 ゴロウインは是等の訓令を領してヴェルクンツヂンスクに歸りたりしに偶カル

マックスと蒙古との間に變亂を生じたるが故に支那の全權大使は滿州を通過する事能はず、加之時漸く秋に近く交通の便漸く去らんとするに會し會見の機を翌年の夏に延期せんとして支那將官クルフォンヨリウの到着せるに邂逅したり、茲にゴルウインは莫斯格政府の訓令に基きアルパヨンを以て將來の會見地と指定する機會を得たりしにも拘らず、且其義務をも有したるにも拘らず、再び支那人に委して自ら武裝したる護衛兵を弄して遊牧民と區々たる境界を争ひ貴重の子を徒消したるなり、嗚呼是彼が第二着の失敗にして又如何とも爲す能はざりしなり、

千六百八十九年一月ゴロウインは露國が希望する所の國境圖を北京に送り併せて會見の期を早めん事を請求しボグドイ汗はネルチンスクを談判の地と定め千人の護衛を率ゐて出發したるの報を得たり、

是に於てかゴロウインは急にネルチンスクに向ひ、道にして支那の使臣は七月廿一日此地に達し糧食を輸送するの口實を以て大軍を集め水邊に屯集せりとの不快なる報を得たり、ゴロウインの迂や笑ふ可し、彼は今にして始めて支那に談判地

の選定を委し訓令に依つてアルパヨンに趣かざりしを悔むたるなり、然れども時機は既に失して彼の手に非ず、恰も支那人の攻圍を撃破したるアルパヨンの城下に應接する事を爲さずして、樽孔折衝を名として公然大兵を以て露領の中心に闖入しネルチンスクの附近に陣したる支那人と協商せざる可からざるに至りしなり、

加之支那の大使索額圖は康熙帝(Emperor)の示教を受けて必要の際に臨めば兵力に訴へて素志を貫くを得、又他に特に適當の機會あらば是を利用すべきの權能を有したりしなり、是實にネルチンスクの塞に向つて大兵を以つて陣營したる因由に外ならず、其談判の成敗又明に知るを得可きなり、然も索額圖は外交の手腕を持つても露の大使に下らざりしなり、ゴロウインの薄志弱行にして支那の事情に暗きに反し支那の大使は別にチエシユキット教徒二名を拉して顧問となせり、彼等は西歐に受けたる教育の外ポーランドの囚人、黒龍江の脱走兵よりして是を知悉し通曉せるや知る可し、尙談判に用ゐたる言語拉丁語に於ても假令ゴロウインの是に通じ隨行者の一亦是を流暢に操るを得たりしと雖も、彼等は遙に卓越したる

ものなりしなり、

第一の會見に於てゴロウインは黒龍江を國境とし左岸を露西亞、右岸を支那に分ち領す可しと提議し支那の大使はバイカル湖を境界とせんとし支那の典籍を引きて是を論じレナ河畔の權利をすら主張し尙是成吉思汗の地なりと云ふに到り議遂に決せず第二會に於て支那人は其提議を更めネルチンスクを以て境界とせんとし、ゴロウインの別に割讓を欲するの色を見て皇帝の訓示に隨ひ急ぎネルチンスクを包圍せんとしたり、ゴロウインは又私にヂェンウイットの顧問より支那皇帝が貴重なる毛皮の貢税を得んとして黒龍江地方の棄つるに忍びざるを知り、同時に近頃露國に屬したるブリアット人凡三千人諫つて支那に投歸したるの報を得たり、

ゴロウインは策の出づる所を知らざりしなり、此危急の秋に際して彼の薄志弱行を以てすれば支那の提議を甘受するの外無かりしなり、千六百八十九年八月廿七日彼は遂にネルチンスク條約に調印し黒龍江の北ウダアルゲン兩河に達する山脉興安嶺及びゴルビツザ河を以つて兩國の境界と定め、ヘートン其他の豪勇なる

ネルチンスク

一極東に於ける
一大領土

成兵をしてアルパツンを退去せしめ黒龍江を清人の手に委したるなり、若夫ゴロウインにして政府の訓令に違ひアルパツンを談判の地と定め敢て讓らざりしならば如何して斯の如き失態を演ずるの愚を要せん、假令敵をして兵力を排して攻撃の態度を執らしむるもヘートンの勇悍なる成兵數百あり、是に彼の兵二千を加ふる事をなさば支那人は敢て威赫を加ふる事能はざるのみならず、縱令を加ふるも露人は其輕舉妄動を愚弄し得るを以てなり、思ふにブリアット人の離反の如きは支那兵のネルチンスクに入るを見てゴロウインが外交上の失敗に基因するものと知るに由なく、支那人が大勝を得て是を占領したるものと誤解したるに係るものなる可し、

ネルチンスク條約は露國の不利益なりしのみならず甚しき恥辱なりしなり、何となれば具加爾地方の開拓に必須する黒龍江を失ひしのみならず太平洋に於ける最良の海濱を放擲すると共に露西亞が蒙古の羈絆を脱して漸く二百年着々の進捗を得たりし支那の經營は茲に一大頓挫を來して再興の機を遠からしめたるものなればなり、願ればダニューブ河畔より起つてドニールの流域に小露西亞を

建設しウオルガ、ドンの上流に大露西亞を經營し漸次にコサックが西比利亞の諸大河に沿ふて太平洋の濱に到る迄其遠征移住を繼續する茲に數百年にして連綿たる露西亞の天譚はネルチンスクの一條約の爲めに脆くも蹂躪せしめられたればなり、

ネルチンスク條約は支那が初めて外國と締結したるの條約にして最も光榮あるが故に最顯著なるものとなす、當時支那は建國の余を以つて國運隆々として盛なりしに爾後絶えず不利益なる條件に屈從損害を甘受せざるを得ざるに至れり、ネルチンスク條約より馬關條約に至る其間凡二百年支那帝國が漸次衰弱をなす所の目錄は其兩端を此條約に依つて見る事を得るなり、

彼得大帝の世

千六百八十九年十一月十二日ネルチレスク條約調印の後二週にして彼得大帝位に至り簞立の攝政ソフヒヤを寺院に下したり、

帝は幼時ペレヤスラフ湖に舟を泛べて無上の快樂となしたりしが領内には此湖を除きて外に求む可からず、蓋彼得が幼時熱心に航海造船の術を修めたるは國民未だ甚必要を知らざるに當りて其最も必要なる可きを先見したるものなり、即幼

時の遊戯は將來施設の準備にして彼の學生の目的は近海に出入の利便を得るにありしなり、彼得は最初の戦争にアツツ海を占めて黒海に出入するの門戸を得る世に於て土耳其と戦ふて一敗是を失ふに至りしも、北にチャールヌ十二世と戦ふてバルチック海を占領し國民をして海を利用するの新政畧に熱中せしめんとし、て國都を其海濱に遷したり、彼は又社會の改良を圖り歐洲列國に班して下らざらしめんとたるなり、アルガロッチの巧妙なる文辭を借りて是を云へば彼は歐州を瞻望する所の窓戸を開きたるものにして、國民の活動力を海洋と商業に導き、セントペテルスブルグに遷都したる後、往古政治的中心がノーゴロトにありし時代(即ルウリツクの時代)と同じく再び君主專制の政體に復歸せしめたり、

彼得大帝の繼續者は先づ彼の遺業を繼象して遺憾なきを期したり、千七百八十二年カザリン二世は黒海の沿岸にクリミヤを奪ひ千七百九十五年ポーランドを亡して權力をバルチック海邊に擴張するを得たり、

斯くして彼得大帝の即位後一百有余年露西亞は西南の海岸を回復し彼の雄圖を實現せしむるを得たるなり、

多事なる歐洲

彼得大帝は海洋に渴望したる事疑ひなく其眼光夙に太平洋に向ひネバドンの河口を略取するの必要を承認したる外黒龍江口をも征服せんとしたるも歐洲の大戦に妨げられ其意志を伸ふる能はず晩年に至りて西比利亞に奔り、チユングース人の領土に入り支那の長城を衝くの意志あるを漏したりと云ふカザリン二世は歐洲に於ける彼の抱負を實行したるのみならず極東に於ても彼の經綸を施設せんとし黒龍江の征服を希望したるも不幸其實行をなすに至らず佛蘭西革命及び歐洲の中原に引續きたる一般の戦争の爲め一度此大なる目的を放棄し佛國に抵抗する十字軍の同盟に入れり

希世の英傑ポール帝の如きも西方の政治に干係する事百年にして其間に感化されたる僻見を脱する事能はず彼得大帝の計畫を以て陳腐なりとし是を排斥するの意を敢てしたるなりき

帝兇手に斃れアレキサンドルの位を襲ふや其少壯にして浮華の心強く歐洲の救世主として大陸に其秀麗なる風手を耀かし當世の大豪傑那破翁を倒して其虚榮を銜はんと企てたるが故に復國土の膨脹を企圖す可き倔強の機會を逸したるな

り、帝若シヤールマン帝國の再建を夢想せる那破翁を助くる事をなさば亞細亞に於ける領土を擴張し得たりしのみならず、ヒサンチン帝國の遺産を收め版圖をボスホラスの沿岸に擴張するを得たるや知る可きなり

露西亞は深く歐洲の政治に干渉し其眞正の利益を等閑に附し去りて西方の外交的隨力に隨へりメタルニツヒ及其部下の激賞は博し得るとも禦く可からざる勢を以つて膨脹しつゝある青年國の爲めには不自然にして且有害なる姑息主義に沈淪したりしなり露國外務省は此主義の爲めに腐蝕せられ絶東に於ける活潑を要するの所置も一に口實を茲に設けて相延引せしめられたるなり斯の如にして露の政治は麻痺の情態に陥り西比利亞に許多の利益を取るを敢てせざりしが事變の續出紛亂するに至つて漸く其嫌焉たりし絶東に眼を注ぐに至りたり千八百二十五年ニコラス一世即位の時叛逆の罪に付して西比利亞に放逐せられたる許多の貴族ありしなり彼等は其貴族と共に千八百五十五年帝崩御の日迄該地に留まり國土の進歩發達を助長し其子孫の或者は黒龍江の移殖を圖り又頗功勞をなしたり頃者カムサツカに移住するの必要漸次に増加しアラスカに露米會社の

編者又注意を

毛皮貿易を事とする外オコック海ベールンク海に捕鯨者の屢々顯はれしより漸く絶東に達する捷路を發見するの必要に迫り非常の勞力を以つてヤクローツクよりカムサツカに達する道路の改修を圖りしも竣功するを得たるは僅に數部分に過ぎず、由來此間の道路は峻嶮なる溪谷自然の難關にして夏日野獸の往來する處の小徑の外又開拓す可からず、

陸路の不完全なるを厭ふて行客道を海上に取りければオコック(オコック海)に面する小都會は危險なる河流の口にありて位置不便なりと雖も船舶の出入盛にして樞要の地となるを得たり、

ネルチンスク條約に依つて西比利亞の太平洋岸はスタノポイ山とオコック海の間介する狹隘なる區域に定められたるを以つて今漸く緊要ならんとするカムサツカは殆太陸と隔離せられたるやの感あり、漸く多大の苦痛を此條約に依りて感するに至りしなり、故に百五十年の後ニコラス一世は黒龍江の割讓が非常の損失たるを確認し彼得大帝カザリン二世が猶豫したる回復の事業を振起せんとしたり、

然れども帝の此希望は幾多の困難と關聯したり、沿岸の地理は世に知られずサガレン島は大陸に接續し、黒龍江は航行に適せずと想像せられたり、

加之露の外務大臣伯爵ネルセルロードはメラルニツヒの熱心なる崇拜者にして西比利亞は四人の誦地と信じて勁敵として支那を恐れ極東の膨脹に反對し極力帝の目的を妨害せんとしたるなり、然れども帝は千八百四十六年ガブリロツクを派して黒龍江口を探險せしめんとし二橋船「コンスタンチン大公」を艦装し嚴に姓名を秘し外國人と稱して目的に着手す可きの勅令を發したり、是江口には脱獄者等多く移住したるの報ありしに依り其發覺を慮りたるものに然ならず、ガブリロツクは江口に達し小艇に搭して溯航すること僅に十二哩糧食の乏しきを名として歸航し支離滅裂の誤報を齎して歸れり、ネルセルロード欣然として其報告を皇帝に上りて曰く、黒龍江口は深一乃至三呎にして大船の接近するを得ざる處、サガレン島は一の半島にして露國の爲め二ながら必要なるものにあらずと、

外務大臣は是等の言を以つて黒龍江問題を埋没し遠隔の地に於ける困難に妨げらるゝ事なく愉快に其陳腐なる事業を樂まんとして深く望を囑したり、然りと雖

ニコラス一世の剛邁なる一たび企てたる計畫を決して放抛せざるの資質を有したるを以つてガブリロフの探險が淺薄冷淡なるものにして此重要なる問題を可否するの料とするに足らざるを知り更に斬新なる報告を得て事實を詳悉するの舉に出でんとせり、恰も好し極東に一事件惹起して露國政府の注意を促す事ありたり

英國が支那と戦を交へ遂に其五港を開かしめ貿易の權利を有し而も極東を征服するの說遠く露國政府の耳を打つたる事はなり、露國は百五十年の間支那と國際の關係を結び陸上貿易の權利を得たる唯一の國なりしも今此報を得て露の政府は啞然たらざるを得ざりしなり、

露國は久しく黒龍江地方を蠶食せんとして熱中したるものなるが故に他國も亦然る可しと想像したるは實に當然の錯誤にして、殊に英國が黒龍江口を占領するの時は西比利亞は永遠に太平洋に於ける膨脹を閉塞せらる可しと常に戰々として是を恐れ急に兵を北方に出すに至りたり、

十九世紀の中葉に至つて露國政府の注目は再び黒龍江上に向つて投げられたる

黒龍江流域の
開拓の歴史

なり、エルマツクの事業はネルチンスク條約の不幸に逢つて停止せらるゝ事茲に一百六十年にして復雜なる動機と共に政府の注目を値するに至り此偉業を完成するを得るの偉人なきを如何今ニコラス帝は此適當なる時機に乗じて誰か好く帝の意を貫き志を伸ぶるを得るものなるや眞個に有爲の人物を見出さんとして務めたるなり、

第五編

黑龍江地方の侵略

新總督ムラビ
ラツフ

一千八百四十七年十一月六日の夜、ニコラス帝チユラに幸し隣邑セルマーフスカに於て知事ムラビラツフに謁を賜ふの命あり翌朝七時ムラビラツフの拜謁するや帝喜て之に謂て曰く朕卿を以て東部西比利亞總督に任じたり、速に聖彼得堡に赴き西比利亞の重要問題を講究す可し、黄金の産出を發達せしむるの方法、弊政の改革及びキヤクタと支那黑龍江地方との貿易の關係等即ち是れ而して最後の問題の如きは後日尙具に講究せざる可らずと、

是より先き數日前ムラビラツフの任命發表せらるゝや有司は大に不満を訴へたり、實に彼等は新總督が土耳其戰爭及び高加索に於ける殊功を忘却したるものなり、由來帝は東部西比利亞總督を以て、堅忍剛果の士に授けんと欲したりしかば、ムラビラツフの適任なるを知るや、直に之を擧げたるなり、ムラビラツフの善く帝の希望に協ひしや否やは余輩の今將に説かんとする所蓋しムラビラツフは西比利亞

當時の官吏の決して及ぶべからざるもの其氣力の剛邁なる裁決の敏活なる能く盤根錯節を断ち在職の間地方の要務を措置し、卓識の將來の難關を先見し、之を排除すべき方略を廻らせり、

十一月の末ムラビラツフは聖彼得堡に到り、非常の細心を以て職務に關する問題を研究し直ちに人に語るらく、將來東部西比利亞の發達に必要な黒龍江を得んと欲せば、其河源を保有するの必要なるのみならず、河口附近を兼併せざる可らず、而して此目的を達するに當りて自己の職責は唯其上游の地を守るに留まるを以て、須く海軍協力一致せざる可らずと、

既にしてムラビラツフは首府に於て、キヤプテンネヴェルスコイを識れり、ネヴェルスコイは一千八百四十七年の終に於て、二檣船具加爾號の船長を拜し、爾後カムサッカの沿岸及びオコック海に於て業務に執掌したる俊傑にして、當時ヘルシングホルムに製造中なる該船の竣工を待ち居りしが、ムラビラツフは曾てこの敢爲なる船長と黒龍江の一層精確に探討すべきを論じて其賛同を得たりこれより、ネヴェルスコイは熱心にムラビラツフを翼賛し諸般計畫の實施に與つて大巧を奏

したり、

ムラビヤツフの領域はユニセイ河より、ペーリング海峡に達せり、この廣漠たる地方に於てはネルチンスク條約によりて南東及び北東の極土即ち後具加爾どカムツッカとの間は交通を失ひたり、故に一千八百四十八年一月八日の出發に臨みて拜謁を許されし時帝は北海の航通危険にして日子を費すと多ければ、卿はカムツッカを巡視する能はざるへしとて、其距離を示し海軍若し之を略するも、卿が其報に接するは半歳の後ならんと語られたるに少壯の總督は謹みて之に答ふるに、誠に半島を巡察せんことを以てせり而して彼は果然約を追ふて重大なる結果を齎したり、

ムラビヤツフは一千八百四十八年の始め首都を發し、ネヴェルスコイは同年八月二十一日クロンシダットを出帆し、翌年大陸の一端に會せんことを約して、互に緊要なる事業を經營したり、

ムラビヤツフの位置

ムラビヤツフのイルクウツクに入るや海軍大臣は直に來つて訪問し、オコック海の南端チュグル灣に新設す可き軍港コンスタンチースクに關する意見を諮問し

たり、該港は一年の過半を氷に閉ちられて危険なる砂堤圍繞せるが故に、後具加爾と陸路連絡するの計畫なりしが、ムラビヤツフは陸路の開通する能はざる所以を示し、ネヴェルスコイにしてチュガル灣より黒龍江口に至る沿岸を檢し、了れば一層適當なる港灣を發見せんと答へたり、一千八百四十九年一月二十日帝は黒龍江問題を研究するため特別委員を命じ、二月八日河口を探見す可き遠征隊を送るの議を裁可し、數月内にカムサツカに達すべき、ネヴェルスコイを以て之を指揮せしめんとし、ムラビヤツフをして命を傳へしめたり、折しもオコックよりカムチャツカの港、ペトロポヴロスクに至る冬季郵便當時冬季は一回なりきの既に出發せし後なりしを以て、ムラビヤツフは參謀大尉コルサコフをオコックに遣し、海路の開通を待つてペトロポヴロスクに赴き、勅命をネヴェルスコイに傳へしむ、然れどもコルサマツフはオコックに於て氷の爲に進きられて六月まで淹留せしかば、ネヴェルスコイは既に必ずペトロポヴロスクを去りたるならんとし、サガレンの北岸を航行してネヴェルスコイ及び具加爾等を搜索せしも、遂に其効なく已むとを得ずしてアヤンに歸れり、

ムラビラツフ、イルクウツクに駐まると一年英國海軍の活動を見て、愈々太平洋の重要なる所以を領せり、彼は又かゝる遠隔の地にありと雖も、キヤクタを經過する陸上貿易の衰へしより、支那の開港が海上貿易に及ばず影響を推測したり故に彼は皇帝との約を守りてカムサツカ及び其要港ベトロボグロフスクを視察すべく急げり蓋し該港は太平洋に於て露國の海軍根據地となす可き唯一の地なるも、航路の遠且難なるを以て重要な結果を得ざるを察し嘗て總督の之を巡視するものなかりしを彼は全く之に反して半島の沿岸は捕鯨者の屢出入する爲め己に商業上の要地となりたれば、太平洋に安全なる軍港を設けて、戦時に備へざる可らずと確信せり。

彼は一千八百四十九年五月十五日イルクウツクを去り、六月二十五日、オコックに至り七月四日出帆して、全月二十五日ベトロボグロフスクに達しベトロボグロフスクを擁する、アバチャ灣に至りて其形勝を賞したり、此秀麗なる一灣は水深くして、阜頭に船を横たへて貨物を積卸するに足るべき江澳に富み高崇なる火山は其北と西南とを障蔽し其壯大美麗なる優にリオヂャネーロシドニーを凌ぐと稱せ

〔博士ギレマルドの説らるる程なれば、彼は太平洋に於ける露國の海軍根據地を、オコックより此地に移すに決したり、露國及び他の歐洲諸國に於て我質見せる幾多の港の中にも、アバチャ灣に比較すべきはなしと云へる手書の一節は、以て其熱心を覗ふに足らん、

彼の此地に駐まりしは最も快適なる季候即ち短き夏の間なりき、此時や天候若し快晴なれば、西比利亞の港灣は海上嫣然笑ふか如く直に漫々たる冬季沿岸の氷結を忘却せしむるの美觀を呈す數週前彼はオコックに於て其補ふべからざる欠點を知りて、氣焰萬丈百年前に該地の亡びざりしを怪しみたり故に其ベトロボグロフスクを見るや太平洋に於ける露國海軍の根據地となす可しと信じ、直ちに策を決したるなり、

彼は例の敏活を以て大砲三百門を備へたる堡壘を築き、敵をして海上より近づく能はざらしむるの設計をなしたりしが徒らに未來の幻像に魅せられて、現在果して爲し得べきやを顧慮せざるが如き愚をなさず、遂に規模を縮少し小口徑の大砲十門、コナック兵二百水夫五百を以て海上より入寇する敵軍を撃退せしむる者と

なし少時にして造らるべき砲臺の最も適當なる位置を守備兵の司令官に示し、第六號砲臺湖上砲臺を撰定して後、攻守の際に於ける不慮の變を歴然胸中に蓄きて、語りて曰く、敢若し上陸してニコルスキー山を越ゆる時は、兄等は榴彈を以て之を迎ふべしと。

彼は巡視中一個の妄想にかられて失策をなせり、恐らくは是終生の一失ならん、何そや、曰く太平洋に於ける大軍港として、ペトロポロフスクを撰定したるとなり、而してネヴェルスコイが之を尙低偉度の地に求めんとせしは、後日黒龍江の南岸に軍港を撰定するの機に接して始めて正確の意見たると顯はれたりされど、一千八百五十四年太平洋に於ける戦争の間、海軍の不幸否危急より露國を救済したるものは實に此少壯總督ムラビヤツフが精透鋭敏なる先見なりき。

彼は八月二日ペトロポロフスクを去り、ネコックに歸らずしてサガレンの北に進み、五月三十日此方面に向てペトロポロフスクを去りたる、ネヴェルスコイに邂逅せんと希望せしも、其効なきを以て、ウヤンター島になり、八月二十二日アヤンに入り内地を連絡する所の道路を視察したり、是より先コルサツコフはネヴェル

スコイに關する消息を得ざるを以て、勅命を傳ふる能はざるを彼に通せしかば、彼は具加爾號の安全に就て痛く疑念を生じ、ペトロポロフスクよりの途中か、若しくは黒龍江口に存在すと云へる砂堤に觸れて沈没せしならん、と憂慮せしに、十一月三日の朝、具加爾號は灣頭に現はれたり、彼は觀喜極まつて焦躁禁じ難く、短艇を飛ばして之を訪ふ、ネヴェルスコイは欣然として彼を迎へ、談管をどつて船上より語て曰く、我等は天祐を得て幸に主要の問題を解釋することを得たり、實にサガレンは孤島にして、其南北より海路黒龍江口に進航するを得べし、舊來の誤謬は之を以て全く消滅したり、今我は兄と共に真理の發見せられたるを喜ぶと。

却說ネヴェルスコイは一千八百四十八年八月二十一日クロンズゲットを去り、八個月二十有三日を経て、一千八百四十九年五月十二日ペトロポロフスクに達したり、これ恰もムラビヤツフがカムサツカに向ふてイルクーツクを出發せる三日前なりき、彼は曾てムラビヤツフの手書に依て黒龍江口に信賴すべき探檢の實行せられんとするを及び政府の訓令の將に下らんとするを知りたれども、空しく貴重時間を失はんよりは、寧ろ所職を勉む可しと命の到るを待たずして出帆する

に決し、五日全く積荷の陸揚を了してサガレンの北に航し黒龍江方面に嚮ひしも、淺瀬砂堤に妨げられて屢々投錨し端艇を派しては海峡の航路を測量し、困難なる航海を経て六月二十八日黒龍江口に近く碇泊し自ら端艇を以てサガレン及び大陸の沿岸を探討し終に黒龍江口を發見して少しく流を溯り、爾後針路を南に取りて大陸とサガレン島との間を探檢せり、

サガレン島は經度に沿ふて殆ど直線をなし緯度約十度に互り大陸の沿岸壓迫し來る所狹隘なる海峡をなして兩灣を連絡し海峡の幅僅に四里計り、南北の鐘口形の灣より之に向ふて進入する處航海者は容易に其相通するや否やを識別し難し、故に十八世紀の終十九世紀の始に於て此界限を巡航したる探檢家ラペルース、プロトングルーセン、ステルンの如きは皆狹隘なる地峽の大陸とサガレンとを連絡せるものと想像せしをネヴェルスコイは黒龍江口より南下してこゝに深三五呎の水道を發見し愈南してプロトング十八世紀に於てこの假設的地峽に止められて探檢の終點をなせし所の對岸に到り、サガレンの島なるを知りて北の方具加爾號に歸れり、この重要なる發見の間具加爾號は碇泊三十日に及べりかくて

敵は聖彼得堡にあり

後にネヴェルスコイはアヤンに航して茲にムラビラツフに邂逅したるなり、サガレンの半島と誤認せられたる時、船舶は冬季數日間沿岸氷結するオコック海を経て北より黒龍江に接近するの外なきを以て、黒龍江口はオコック及びアヤンと同一の情態なりしが、ネヴェルスコイの發見によりて今や吃水十五呎の船舶は冬季も氷結せざる韃靼海より進入すべきを知れり、

ムラビラツフとネヴェルスコイが多難の航海に従事せる時ネセルロード及び其黨與は擅斷的勢力の下に貴重材料を蒐集しつゝありしが、彼等は聖彼得堡に於て奇怪なる遠征隊を組織したり、こは一千八百四十四五年の間に、中學生テミンドルなる者黒龍江に學術的遠征を試みし時ウダ河地方に四個の標柱を發見し以爲らく是支那人の境界を標示する爲建設しだるものにして條約上の境界に違背せりとかくて紛々議論の題目となりしかばこの漠然たる報告に従て一千八百四十八年の末ゴルビザ河よりオコック海に至る全境土を探見し、殊にウダ河と海との間に在る彼境界標を實檢せんと決定したり、されど彼等は秘して之をムラビラツフに報せず、一千八百四十九年二月遠征隊派遣の勅許を得中佐アクトを以て指

揮官となし、支那人との衝突を避けんが爲め黒龍江に進入せざるべきを嚴命したり、
 而して一千八百四十九年十一月二十日、ムッピオックのイルクウックに歸りし時、中
 佐アクトの遠征の準備をなせるを見て、黒龍江の沿岸及び江口も探検すべきとを
 懲慝せしが、アクトは之に従はざりき、ムラビラツフの賢明なるも其目的の條約に
 違背せる境界標を探索するが爲なりとは、決して覺知する能はざりきこの遠征は
 ネセルロードがムラビラツフの政策に對して、堤起したる反抗の發端にして、其結
 果はムラビラツフの活潑なる計畫を殆ど破壊せし所の愚昧なる公文書を支那政
 府に送りたる口實に供せられたるなり、黒龍江の占領は露清開の談判の結果と云
 はんよりは、寧ろムラビラツフとネセルロードとの抗争の結果なりしなり、(そは後
 に言ふべし)故に謂ふムラビラツフの勁敵は北京にある、にあらすして、實に近く露
 國の首都聖彼得堡にあるなりと、
 活潑なる東部西比利亞總督は政敵の反抗を辨駁し、政府をして極東の重要に注意
 せしむることを怠たらざりき彼は聖彼得堡に有力なる國友を得たり、大公コンス

タンチン及内務大臣ペロフスキーこれなり、彼は兩雄と書信應酬の時常に將來の
 問題を指點したり、彼は亞細亞の殆ど中心たるイルクウックより、黒龍江の下太平
 洋に至るの間に着眼して、太平洋の將來世界の歴史上に首要の役を演ずべき運命
 を有するとを看破し、西比利亞に關する直接の問題、支那に於ける英國の勢力の發
 達、キヤクタの陸上貿易衰へて海上貿易の發達し來れる事、及び露國の充分なる殖
 民的膨脹を講究し、カリホルニヤ沿岸に於ける露人昔時の殖民地が毫も報償なく
 して見捨てられしとを深慨せり、
 而もムラビラツフは終に二條の方策を献して帝の嘉納を得たり、即ち軍港をオコ
 ック海よりペトロポロヴスクに移し、小艦隊を創設する是、一、黒龍江の北方シチ
 ヤスチャ灣に於て、ネヴェルスキイが指定したる地點に冬營を設立する是、二、
 ネヴェルスキイは其第二策に關する命を奉し、具加爾號を以てシチヤスチャ灣に
 到り、一千八百五十年六月二十九日、ペトロフスコの冬營を設立せり、こは黒龍江口
 の近傍に於ける露人が最初の移住地にして、土民ギリアツク族の好意満足を得て
 設立せられたるものなり、然りと雖も該地はオコック、アヤン及び他の諸港の如く、

六月まで氷に封せられて碇泊に適せざるが故に、ネヴェルスコイは先年黒龍江口及びサカレン沿岸の探検を勅命に先じて決行したるよりも、一層大膽なる處置をなし又政府の訓令を受けずして、一隻のスループに武装せる水兵六名と一斤砲を乗せ、當時出入を禁せられたる黒龍江に闖入し、河口より二十五海里の地に一壘を立て、皇帝に敬意を表して之をニコライフスクと稱し八月六日ギリアツク人の面前に於て露國の軍旗を翻し、従者と共に施條砲及び一斤砲を放て之を祝せり、之を黒龍江占領の濫觴とす、かくてネヴェルスコイは久しく渴望したる、河畔に設立せる此殖民地を守護せん爲兵五人を留めて直に躬ら書を裁してムラビラツフに狀を具申せり、

ニコライフスク
占領の可否

ネヴェルスコイのイルクウツクに達するや、兵營をオコックよりカムサツカに移すに際し、カムサツカに於て之を監督せし、コサツクの歸り來るに會したり、是より先きムウピラツフは聖彼得堡に赴きしが、彼等も亦上京す可き訓令を領したり、ムラビラツフは首府より四千里を隔つる西比利亞の中央に於て、政敵の反對を以て是も危険なるものと信したりければ、首都に上りてより常に反對者と議論を上

下したり、而して一千八百五十年十一月、彼が首都につきし時は實に絶好の機會なりき、蓋しネセルロート及其黨與は、ネヴェルスコイが獨斷を以て黒龍江にニコライフスクを設立せしを酷評し、宜しく之を嚴刑に處す可しとなし、黒龍江の占領問題を委員會の調査に附したるなり、この委員會はネセルロートノ徒多數なるを以て、委員の一人たるムラビラツフの功業を破壊せんと希望したり、且其議長はネセルロートなれば痛く黒龍江の占領に反對し、シチヤスチャ灣は黒龍江の開通せる間、充分に用ひらる可き地なるを論じ、ギリアツク人と雜居するは尙早くして危険なりと稱し、ニコライフスクの基礎を鞏固にせば必ず支那人の注意を惹き、強兵を派遣せしむるに至るべく、若し之が爲め術所を破壊せられ、國旗の汚辱を蒙る時はギリアツク人の眼前に露國の威光を失墜す可し、故に支那人の抗議を待ずして直に之を撤去し、以て非常の危険を避く可しと論述しければ、ムラビラツフは極力之を排したれども、委員の賛成を得る能はざりき、中にも軍務大臣チエルニシエツフの如きはムラビラツフをも嘲弄して、自己の紀念碑を建設するの希望に出でたるならん、と云へり、

數日の後ネセルロードは議事録を回付し、出席者の調印を求めたり、使者は彼の意を領しムラビョツフの許に來り、直に議事録に調印して返付せんことを求めたり、ムラビョツフは流石に氣力昏睡すると稀なれば、先之を精讀してネセルロードが黒龍江口の退軍を主張し、又滿州と衝突するの危険を示せる演説の終に、總督ムラビョツフ賛成の語あるを發見し、使者に一椀の茗を與へ其之を啜る間に、痛快なる短語を書し、断じて之に賛せざるの意を示せり、

チエルニエツフは大にムラビョツフの行爲を怒り、彼に對して之を漏したれども、議事録は此緊要なる附言の儘天覽に供せられたり、蓋しネセルロードはムラビョツフを以て、過激短慮の軍人となし、外交的權略を以て之を制せんとの計畫なりしが、卑劣なる計畫全く敗れて痛撃を受け、却て反對の結果を來し、議長をも死せられたり、次でチエサリウキツチ親王後のアレキサンデル二世之を襲き、ムラビョツフと會見の後、一千八百五十一年一月十九日再び委員會を招集せり、ホセルロードと其徒とは再び反對を試みしも、ニコラス帝は議事録を閲讀してニコライフスクを維持し、且夏期の間一隻の船を以て、之を守護すべしと命じたり、然れども政府

は此地を以て表面上露米會社の所屬となせり、この時帝は記臆すべき一言を述べて曰く、一度露國の旗を擧げば決して之を撤する事なかれど、太平洋に於ける露人は今尙之を引用す、同時政府は支那に報して曰く、今回露米會社は黒龍江畔に一衛所を設立したれば、政府は外國の侵略を防ぐ爲め巡洋艦一隻を以てし、今後一切の處置は露清の間に於て決定するを注意したりと、

ムラビョツフは最初の論戰に勝を制して愛好せる黒龍江に第一の足場を得しかば、益將來の計畫を實行するに必要な、他の處置に就て勅裁を獲んと決心せり、彼は機に乗して政府内の無識者を滅盡し、然る後黒龍江を占領するの希望を懷抱せしが、二百年前ハ、ロツフの遠觀せし如く、此事たる實に大兵を獲て、而して後に着手すべきものなるを熟知したり、然るに一千八百四十八年任に西比利亞に赴くや、部下の軍隊頗る不完全なるに驚きたり、當時は東部西比利亞の大邦を以てして、而も兵士は僅に四大隊に過ぎずして、野戰砲は一門をだも有せざりしなり、故に彼は軍備擴張の議を上れり、ネセルロード之を見て例の妄想を吐露して曰く、大兵を増さば支那を戒嚴せしむべし、且つ露國の財政はかゝる目的に過重の費用を支出す

ネルチンスク
兵隊

る能はずと豫期の如く嚴酷なる反抗を加へたり然れども彼の術策に富める克く之を壓倒することを得たり彼れ曰く支那人は露人に馴れて其數の多きを愛ふるものなし而して若し夫れ露國東方に力を得は却て支那人の保全者たるを得べしと乃ち本國より兵士を仰かすして大に之を増加すべき巧妙なる策略を警告せり此はネルチンスクの登録せられたる農民を兵士に改むるの意見なりき抑是等の不幸なる農民がチルチンスクの鑛山採掘に従事するは一種の賦役コレクシーにして勞苦甚薄給の上に車輪薪炭は自辨にして無限の糶弊より一家を救ふべき方便なく其境遇遙に罪人に及はざりき罪人の苦役は二十五年以て最長期となしこれより後は服役の義務なかりしに農民に對する不正の待遇は全國無比なるを以てムラビラツツはこの弊政を一掃し經綸の實行に資せんと決心したり彼が軍隊編成に關する計畫は左の如し。

- 一 國境のコサツク兵
- 二 後具加爾諸都のコサツク隊
- 三 土人隊——チユングース人及びブリアット人

四 後具加爾諸村のコサツク隊

五 ネルチンスク州に於ける鑛山の農夫

最初の四圍は既に存立せる者なるが彼は之を騎兵となし第五なる鑛山の農夫二萬九千を以てユサツク歩兵十二大隊各一千人強を増加せんと企てたりこの計畫は境兵を増加すると共に一大弊害を除去するを以て一千八百五十一年四月二十七日ニユラス帝は農民を兵士に改むるの議を裁可し六月二十七日勅令を以て具加爾の歩兵隊を編成せしめたり彼は聖彼得堡に於て諸省に出入し方策の實行に盡力する事殆ど八閱月一千八百五十一年八月二十一日イルクウツクに歸り繼て自ら事を處理する平生の熱心に驅れて後具加爾に赴きネルチンスクの登録せる農民をコサツク兵に編成するの措置をなし改良の實を目撃し古來の奴隸制度より解放せられたる農夫の喜色を見て欣々たりき

愛國的の開發を以て終に廉潔を全ふせるネヘルスコイは黒龍江に於て更に遠征隊を組織すべき命に接しムラビラツツに先だつて極東に歸れりかくて航路の開通するやネツェルスコイは著名なる具加爾號及び露米會社のシニレコツク號を

後具加爾諸の沈

以てオコックを出發したり途中後者は浸水を受けペッコフスコの前に横はれる、砂堤に乗場げんとして僅に難を免れ同時に具加爾號は灣口に坐礁したり是等の遭難は些細なりしも爲に著しく時間を失ひしは一に船員の寡少なるに因れり即ちネヴェルスコイが沿岸の移民、僅に三戸なりき及び嚴に此地に難破したる運送船オコック號の乗組員に助けられて、浸水船より貨物を移すに使用したる、本船員は僅に五十人なりき、一千八百五十一年八月五日ネヴェルスコイは、大尉ボシニアツク及び二十五人と共に端艇に乗じて黒龍江に向ひ、八月九日先年自ら設立したる案に違し、進んでニコライフスクの爲に適當の位置を探ぐり、大尉ボシニアツクに命を授けて元來の戍兵と共に總て二十五人を與へたり、此時や實に食料は隣邑のギリアツク人に仰くの外なかりしを以て、頗ぶる困難を覺へたりと雖も、彼等は嚴冬に向て準備すべき時日を失はず、露人の村落に就て最も必要なる洋室を建築したり、

黒龍江口に於ける露人の現出や既往二年間の活動は、支那人又は土人の猜疑を起す事なかりければ、聖彼得堡の委員會に於て、ニコライフスクの設立を是認せし時、

露米會社と政府との間に劃したる分明なる區別は、自ら全く注意を脱するに至り、支那人との關係は此時より愈親密に赴きたるなり、

露人は人口疎遠なる荒野に於て嚴寒を凌ぎ、意氣毫も沮喪せず益々探險を繼續し、二百年前祖先が北海に樹てたる勳巧と其光を争へり、一千八百五十二年二月ネヴェルスコイはオコック海の東岸に良港の存在するを聞き、サスレン島を横貫して之を探險すべく、大尉ボシニアツクに命じギリアットの嚮導と共に、極に頼りて出發せしめたり、既にしてボシヤニツクはラザレツフ岬に達し、韃靼港の最も狹窄なる處を液れり、其後樞犬殆ど盡き糧食又欠乏を告げたりしが、辛うじて島内を跋渉しチミ河に至りて、其吐口に下る時雙脚凍傷して潰瘍を生じ、犬は飢えて疾く樞を曳く能はざりき、かくて歸路愈困難に遭遇せしが漸くギリアツク人より若干の魚類を買ふて之に資り、一千八百五十二年四月三日ニコライフスクに歸着したり、同月十八日ネヴェルスコイは、又黒龍江に遠征者を遣りて、數月間河流を探檢せしめたり、

ネベルスコイは、韃靼灣の沿岸及び黒龍江に於ける探檢の報告を按じてデカスト

二二二
リール湖を占領し、キヤ湖に寨を設立するの必要を定議したり、黒龍江の滔々北に奔り北緯五十度に到りて、韃靼海に赴かんとするや、支流東を指して一大湖(キヤ湖)となりて、北緯五十一度三十分、南緯五十二度三十分、東西の長さは五哩、面積二十平方哩、余湖海の間は狭小の山脈相隔つのみ、而して湖の要害たる所以は黒龍江系の一部にして、兵學上第二の吐口と稱すべきキヤ湖と相接するにあり、さればネヴェルヌイは幾多の探検者が是等の事實を報告せし時、デカストリール湖を占領せば、全く黒龍江の下流を支配すべきを認め、直に之を占領すべしと建議したり、而もネヴェルヌイはこの建議の、聖彼得堡に於て反對を受けんとを慮り、獨斷を以て成功したる二回の先例に鑑み、再び同一の行爲を試むるに決し、一千八百五十二年夏大尉ボシニアックに托し、デカストリールに冬營を建設せしむるにして、工事成を告げ、ボシニアックはこゝに冬時を經過し、翌年三月四日アレキザンドロスク寨を遇つ、同日露米會社の社員も又キヤ湖の近傍にマリンスク寨を建てたり、かくて黒龍江と韃靼海との緊要なる交通線を全く占領するを得たり、ボシニアックは從者三人を卒ゐて、ギリアックの小艇に搭じ、沿岸探險のため五月

二日南方に向ふて出發し、同月二十三日北緯四十九度に到る良港を發見し、皇帝に敬意を表してニコラス一世灣と命名し、普ねく灣内を巡視して、悉く名稱を興へたり、現今之をインペラトルスキヤ灣といふこの時土人告げて曰く、更に南方十二日程の地口大港あり、港内風波を避く可く、又南すれば遙にして一港あり、其近傍の大河はウツスリーの分水界に達すと、是蓋し浦盪斯德に近き彼得大帝灣を云へるならんと雖も、糧食將に盡きんとするを以てボシニアックは之を探ぐらずして、デカストリール灣に歸り、ネヴェルヌイに其顛末を語れり、
一千八百五十三年七月十二日、即ちボシニアックの遠征より歸りし後、程もなく具加爾號はアヤンよりベトロフスフに着し、ムラビラツフの報をネヴェルヌイに致して曰く、デカストリール湖及ビサガレン島の占領は勅許を得たりと、而してデカストリール及ビキヤは既に占領し了りたれば、今はたゞサガレン島を餘すのみ、

二二三
縦令露國黒龍江を占有するも、其河口たる北はオコック、南は韃靼海峽より襲撃の虞あるを以て、サカレン島の占領は之が防禦上最も必要なり、故に政府は露米會社

に占領の命を傳へて適當の保護金を下附し、ネヴェルスコイをして沿岸を測量し、占領に便利なる位置を撰定せしめたり、

ネヴェルスコイはペトロポロフスクよりサガレン島に航し、東海岸を廻りて南端に至り、ラペルース海峽を通過し西海岸に沿ふて北方韃靼海峽に入り、島地の最も狹窄する所にあるクスナイ河口に適當の位置を發見し七月二十一日イリンスク寨を建て、成兵六人を置き、對岸に航し先にボシニアツクの占領したる各地を巡見しインペラトルスキー灣に於てコンスタンチーフスクを見出し、八月一日露國の陸軍旗を揚げ、八月五日北航してデカストリー灣に達しアレキサンドロフスク寨を發見して又露の陸軍旗を揚げ、八月七日マリーンスクに於て同一儀式を行ひたり、

是等の占領は露人が黒龍江口の南岸を探檢して、其重要を認めたるの結果なり既に言へる如く是等の衝所の存在せる一帶の地方は、東は海に涉し西に黒龍江に境し南はウツスリーの流れカンカ湖スイフン河に限られたる地方を経て、海と平行し殆ど正北に赴く現今沿海州の一部たり、蓋し黒龍江の左岸を占領するも、この地

を占領するにあらざれば該河の航通自由ならざるを以てなり、

ムラビラツフは平生の勤勉を以て銳意經略に従事し、將來の變動に備へたり、ネヴェルスコイの再びラペルース海峽を通過し、サガレン島を週航してペトロフスコに還るや、翌一千八百五十四年春ムラビラツフは沿岸の占領地防禦のため二百五十人を黒龍江に送らんとし、具加爾號に乗じてペトロポロフスクに到り、デカストリーに糧食を輸送すべきの命をネヴェルスコイに傳へ、運送船イルチシ號をしてアヤンに於て、サガレンの南端アングア灣に送る可き貨物を搭載せしめ、特派せられたる參謀ブツスをして、ペトロポロフスク及びアヤンに於て、露米會社ニコライ號に糧食を搭載し、アニア灣に到りて上陸し、八十人を以てムラビラツフスク寨を建設せしめたり、

各所に散在せる露國の船舶及び遠征隊は、冬季非常の困難に遭遇したり、運送船ニコライイルチシは、インペラトルスキー灣に新設せるユンスタンチーフスクに避難し、少尉オルロフは其隣國を探檢する一個月の後、八人を以てイリンスクに留りしが、他の露國兵を探索せんとて出發し島の狹部を涉り、刳舟一隻を購ふて新

月形のアニツア灣に航し、アニツア岸を廻航せずして新月の一端を越へモルドゥ
 #ノハ灣より陸路船を投して、九月三十日ムラビラツフスク寨に達し、これよりイ
 ルチツシ號に搭して、インペラトリスキーに至り大樞に跨りてキヨ湖邊のマリイ
 ンスクに達したり、斯の如く露國は殆ど二世紀後再び黒龍江の占領に着手するの
 其來往は舊道に依らず十七世紀に於てポヤルコツフのアルカン河によりて發見
 せし道は既にハ、ロツフがオレクマ河に頼るの便を示したる時に棄てられオレ
 クマ河に頼るの道は又ベケトツフが後具加爾の上流より下りし時に棄てられし
 を以て、今は海路より黒龍江を経て溯航したりしなり是畢竟彼得大帝が露國海軍
 を創創せしより起りし者にして、當時支那人は唯黒龍江の中區のみ警戒を加へ、其
 河口及附近の海岸を顧みざりしかば、最初兩國の間少しく政治上の爭論ありしに
 止り、敢て露の行動を注意せざりしなり、文明國より幾千哩の彼方なる朔北の荒野
 に投せられたる一杯の人士は、數年にして赫々たる功業を立てたり、彼等は一千八
 百五十年ベトロフスコに衛所を設くるの許可を得、或は一千八百五十三年薩韃
 灣の最も樞要なる港灣を占領し、驛傳をサガレン島に設置し、或は黒龍江口にニコ

ライフスクを建てたり、これより該河の航行す可き處三百露里に達せり、
 是皆酷烈なる氣候の中に、微々たる軍資を以て成就したるもの願みればネウエル
 スコイは一千八百四十八年將校六人兵士二十三人を以て具加爾號に乗してクロ
 ンシタツトを出發せし以來僅に少數の援勢を得たりしのみ、今に於て當時殖民地
 に於ける最初の戍兵を見るも興なきにあらざる可し、即ちマリンスクは八名、ホ
 シニアクがデカストリー灣に、アレキサンドロフスクを立てしは三名にして、後四
 名の助勢を得、ネヴェルスコイはインペラートル灣のコンスタンチノフスクに入
 人を留め、ブルロツフはイリンスクに最初六人を有し、後僅に二人を得たるに止ま
 る、
 勢斯の如くなれば遠征者の資力は固より薄弱なるを免れず、一千八百五十二年春
 其有する所の船船は、外國形及び列舟を合して僅に五隻、皆狭少にして用に堪えざ
 るを得てネヴェルスコイは四月ベトロフスコに於て長二十八呎幅七呎の甲板船
 を製造したり、嗚呼ネヴェルスコイ及其部下の饑渴艱難を凌きたる堅忍や、吾人を
 して遙にポヤルコツフ、ハ、ロツフの効業を追想せしむ、然れども彼等が土人に對

する行爲に至りては、尙眞に感すべき者なり、かの粗暴なるコサツクの冒險者は、屢土人を掠奪し屢之を虐待せしも、露國の有名なる海軍士官は無上の恩愛を加へたり、實に北方の土人はギリアツクの祖先に征服せられしより以來、其貪婪の犠牲なりしが、ネヴェルスコイの言によれば、露人が黒龍江に駐留せる二年の間に、物價は十倍の騰貴を見るに至れりと。

ネヴェルスコイ及び彼の部下は、僻陬に艱難を嘗むると共に、聖彼得堡の有司の陰險なる反抗にあへり、夫のネセルロードは海軍中將アウチャチンを教唆して、痛く黒龍江及び大陸の占領に反抗し、サガレン島の占領は日本と紛議を生ず可しと主張せしめたり、チヴェルスコイが露京を去りたる後、韃靼海に要害の地を略せし時ムラビラツフは聖彼得堡に留りて、反抗の鎮壓に努めたりしが、一千八百五十一年歸て後は、力を盡して政府の既に承認せる政策を實行し、また承認を得べしと信ずる將來の施設を準備したり、翌年彼は再び後具加爾に赴き、ネルチンスクに於てコサツク兵を檢閲し、訓練の歩兵十二大隊及び豫期の騎兵三百に代ふるに、三千の騎兵隊新に編成せられしを知り、其成績の良好なるに驚きたり、而して彼が政府に向つ

首都に於ける
反抗

て常に主張したる、黒龍江航行の準備は翹首して其承認を待つ間に著しく進歩し、シルカ河の航路は既に精密なる測量を終り、汽艇アルグンは船臺に横はりて工事速に進行しつゝありき。

されどムラビラツフが聖彼得堡に於ける盡力の結果はさばかり迅速に顯はれず、キワ及びデカストリーの占領の如き批准未だ下らざりき、ムラビラツフ以爲くこれネセルロードの爲に遷延するならん、時に親友ペロノスキー職を退きければ、愕然として直に書を送りてコンスタン大公の援助を乞へり、蓋し大公の西比利亞に對して軍務を行ふや、常に果斷なりしを以てなり、幸なるかな既に言へる如く、ムラビラツフに告げずして黒龍江の左岸を河口まで探検すべく送られたる中佐アクトは此時該河の下流並に附近の海岸は、支那の占有に非ざるを報告したり、而してムラビラツフが孤立して反復論議せし處、正に之と吻合せしかば、此報告は實に貴重なるものなりしも、ムラビラツフは三年前ネヴェルスコイの報道に依て、黒龍江口の支那に屬せざる事及び露國船は支那人滿州人と親交を保ちて迄も其注意を惹かざる事を知りたるのみならず、二世紀前ハッロツフが黒龍江口の土人は

獨立なりと報告せしを見れば、この説に對する實證歴々たるを以て、アクトの言は決して斬新なるものにはあらざりしなり、

一千八百五十三年歐洲の政界紛亂し、露國は西歐諸國と交戦せざるべからざるに至れり故にムラビラツフは此際東部西比利亞の防禦方畧を定めん爲め聖彼得堡に赴き平常の精透を以て研究したる奏議を上つり、太平洋に於ける英國の勢力増進すると及び支那の彫弱にして露國の保護を要することを陳べ、露國が東方に膨脹するに當りて、其勢力の振はざるは本國と懸絶するに因るを説き、一千八百十二年以來西比利亞に關する措置昏睡せるを慨し、支那と外交上の通信をなすに當りては、外務省に必要な助言を與ふるに最も適當なる東部西比利亞總督を經由す可しと論したり、この方法によれば北京の文書は直にイルクウツクに於て檢閲して後、露土の必要に應じて意見を附し、帝都に送付するにより大に時日を省略す可しと彼は又英國の東方を經由するによりて、將來太平洋に起るべき緊要なる問題を痛論し、二十余年前露米會社が直にカリホルニヤ占領の必要を論し我之を占領せすんば合衆國之を併有すべしと喝破せし時、かゝる變事は遠く百世の後にあるべ

しとて之を嘲笑したる外務省の旨味無氣力を罵り、是等の先見は既に實現せしを指點し、且つ言へらく合衆國は北米を支配すべき運命を有するか故に、カリホルニヤの占領は唯一時の策たるに止まれども、他日之を合衆國に讓與せば以て兩國か交誼を増進すべし而して露國の正當の野心は東部亞細亞の太平洋岸を支配するにありと、

ムラビラツフが上書の直接の結果として、四月十一日露米會社をしてサガレン島を占領せしむるの勅令は下れり次て二十二日御前會議の開かるゝや、ムラビラツフは中佐アクト及び東部西比利亞參謀部の編纂せる地圖を掲げ、デカストリー灣及びキヨ湖を占領するの必要に就て有益なる報告をなせり、ニコラス帝は精密に地圖を檢し、ネルチンスク條約と比較して、アレヤ河と海との間に横はれる黒龍江地方を指點し、是即ち我有たらんと軍務卿に向ひて語を續き、我等は是地に就て支那と協定せざる可らずと然る後、ムラビラツフの黒龍江全圖を檢し、ムラビラツフに向ふて、これは絶好の地なれども、朕はクロンスダットより之を防禦せざる可らざるを考慮すべしと宣へり、

ムラヒョッフ直に答へて曰く臣を以て之を視れば遠く之を防禦する必要なし
 遙に近き所より之を守るを得ればなりと指頭を黒龍江の上に運ひつゝ後具加爾
 を示したりニコラス帝手をムラヒョッフの頭に加へて曰く呼ムラヒョッフよ卿
 は實に後日黒龍江の爲に分別を失はんとムラヒョッフ叫んで曰く否陛下も亦自
 から此路を指點すべしとされど帝は彼の肩を撫して結論して曰くさらば事實の
 那方に導くかを待たんと然るにムラヒョッフの宣言したる方向は暮年にして採
 用せらるゝの氣運に際會したり、

この御前會議は二個の貴重なる結果を得たりテカストリー及びキヨの占領に對
 する勅令ネヴェルスコイが實行の後に接手したるもの及びブレヤ河と海との間
 に横はれる地方に就て支那人と協商すべき勅令是なりこの最後の政策は黒龍江
 の西岸を占領する緊要なる手段としてムラヒョッフの正しく鑑定したる所なり
 しに外務省の亞細亞局はムラヒョッフの將來の計畫に對して危険なる打撃を興
 へたりムラヒョッフは西比利亞の嚴酷なる氣候と劇務とによりて多年痛く健康
 を害しマリンパドに行かざるべからざるにより亞細亞局は此問題に就て清國に

送るべき使節の派遣を其時まで遷延に附し支那官吏の傲然として權利を主張す
 べき處の不利益なる文書を草して之を北京に送りたりき、

全年(一千八百五十三年)十月ムラヒョッフのマリンパトより露京に歸るや支那と
 外交談判を開始する爲直に西比利亞に歸るの必要なるや否やを亞細亞局長に尋
 ねしに支那と特別の談判なしとの回答を得たりければ躬ら聖彼得堡に於て措置
 せんを願ひし幾多の問題を有するものから欣然として出發を延期したり然る
 に十二月の末に當りて使者イルクウツクより來り黒龍江問題に關し露西亞政府
 の照會に答辨するため支那の使節遠からずキヤクタに到來するを報したりムラ
 ヒョッフ之を聞て大に驚き直に亞細亞局長に向て其説明を求めければ局長は今
 は照會を吐露せざるを得ざるに至り既に北京より答書の到來せしをも語れり
 この照會は黒龍江の左岸に境界標を建立するの必要に就て支那人を承服せしめ
 んと企てし者なれば結局大跡の目的を破壞したり何となればムラヒョッフは支
 那人をして江左の地素より露國の有たるを暗黙の内に承諾せしめんと企望した
 ればなり、

支那政府は一千八百五十三年六月十六日の公書によりて、與へられたる機會を捕へ、ゴルビツザ河に標柱を樹つる爲め官吏を派遣することを公言したり、該地はネルチンスク條約によりて、明かに區劃せられたる左岸の部分なり、然るに露國政府の要求拙劣なるを以て、支那人はゴルビツザを劃して、黒龍江より露人を遮斷する所の保障となし得べき勢となれり、且つムラビョッフの幕僚が措置宜を失し、事局愈困難とはなれり、即ち一千八百五十三年十一月支那の使節ウヅラに達するや、キヤクタの市長は自ら外交政策を行ふと稱し、境界問題に干與し之に關する文書を蒐集し、イルクウツクなる廳吏に向つて命令を發し、且つネセルロードと直接通信したり、

ムラビョッフの政策

ムラビョッフは直にこの幕僚を黜け、國境問題は勅旨を奉せずして措置すべからざるを示せり、一千八百五十三年の末ムラビョッフは非常の困難に際會せり、彼は黒龍江の下流の左岸に就て、支那人と協定すべき勅令を以て、長く露國の掌裡を離脱せる黒龍江を回復する第一着歩なりと信し、欣然折衝の機を待ちけるに、亞細亞局の愚昧なる、而も刑事上の行爲によりて、新に障害を招きたり、事茲に至りては大

智大勇以て之を處理するにあらざれば、希望全く畫餅に歸すべきなり、然るにムラビョッフは黄金の産額一年殆ど一噸を超過することを、イルクウツクより聞き得たり、ければ行政上の智力機敏を證明す可きこの新材料を以て、黒龍江を占領するの必要を論じ、幸に政敵を沈黙せしめたり、

一千八百五十四年政治上の變動によりて、西比利亞に對する注意の變移するに乗じ、ムラビョッフは其經論を實行するを得たり、此時露國は土耳其と戰を交へ、英佛及びサルヂニヤと激戰せしが、露國の勢力を集中して、西歐の列強に抗し、極東等閑に附したりしは、既に二百年にして、政治家皆此政策を是認したり、故にムラビョッフは却て此機會を以て、西比利亞全土に對する秘密の慾望を以て満足すべき者と信じ、絶倫の豪勇を以て之を實行したりしかば、露國の權力は歐州に挫折せしも、太平洋に於て永久の權利を博したり、

ムラビョッフは東部西比利亞に於ける陸軍司令官なるを以て、萬一同盟軍の太平洋岸を攻撃する時は、之か防禦の方法を施さざる可らざるが故に、豫め親展書を海軍大將コンスタンチンに送り、陸軍の必要を開陳したり、其要に曰く、我率ゆる處

歩兵一万六千騎兵五千あり、就中一万三千は大砲二十門と共に國境を越えて進發す可しと雖も之を以てカムチャツカよりカラザヤに至る、海陸一万露里の大邦を防禦せざる可らず、歐洲に於ては西方の列強露國に大害を加ふる能はずと雖も極東に於て彼等が黒龍江口或はカムチャツカを露國より奪略するは決して難事にあらず、今や支那帝國は陸軍微弱にして勢威振はずと雖も、英佛の訓練指導を受けなば強盛に赴くべく、然る時は西比利亞は露領たるを得ざる可し、若し夫百年の間歐露の農民の過殖を収容すべきこの一大國を失はんか、西歐に於て如何に捷利を博するも焉ぞ克く之を償はんや、故にカムチャツカ、サガレン及び黒龍江を守衛するは刻下の必要にして又以て永く支那を制するの道なり、若し總督にあらゆる問題を所辨すべき全權を與へば五年以來準備せる方策を今日東部西比利亞に實施すべく而して此目的を達すべし、

通信の迅速又謀らざる可らず何となれば敵の艦隊は海によりて宣戰の報に接するが故に其報露都より西比利亞の廣野を経て送達せらるゝ前早く攻撃は開始せらるべきなり、之を以て水師提督アーチャチンの艦隊を日本に於ける危険の位置

より招還して、ネヴェルスコイの占領したる新港灣に備へ、艦隊に屬する汽船ボストックを以て、ペトロホーロフスクと氣脈を通すべし、而して糧食及び銃砲は黒龍江より輸送せざる可らず、こは目下汽船アルグンの竣工せるを以て、ネルチレスクと河口との連絡を通ずるに足れりこの方便によれば、後具加爾のネルチンスクとカムチャツカのペトロホーロフスクの間汽船の交通殆ど間斷なかるべし、曩に英國の支那と戦ふや決して三千人以上を上陸せしむる能はざりしを見れば、露國は黒龍江の下に大兵を送るの必要はあらざるべし、且つカムチャツカの沿岸は地理未だ明かならざるを以て敵は之を攻撃するに當りて非常の困難に逢着せん、黒龍江の航行に就ては既往三年間其河口に於て支那人が其地に着眼せざるを實見せしより考ふれば甚しき反抗は受けざるべく、縱令其事あるもこの方法は海岸のみならず滿州の防衛にも必要なることを説明するに難からず、方今支那は半は反逆者の手にあるか故に政府は國內の紛亂のために盡瘁せるを記憶して、遠境に力を用ゐざるや必せりと、

意見の正確夫れ斯の如し、而して露國が大戦に關係して生じたる状態は頗る危急

なれば皇太子議長となりて特別委員会を開き東亞問題を討議し一千八百五十四年一月十一日極東の國境問題はムラビョッフをして直接に北京政府と協定せしむるに決し、二月六日會文を以て支那官吏に變更を報じ支那滿州の通譯官及び外交書記をムラビョッフに附屬せしめ、又反覆論議の後支那人若し承認せざる時は、黒龍江に頼りて援勢をカムチャツカに送らんと決定したり、露國が百五十餘年間待ちに待たる時機は來れり、ムラビョッフの傳を書きたる者の説によれば、渠如何に固有の氣を振ふとも歐州に戰爭の破烈するなくば、この目的を達したるや疑はし、斯くの如くクリミア戰爭の結果は其時に顯はれさりしも露國は之によりて太平洋に門戸を開きたり、

ムラビョッフは初めて聖彼得堡に來りし時よりも、再來の時一層赫々たる成功を顯はしたり、彼は直に西比利亞に歸りて勅裁を経たる計畫を實行する爲め、二月十日露京を發し、三月中旬イルクウツクに達し直に黒龍江に航通を開始するの命を發したり、かして彼は太平洋岸に起る可き戰爭を恐れざりき、何となれば敵は地理に暗く我は黒龍江の新航路によりて敵の攻撃せんとする港灣に接近する事自由

ムラビョッフ
の新航路

なれば同盟軍よりも優勢ならんと推定したればなり、

ムラビョッフは沿岸とカムチャツカとの聯絡を維持する爲め主として黒龍江に頼ると同時に又舊道を取れり、彼は一千八百四十九年カムチャツカより歸る時アヤンを経てヤクツクに達する道路を踏破し、數ヶ月間定期の連絡絶えたるを見て冬季の交通を謀らんが爲め沿道に人民を移植するの認可を得、一千八百五十一年後具加爾イルクウツク州より百二戸を移したり、然るに移民は續々其耕作に適せざるを訴ふ而も公報は未だ其實を齎らざるにより依信すべき人物をして事實を探らしめんと欲し、ホルコンスキー親王の子を選定したり、親王は一千八百二十五年以後西比利亞に貶謫せられたる政治家の一人なりき、而してこの少壯の皇族はムラビョッフの擁びし人士として、如何なる場合に於ても自己の義務を實行するに適當なる力量を顯したり、彼の移住民の間に窒扶斯敗血病の蔓延し、牧草欠乏して家畜殆ど死亡し移住民は之が爲に官金を借りて漸く生活し其窮厄見るに恐びざるの狀を發見し併せて道路改修の必要を報告したり、彼は單身舊道によりて小舟にのり、或は馬を驅り或は徒歩峻嶺に攀し無量の困難を犯して二箇月の後、

其地に到りしと言は、黒龍江の航行は刻下の急務なるを知るべし、實に彼は四月未イルクウツクを發して、六月二十二日アヤンに達したるなり、同時にムラビョッフは最初の記憶す可き遠征を始めたり、是より先黒龍江の航通を開始するの報西比利亞に傳播するや一般は熱心に之を歓迎したり中にも後具加爾の人民は十七世紀に於てコサツク人か黒龍江に樹てたる、敢爲の功業を追想し其失ひたる國土を恢復し嘗て勇々しき防禦を以て名殘を留めたりかのアルバツンを再建せんと欲し、又イルクウツクの商人は黒龍江の海に達する直路にして、將來西比利亞の福利を増進するに必要なるを信じ、ムラビョッフの爲に遠征費を寄附するの希望を述べ彼がイルクウツクを去るに當りては盛宴に招待したり、其他沿道到る處饗宴歌舞を催し狂喜して之を厚遇したり、ムラビョッフは書を支那に遣りて露國は外國と戦争の爲總督をして官吏軍隊を派遣し露領の沿地を防禦せしむるを報し國境問題處分の爲、使臣會議を開くの時日及場所を指定せんことを要求したりかくて彼は四月十九日イルクウツクを去り、道を具加爾湖にとりて二十四日キヤクタに着し支那人が大佐ボザリンスキ

一の北京に進むを許さざるの報ウグラより到るを見て由來因循は支那の慣用手段なれば、之が爲め貴重の時を失ふの恐れなるを以て北京の回答を待たじと決心し、五月七日國境を去る七十哩のシルカ河に赴きたり、黒龍江航行の準備はこゝに海軍大尉カサキーウキツチの指揮の下に迅速なる進行をなしつゝ、ありき、カサキーウキツチはムラビョッフが股肱の一人なり、

當時シルカ河は西比利亞の靜謐なる河流なるにも拘らず稀有の盛況を呈したりき、コサツク人や兵士は忙しく河岸に來往し小艇及び筏は兵器糧食を乗せて輻輳しアルグン號は中流に碇泊したり、本船は黄金採取の豪商クズネツフの寄附に係る十萬留を以て、ムラビョッフの命により製造したるものなり、ムラビョッフの此地に到るや、士民は非常の愛を以て之を迎へ彼の命名日五月九日には森嚴なる祝宴を張り適當の頌詩を朗讀して、彼得大帝の志を行ふ是この人と稱揚し或は煙火を擧げ或は既往四年間の施政の結果を示せる鮮麗なる記述を揚げ裝飾電燈を點じたり、所謂施政の結果なるものは後具加爾に於ける改良該地に於けるコサツク兵の編制黄金の増加、黒龍江の航通に關する汽艇の製造是なり、

ムラビロツフは歴史上貴重すべき事變を取て士氣を鼓舞するの機會を逸せざりき、彼は遊人がアルバツン明渡しの際携へ來りしと傳ふる處女マリヤの像を奉じて到る處尊嚴なる祝福を施さしめたり蓋し宗教は莫斯科の權力を確立し蒙古ボイランドの輻輳より露國を脱せしめたる要素なりしが今や太平洋の沿岸に沿ふて進發する遠征隊にも大に勢力を附與したり、ムラビロツフ即ち剴切なる數語を以て軍隊に告げて曰く諸子今や出發に際す須らく上帝に祈りて旅中の安泰を請ふべしと、乘一齊に答へて曰く謹て盡力せんぞ、

一千八百五十四年五月十四日ムラビロツフは祝砲喝采に送れてシルカ河を出發す、勇士八百とコサツクのソトニア山砲隊より成れり、汽艇アルグンを主として舟筏七十五隻、三露里の間前後相接して流を下る小艇は悉く食料を満載して千五百アード即ち約廿五噸に及べり、こは遠征の用に充つるものとカムチャツカに輸送する者なり、五月十七日黄昏小船隊はウストリールカに達したり該地はアルグンシルカの相會して黒龍江をなせる所、同夜こゝに碇泊して翌朝出發す既にしてネルチンスク條約によりて禁制せられたる大河に入るや樂隊は「神我皇を招く」の曲

を奏し、ムラビロツフは砲坏に江を酌で遠征の成功を祝したり、五月二十日小船隊は古城アルバツン墟址を過ぐ樂隊は讚美歌を奏し兵士は起立して脱帽せり然る後ムラビロツフは幾多の兵を従へて上陸し、遺跡を検して祖先の英魂を留めたる處に跪き、肅然として祈禱したり、五月二十八日遠征隊は支那の領地アルグンを距る二十八露里のセヤ河口に達したり、ムラビロツフは使を遣はして其守令に問ふた、國境問題に關する指令を受けたるや否やを以てし、且つ黒龍江航通の許否を問に、守令は突然不慮の問題に接して大に驚き航通の許す可らざるを答へんとせしむ、幾多の船隻集り來れるを見て愈驚き、好ましからぬ外人の一時も早く去らんとを望めるなり、思ふに汽船は彼の爲には斬新異様の者なりしならん、其後行程全く平和にして六月二日スンガリーに達し六月五日ウツスリーの會流する處に至れり、ムラビロツフ其形勝明媚なるを賞し叫んで曰く宜しく都邑を設くべしと當時黒龍江に關する圖志は絶えてなく亞細亞全圖を以て其距離を測量せしかば、六月九日ウツスリーの下流二百露里に達したる時、キヤ湖は其近傍にあらんと想像せしが翌十日の夕露國士官の指揮せる小舟の流を溯るものに逢ひ之にマリオンス

クまでの里程を問ふ迄は其誤まれるを見出し能はざりき其答は實に意外なりしなり尙五百露里を行かざる可らずと、

ムラヒョツフは即ち先づ獨りアルゲン號に搭して六月十二日マリンスクに達し、ネヴェルスコイが備ひし土人の水先案内によりて六月十四日江に看たしり、河流の大半は航路殆ど不明にして頗る困難を感したれども、黒龍江の下流に至りては土人甚だ慇懃にして進んで助力せんとする程なれば毫も苦心する所なかりき、ムラヒョツフは殖民地の秩序整然たるを見驚喜して曰く黒龍江の下流の地は常に露領たりしが如しと其持論たる支那人の該地を占領せざりし事及び獨立の土人は露國の王權を承認するの意あることを、實際に就て確め得たるを以てなり、ネヴェルスコイは直にデカストリーよりマリンスクに來り、ムラヒョツフと會して二十年前露京に於て議したる計畫の實現せしとを祝したり、ムラヒョツフは例の豪氣を以て視察の途に上りたり彼は徒歩して森林の小徑を穿ちデカストリーに着して帆船ポストックに搭し、インペラトルスキ灣に到り水師提督アーチャチンに會し、然る後鞆靺海峽を経て北の方ペトロフスコに航し

部下の一部はポストックによりてアヤンに到らしめ、自ら陸路ニコライフスクに到り清國政府の答書に接したり、其詞に曰く弊邦應に更に命じて國境各地を巡視せしむ可しと既にしてポストックのニコライフスクに歸着するや、ムラヒョツフは二十日イルククツクに向ふて出帆し八月九日アヤンに到れり、

沿岸地方を巡廻する殆ど二箇月、ムラヒョツフは主として武備に注目し、二三の散在せる衛所は防禦の情態頗る薄弱なるを見出せり、ニコライフスクは兵士三十人にして同數の武器と大砲二門を有するも、其一門は廢物に歸せり、ペトロフスコは兵士二十五人皆フリント銃を有し、インペラトルスキ灣は十人アレキサンドロフスクも又同數にして大砲一門を有せり、小銃は皆舊式にして大砲三門に充つる火薬は各六十磅彈丸二十五個なりき、海軍の不備又斯の如く、デカストリートには運送船ドゥキナ、イルチツシ、具加爾帆船ポストックあり、インペラトルスキ灣には軍艦ハラダ及び露米會社のニコライ、プリンズメンチコフあり、軍艦バラダ帆船ポストックは通商條約の爲日本に派遣されたる中將アーチャチンの率ゆる船艦の一部なりしを、外寇の避く可らざるを察して俄に長崎より呼び還したるなり、

ルベットオリブツサも又其一部なりしを、ベトロポーロヴスクの防禦を助くる爲に送られたり而してサガレン島に駐在したる分隊はブーチャチンの命によりてインペラトルスキに集中したりネヴェルスキこの方略に反對して曰く軍隊を集中するよりも之を全海岸に分配して敵に港灣の封鎖を宣言せしむるは其露領たるを承認せしむる所以にして、此際兵を用うるの道は實に要害の地を固守するよりも政治上より考察するを遙に緊要なりと、

ムラビラツフが黒龍江の下に率ゐたる援勢は左の如く部署せられたり、

コサツクのソトニア隊は山砲四門を以てマリンスクに屯する事、

二百人を以てニコライフスクを防守する事、

デカストリーマリンスク間は交通の自由頗る必要なるを以て他の二百人はキツ湖に屯し森林を経て、デカストリーに道路を開く事、

残余の四百人は運送船ドウキナを以てベトロポーロヴスクに送る事、

水師提督ブーチャチンに屬するバラダ及びポストツクはニコライフスクに於て越年し、サガレン島より引揚げたる軍隊をアラスカに送る事、

此の如くにしてキツ湖上の分隊は非常の困難に遭遇したり、人口稀疎なる荒野に於て彼等の頭はせる堅忍は茲に之を詳述せざる可らず、抑人跡未だ到らざる森林に於て、道路を開鑿するは非常の難事之に伴へり或は大樹を倒し或は柴束を道に埋め或は數多の河流に橋梁を架設せざる可らず、況や西比利亞の森林は蚊蠅多く日夜來襲し陰濕の日最も劇しく頃刻の休息をも許さざるなり兵士の食また専ら鹽藏にして早く腐敗を來したれば僅に醃粥に砂糖を和して糊口に供せしがこれ又麤て欠乏して工事は前途未だ十露里を餘せり然りと雖も半途にして止む可きにあらざれば指揮官グレンは糧食蒐集の爲一部の兵をマリンスクに遣りたれども數日を待て歸り來らず、森林に苦める不幸の輩は或は鳥獸を獵し或は艸根木皮を咬めり隨ふて疾病流行せしが、偶ドウキナ號の士官狩獵の時之を發見して直に船醫一名及び食料を送りければ彼等は辛うじて氣力を回復して漸く道路を完成したり、

是より分隊はマリンスクに歸りて、ニコライフスクに進發す可き命を受け、ニコライフスクに於て又ベトロフスコに赴くべきの命に接したれば、一休息の暇だに

なく、バラダ號の水兵三十人に送られて黒龍江を下りし時の老船に乗り、該河を下りてオコック海に浮び、暴風に逢ふて沙濱に打ち揚げられ、道なき海濱に沿ふてペトロフスコに入り、イルチン號によりて一週日の後アヤンに送られ、大砲四門と共に運送船カムチャツカ號に移され、英國の捕鯨船を捕拿するの命を領したり、然りど雖も探索其効なくして數日の後アヤンに還り、四週日淹留の間に該港を防禦すべき二基の砲臺を建築し、九月中旬再びカムチャツカ號に港してアラスカに到れり、この分隊は三月にして人跡未到の森林に道路を敷きたり、黒龍江を下れり難破に逢へり、オコック海を巡航したり、二基の砲台を建築したり、嗚呼壯なるか、

英佛同盟軍と

カムチャツカに送られたる他の分隊はより多く幸福なりき、彼等は英佛同盟軍と戦ふて、最も赫々たる勳功を立てたり、顧みれば一千八百四十九年ムラビョッフはペトロポロフスコを擁するアバチャ灣の形勝を賞し、宏大なる防禦を計畫せしも速かに實行す可らざるを見て、太平洋の重鎮となすべき主要の砲臺の建築に關し緊要なる注意を興へしかば、守備兵は歐州の戦亂を開くや急に港灣を警戒し、援兵の黒龍江より至るを待ちて、共に砲臺の建築に従事したり、彼等が海軍の攻撃を

アバチャの軍

恐れしは適當にあらず、蓋し英佛は主要なる露國の軍港を滅し、自國の商船をして自由に往來せしむるの目的を以て、太平洋に優勢の艦隊を編成したればなり、然れども聯合軍はムラビョッフの先見せし如く、上陸すべき沿岸の地理に暗くして勇斷果決を欠きたり、詳細は後章に譲る)

アバチャは灣口狹隘なりと雖も、内は廣濶にして殆ど圓狀をなし、幾多の小港灣を有す、其一なるペトロポロフスコは大陸の沿岸と平行して、北より南に奔る處の狭き丘陵的半嶋によりて形成せらる故に、港内長橢圓形にして、大陸より殆ど直角に半嶋に迫まる處の長沙嘴は之を平分せり、而して港の北部は全く風波の患なきを以て、船は半嶋と砂嘴の間なる狭き門より入るべし、半嶋の丘陵をシグナルヒルと云ふ、其北に同狀の山あり、ニコルスキーと稱す、尙遙に北すれば湖水あり、灣の一面即ち大陸の方には前記の兩丘と平行せる長嶺あり、グラスニーヤル(楮山)と云ふ、ペトロポロフスコの市街は灣の北端にして、ニコルスキーとグラスニーヤルとの間に位す、而して海軍の攻撃に對する灣内の防禦軍備左の如し、

第一砲臺はシグナルヒルの極端にありて、左方(西)より灣口を防禦す、大砲五門

第二砲臺は港を遮断する所の砂嘴にありて、右方東より港口を防禦す、是最も堅牢なるものにして大砲十門

第三砲臺はシグナルヒルとニコルスキーの地峽にありて、背面より市街及び港内を防禦す、位置甚だ危険なり大砲五門

第四砲臺はクラスニーヤルの傾斜地にありて大砲三門

第五砲臺は湖邊にありて、敵の陸戦隊ニコルスキーを攀づる時、砲撃するに備ふ、ドゥキナ號より陸場せる大砲四門、小口徑の無効なる古砲六門

第六砲臺はニコルスキーの北麓にありて大砲六門

以上算し來れば、ペトロポロフスクは大砲三十九門を以て守護せらるゝ雖も、都會の位置特殊にして、或は港口を防ぎ、或は半島ニコルスキーを備ふるなど、諸方より之を防守するの必要あるを以て、砲臺各所に散在して砲火を一轉に集注する能はず、一砲門充つる所の彈丸僅に三十七個なりき、四十四砲門のオロラ號及び二十七砲門の運送船ドキナ號は、沙嘴の近傍に船体を藏して、港口を守り、恰も胸壁より大砲を放つか如き態度を取れり、守兵はムラビロフの派遣したるものとして一

英佛の兵力

千、他は該地の商人官吏より成れる若干の義勇兵及び少數の土人にして、敵若し上陸せば三斤の野戰砲を發射して撃退するの計畫なりき、

攻勢の英佛艦隊は、アレシデント五十二砲門砲艦ビーク四十四砲門アンヒライト(三十四砲門)三百馬力の汽船ウキラゴ六砲門を英の船艦とし、ラポルド六十砲門砲艦ウーリヂス(三十二砲門)二檣船オブリカード(十八砲門)を佛の船艦とす、實に彼等は合して二百三十六門の大砲を有せり、

是より先軍艦アレシデント及びラホルトは水師提督フライス及びフェヘルリエルデスポアントの旗を掲げて、太平洋の對岸秘露のカラオに碇泊せし時、一千八百五十四年四月二十六日クロスンダットより來りし露國軍艦の出帆を祝したり、此時既に開戦は布告せられたるなりと雖も、其報未だ南米の沿岸に達せざりしなり、五月七日汽船ウキラゴによりて戦争の第一信を得たれば、提督フライスは太平洋に於ける聯合艦隊の指揮官となり、然れども英佛の船舶は各所に散在して、汽船電線を以て之を招集すべき術なければ、之を整頓するは至難に屬するのみならず、露艦の數及び位置に就ては精密の報告なし、西比利亞沿岸に關する精密の智識を

有せざりき、太平洋に貿易する英國船は斷言すらく、此際露人はダグヘッドポーターの故智に倣ふて、商船の全滅に着手せんと、

水師提督プライスは突然雙肩に落ち來りたる責任の重きを感じ、一切の事變に應ずべき準備に心を勞して大に遅延し、漸く五月十七日カラヲを去り、七月三日までマルケサスに停航し、七月十七日サンドウキツチに達し、漸く船艦を收蒐して七月二十五日カムチャツカに向け出發せり、プライスはサンドウキツチに於て、六月末即ち一箇月前露艦ドウキナが開戦の報を持してサンフランシスコに向ひしを聞き、遅延の爲貴重の時機を失したるを悔ひしも、既に及び難かりければ七月三十日(サンドウキツチを出帆せし後五日)商船保護の爲艦隊の中より二艘を撰びてサンフランシスコに向はしめたり、

一千八百五十四年八月十七日(太陽曆八月二十九日)アパチャ港口の燈臺より艦隊出現を信號したる後幾何もなく、米國旗を懸へず所の三檣汽船進港し、港口なるシグナルヒルの三裡内に接近して、海底を測量する如く見へたり、されど一艘の端艇海濱より來るを見るや、其看破せられしを察してアパナチ灣外の艦隊に加はれ

り、プライスは自ら形勢を探りて全く露軍の守備を知り得たり、八月十八日(八月三十日)午后聯合艦隊は灣内に入り、砲臺と無害の砲撃を交換して灣外に去れり、其夜アレシデントに會議を開きて翌朝攻撃に決し、旗艦二艘は第一砲臺を滅ぼし、ビーク號は第四砲臺を滅すととなれり、

二十九日(八月三十一日)朝攻撃の準備整ひしが、提督プライス自殺の報は艦隊に傳へられたり、思ふに彼は過大の責任を負ひて數月間苦心せしかば、一時の發狂によりて非命の死を遂げしならん、然らすんば其性質温和信仰堅固なれば、心緒健全の時焉ぞかゝる行爲に出でんや、彼はペトロボールウスクに達するの遅かりしを悔ひ敵地の要害を知りて攻撃の成功如何を疑ひ、聯合軍の不幸艱難を豫想して心緒錯亂し、攻撃の將に起らんとするや益々煩悶し、遂に自ら刃に伏すに至りしなるべし、聯合軍は此非常の事變によりて大に混亂を生したり、蓋し彼の智畧と名望とは聯合軍の指揮官たるに適したるも、其逝去の後には之に匹敵すべき者なく、主權は佛國水師提督に歸したれども、英國の艦隊はビーク號の艦長之を指揮し、兩將の間意見の衝突を來せり、

八月二十日(九月一日)珍らしくも天氣晴朗の朝艦隊の運動は今や攻撃の起らんとするを示したり汽船は艦隊の最大なる三隻を曳て除るに進行し第一砲臺及び第四砲臺を攻撃すべき位置に置き四艘の軍艦徐ろに一列となりつゝありし時クラスニールの第四砲臺は其永く抵抗す可らざるを察し猛烈に發砲するや艦隊は直に之に應じて砲臺の大砲八門と軍艦の大砲八十門との間に激戦を開きしが砲臺は頑強なる抵抗の後遂に沈黙に終れり第一砲臺はシグナルヒルの峻巖を背にし掩蔽なきが爲に甚だしく損害を受け断片は紛飛して人を傷け大砲の射撃を妨げられたり第四砲臺の沈黙するや佛蘭西艦隊の一分隊は上陸して國旗を掲げたりされど露軍の傳令官ゴゴツフは砲手二十八人と共に大砲三門を取つて退陣し速に援兵を得て還り勇を鼓して之を砲撃しければ素より優勢の兵なれども部伍を亂して端艇に退きたり

この激戦の後艦隊の大部は午後シグナルヒルに沿ひて稍進み露艦オーロラドゥ
*ナの砲火を避け得べき點を取りて第二砲臺の攻撃を初めたりこの砲臺は守兵八十人にして大砲十門を備ふプリンスマクシユトツフ冷然として之を指揮し火

藥を濫費せずして正確に發砲し以て其弱點を偵はしめたり聯合軍は攻戦の間一哨兵の警鼓の音調整然亂れざるを見て其冷靜なる剛勇に感服したり此日交戦殆ど暮に及びて勝敗未だ決せず聯合軍遂にシグナルヒルの第三砲臺附近に上陸せんとして失敗し元の備地に退きたり聞説ラホルト號の發砲は八百六十九回に及びりと露兵は終始敏活に砲臺の修繕に従事し翌朝は大砲數門の廢物となりし外前日と殆ど同一の情態に復したり死傷僅に十三名

この夜聯合軍の會議に於て退去を主張するものありしがやがてこの卑怯なる提議は翌日に至りて廢棄せられたりそはプライスを埋葬せんとして上陸したる者二人の米人に逢ふてペトロポログスクの地理を聞き初めてニコルスキー山の北方に海より都邑に直通せる良道あるを知りビーク號の艦長サーフレデリッキニコルソンは海岸の砲臺を破壊してニコルスキーの近傍に上陸し直に進んで都會を襲ふべしと提議せしに因れりこの提議は聯合軍の主力即ち艦隊の大砲を利用する能はざるも水兵を以て攻者の不利益なる地に訓練ある歩兵を撃つゝの欠點ありと雖も將士皆必勝を期して熱心に之を賛成せり此時港口は僅に一砲臺及び

二軍艦を以て守護せるを以て、ローク艦長は之を冒すを危みたるも、必らずや前者よりも不幸なる結果にはあらざりしならん。

八月二十四日(露曆九月五日)英味聯合軍は第二攻撃の準備に着手したり、彼等は初回の如く港により進入せしめて、シグナルヒル及びニユルスキの砲臺を攻撃せんとす、蓋し聯合軍是等の砲臺を破壊し上陸せば、直に丘陵を占領して灣内に碇泊する露艦を攻撃し進で都會を攻撃するを得べし、而してペトロポロウスクを障蔽せるシグナルヒル及びニユルスキのアバチャ灣に面する處は、榛奔を以て蔽はれ殆ど海中に直立し、共に都邑と港内とを障蔽する天然の胸壁をなせり、又ニユルスキの都會に面する方は、稍稍直にして其北麓には彼の米人が教へたる良道あり、湖水と丘陵との間に儼存せる第六砲臺を経て直に都會に達せり、砲臺は土造にして堅く柵を繞らし濠を以て之を圍めり、

午前七時三十分汽船は濃霧を冒してプレシデント及びブラホルトを曳きつゝ、除に進行し第三砲臺の前に陣せり、第三砲臺は半島の地峽をなせる兩山の間におり、露兵直に砲火を開くや、英艦は尙曳れつゝ進行せる時側砲を放て之に應じ、同時に佛

艦は岸に近く碇泊せり、半餉に足らずして砲臺全く滅ふ、かくて英艦は曳れて第七砲臺の前に到り、劇烈なる攻撃を加ふると一時間にして之を滅はしたり、露兵は勇氣熱練を以て大砲を發し軍艦に損害を與へたれども、兩砲臺の指揮官負傷せるを以て退却したり、

聯合軍は第一の部分即ち砲臺の破壊に成功しければ、第二の部分即ち都會の占領を果すべし、かくて殆ど半時の後二十五艘の短艇約一千の兵士を陸上に送るや、佛國水師提督は都伍を整へてニユルスキ山の北端を過り、第六砲臺を指して湖邊の道を進行せり、城兵之を見て一千八百四十九年ムラヒョツこの砲臺の位置を撰ひし時、教たる處の法に遵ふて榴彈を發射しければ、聯合軍潰走して山に登り眼下に第六砲臺を砲撃せり、オロラ、ドウキナは山下の灣内にあり、聯合軍は又ニユルスキとシグナルヒルの間にある地峽より上陸したり、

カムチャツカの知事アドミラルザポイコは第六砲臺の安全なるを知り、部下三百余を集め銃鎗を以て敵を海濱に追撃するの命を下し、ニユルスキの方面に赴かしめたり、時に聯合軍は其山頂を領し之より將に都の方に下らんとす、故に露兵は

裏裡に匿れ砲台の濠側に潜み、輕少なる野戰砲に榴彈を裝して之を攻撃し、俄に銃鎗を揮ふて肉薄し劇烈なる接戰の後勢を得て敵の山に登るを追ひ、海洋に面する處峻險にして殆ど退却す可らざるに乘し、銃鎗を以て海中に衝き落したり而して海中に没せしは巖石に觸れて摧碎したり、地峽の邊より上陸したる軍隊は、今や山の北麓より追窮せられし分隊に合して、海濱に集り艇を争ふて混乱せるを露兵は山より絶えず砲撃しければ、艇中に斃るゝ者夥しく、又溺死する者も多かりき、露兵の計算によれば敵の死亡三百余にして、海濱に倒れたるもの二十八、其他士官四人、族數旆士官の佩劍七口、旋條砲五十六挺、捕虜四人、而して露國は僅に死亡三十一、負傷六十五、負傷中に二名の士官ありしのみ、

ペトロポロフスキの劇戰はクリミア戰爭の間幕にして、極東に於ける最も緊要なる事件なり、其起るや最も緊要の時にして、またムラビョフの卓見なる計畫を進むるに最も適當なる事情の下に起れり、何となれば黒龍江航行開始の後間もなく、此戰爭起り、黒龍江より輸送したる援兵を以て勝利を得たればなり、露人はかく東陞に不慮の功績を樹てたりと雖も、母國は他の戰爭に於て一大不幸を招きたり、

捷報聽て西比利亞に傳播するや萬衆の歡喜斜ならず、皆この成功を以て黒龍江の航行に歸したり、ビシヨフアインノーセント書をムラビョフに送り、祝して曰く、黒龍江を経て兵員糧食を送らざりせば、ペトロポロフスキ今や灰燼に歸せるならん、されば遺般の捷利たる全く適當の時機に航行を開らきて、カムチャツカを救濟し、以て該河通航の利を示せることを喜ぶの外なし、是より先遠國の黒龍江に對する世人の感想冷淡なりければ、ムラビョフが彼等の熱心を喚起するは常に甚だ困難なりき、彼聖彼得堡にあるや世人は其熱誠なる愛國心に對して、從順に其計畫を傾聴するも其イルクウツクに去ると共に忘却したりしか、捷報の一度達せしより愛國の士初めて極東に注意するに至れり、是より先大尉コルサコフは黒龍江通航の成績を報告する爲、ムラビョフの使者として聖彼得堡に到着するや、ムラビョフの命に隨ひ直に軍務省に出頭し、然る後チエサリウキツチ及ムラビョフの命に隨ひ直に軍務省に訪問し、遠征に就て最も綿密なる報告をなせり、チエサリウキツチ、ムラビョフの報告を讀みて、嘆して曰く、露國は黒龍江に堅固なる足場を得たり、而してこの成功は全くネヴェルスコイ、アサキウキツチ、コルサコフに歸すべか

らず、惟ふにムラビヤツフは自己を記載するを忘れたるなる可しと翌日コルサコツフのニコラス帝に謁するや、帝はコルサコツフを抱擁して遠征士官一同の昇任を仰せられたり、其後幾何もなくペトロポロヴスキの捷報達するや、極東に對する熱心は旺盛し、ムラビヤツフの所説は架空にあらず、其黒龍江に頼りてカムチャツカを防守するの策は實際有益なるを諒せり、嗚呼彼の卓見彼の精敏は露國が黒海に於て困難に陥りし時太平洋に於て其不幸を救済したりしなり、

前述の如くムラビヤツフは一千八百五十四年八月二十日聯合軍がペトロポロヴスキに第一攻撃を加へし日、アヤンを去りて、九月二十一日イルクウツクに若し、アヤンに達する驛路の移民を視察し來れる、ホルゴンスキーに會し、其完全に義務を果せるを賞して、一層緊要なる計畫の實行を托したり、黒龍江下流の沿岸に農夫を移住せしむる是なり、

ムラビヤツフは決してペトロポロヴスキの勝利に誇るとなく、戦争の終結せざる間は一層劇烈なる攻撃に準備するの必要を認めたり、而して其作戦計畫たるや甚だ珍喜なる事情の下に實行せらるゝを以て、幾多の奇異なる出來事を見たり、蓋

し露兵の根據地たる後具加爾は、敵の侵寇せんとするオコック海の沿岸、樺根灣及びカムチャツカと遙に相隔つと雖も、是等の沿岸は氣候嚴烈にして聯合軍は數月間こゝに航行する能はず故に、ムラビヤツフは殆ど亞細亞の中心たるイルクウツクに於て、聯合軍の準備を研究しつゝ、從容として防禦の策を講じたればなり、彼初め聯合軍が翌年夏大兵を以てペトロポロヴスキを攻撃するの報を聖彼得堡に受け、後一千八百五十五年二月二十五日附の書によりて、攻撃の準備及び一月十五日フレストに駐在したる佛國水師提督の新任新聞紙上に顯はれたるを知り、艦隊の來寇は六月の終か七月の始めかなるを察し、機敏勇斷宜を制したりしが、聯合軍は一は沿岸の地理に通せざるによりて、また前年の如く屈辱を蒙ふれり、冬季に至りて戦争の中絶するや、ムラビヤツフはペトロポロヴスキ及び密西亞艦隊の保全を講じ、聯合軍の上陸を防禦すべき第二の援兵を黒龍江より輸送するの準備として、マリインスクよりニコライフスクに至る沿岸に移住せる團體を撰びて、其旅裝治むる等主要の目題に若目したり、ムラビヤツフは聯合軍がペトロポロヴスキ攻撃の準備をなせること、を聖彼得堡より傳聞するや、敵の優勢なる援兵の到

着する前之に對する防禦を爲し得べきを認知するも不幸にして兵を派遣する能はず且つペトロポロフスキの糧食欠乏の故に、彼は西比利亞總督として赴任せし時より、懷抱する處の計畫即ちアハチャ灣に於ける軍港の廢止を決心したり、この決心たる一日も之が實行を猶豫せば、露國艦隊の全滅せらるゝなきを保し難ければ、ムラビョフは之を政府に問ふの暇なく、我職權を以てペトロポロフスキの守備を撤し、市民を移すの命をアドミラルザボイコに傳へんが爲、十二月の始マルチノフを遣はしたり、かくてマルチノフは嚴冬に於て、最も不健康なる地域を通過したり、

一千八百五十四年九月三十日ムラビョフは書を支那政府に發し、嚴にコロネルザボリンスキの北京に進發するを拒絶せられし事實に就て注意を促したる後、這般國境問題議定のため會見の地を定めんことを照會し、また翌年の夏英佛の攻撃に對して沿岸を防禦すべき、武装兵を黒龍江より輸送するの計畫を通知したり、黒龍江の下に送るべき第二の遠征は、前回よりも一増大なる規模を以て準備せられたり、陸軍は殆ど三万にして、他にホルコンスキの募集したる移住民あり、その

貨物七千噸は荷舟百三十隻を以て運輸すべく、工匠一千人シルカ河に於て之が製造に従へり、ムラビョフはまた黒龍江口及海岸を防禦せんため、陸運によりて彈藥の充分なる供給と共に、大砲の運送を謀らんと企てたり、露人がかく重大なる材料を、かく遠遠の地に致さんとするは、其陸運の不便に屈せざる膽力を證明するものなり、大砲はトホルスク、エカテリンバーグより四千露里の間に曳かれしか殊に後具加爾の山地は道路最も險惡にして馬匹の斃るゝもの六十頭に及べり、ホルゴンスキーは、黒龍江下流の荒野に移住する農民を撰擇し、之に愉快なる移住をなさしむる準備に汲々たりしが、遂に四百八十一人より成れる五十一戸を撰び、豊富なる糧食の外家畜種子農具を準備したり、而してフリアット人は義侠心を以て、牛羊五百頭を是等の移民に贈與したり、

マルチノフは千八百五十四年十二月の初、イルクウツクを去り犬楯に乗りて、ヤクツクオコック及オコック海の荒涼たる沿海を經過し、千八百五十五年三月三日、ペトロポロフスキに達したり、里程八千露里月を閲すること三空前の迅速なりき、ペトロポロフスキの守備兵は糧食欠乏したれども、決死防禦に當らんと誓ひ

たりしかば此地を棄て、直に船艦を武装し住民及び一切の動産を移すべき意外の命令を聞て大に驚きたり、アドミラルザポイコは頗る敏活に命令を實行し、三月三十日各種の貨物千四百噸を七隻の舟に積載し之を武装して航海の準備をなせり、しかるにペトロポロフスクは海路未だ開通せざるか故に、結氷を截斷して一條の航路を作り、四月五日デカストリーに向ふて出帆したり、時に英船エンカウンター及バーヤクタは灣口を巡航したりければ露人は濃霧に乗して虎口を脱したり、而してペトロポロフスクに残りし一小軍はマルチノッフ之を指揮し、同盟軍の接近する時は内地に退去することとし、ホルセリック(ペトロポロフスクの西百二十哩にあり、人口殆ど五百に一小船を留めてカムチャツカ諸港との交通に供せり、

千八百五十五年大平洋の聯合艦隊は前年の如く失敗したり、露國水師提督アドミラルフリーション之を襲へりと雖も、英國水師提督ブルース全權を掌握し、兵力を集めてペトロポロフスク及露國艦隊を撲滅せんと決心せり、かくて散在せる船員の集會場をカムチャツカの南端と定め、英佛の船舶はこの指定地向ふて大平洋

に速力競争を催したり、聯合軍は佛艦五隻英艦九隻にして大砲四百五十門を有し、其力目的を達するに足れりと雖も、ペトロポロフスクより餘り遼遠の地に集合し爲に露の動靜を仔細に觀察する能はざるの過失に陥りたり、

前記の英艦二隻は四月二日(十四日)アバチャ灣の偵察を命ぜられたるも、露兵か務に乗して巧に逃亡したる三日の後なりき、一月後即五月二日(十四日)アドミラルブルースは集合地に達し、直に全艦隊を率ゐてペトロポロフスクに航したれども、五月八日二十日其到着せし時は露人の退去したる一月有餘の後にして、其地は荒廢に歸し僅少なる外國商人の屋上に亞米利加の國旗飄々たるを見たり、

アドミラルブルースは、露國艦隊を搜索するに臨み、支那艦隊より加はりし船艦をして、韃靼灣を探索せしめ、躬らアラスカに向つて出帆し、千八百五十五年七月一日(十三日)北緯五十七度なるアラスカのシッカに達したれども、露艦の隻影なく、其地に移住せる僅少の商人は土人を防禦する能はざる時、便乗せしめんことを要求する有様にして、攻撃の價值なければ彼は再び失望せり、吾等はこれよりムラビョッフの命令を迅速に實行して、撲滅の災を免かれし露國艦隊に就ていはん、アドミラ

ルザボイコは、ペトロポロフスキよりフリゲートオーロラ、砲艦オリウツサ運送船ドウキナ、イルチツシ、具加爾及端艇一隻を引率し、カムチャツカの海岸に沿ふて、オコック海に航し、風濤の難に遇つて其月の過半を費したり、四月二十五日フリゲートオーロラはインペラトルスキ海に入り翌日オリウツサと會し、黒龍江の沙洲を通過する能はずして、こゝに冬季を過さんとするフリゲートバラダに遇ひたり、バラダは船體老朽にして活劇に當るべからざるにより、士官一人兵士十人を守り敵もし接近せば火を放て去るべきの命を受け茲に止まり居たりしなり、オリウツサの艦長はペトロポロフスキに航する時、米國の捕鯨船より七帆船一汽帆より成れる聯合艦隊かペトロポロフスキ攻撃の準備及糧食購入のため、一月二十六日サンフランシスコに向けホルム、を出帆せしを聞けり、こは非常に緊要なる警報なりき何となれば聯合軍にして若し非常の遲延を生せんは、今や己にカムチャツカの沿岸に達したるべく、而して露國の艦隊逃避せしを知らば必らずオコック海の捕鯨者に露艦の消息を聽て、之に追窮すべしと信したればなり、於是アドミラルザボイコは軍議を開きて迢に北方に退くに決したり、かくてオーロラ及

オウリツザは直に出帆して、五月一日デカストリー灣に到り、そこに運送船ドウキナ、イルチツシを見出したり、かくても露國の小艦隊は依然頗る危險の位置にありき、ネヴェルスコイは陸路デカストリーに來り報して曰く、黒龍江には五六月の交に至らざれば解氷を見ず、而して英國の支那艦隊の一部はオコック海及び韃靼灣を封鎖すべく派遣せられたりと、されば優勢の聯合軍韃靼海峽の南口より、何時闖入するや測り難く、しかも露軍の逃れ出でんとする該灣の北部は狹隘にして海面陸地に近く、又オコック海の寒流注下して久しく凍結するか故に、目的を達せんこと甚困難なりしなり、露艦は憂慮漸ゆる間もなく、船中を整頓して戦闘の準備をなし、嚴重なる偵察をなせり、五月八日アドミラルブルースはフリゲート、汽船ブリグ各一隻を以てデカストリーに達したり、此夕汽船は港内を測量し碇泊せる露國軍艦と大砲數發を交換したりしか、英國艦隊は遠く去りて五月十一日其隻影を留めざりき、其他かゝる珍事を演しければ、英國の司令官は嚴酷に非難せられ、辯疏甚た努めたり、

露國はオーロラ(十六砲門)オリウツザ(全上の外尙多數の大砲を備へたる運送船)ド
ウキナ及他の運送船三隻を有し、英國の指揮官サーチャーレス、エリオットは、フリ
グートシビル(四十砲門)砲ホルネット(十七砲門)を備ふる汽船(二橋船)ピッターン(十
二砲門)を有せり、而も尙直に露艦を攻撃せざりしを以て非難されたるなり、然れど
もネニルスコイが東亞の地理上の發見は、露國の外に知る者なく、概ねサガレン島
を以て大陸に接續する半島なりと想像せしを記憶せざるべからず、エリオット則
ち思へらく今や露艦の韃靼灣の狹隘なる極端に追窮せられて、退去する能はず、故
に遠方に於て之を監視し、其南方に逸出するを防ぎ、援軍の到るを待べし、小艦隊を
以て露國の艦隊六隻を攻撃するの危険を冒さんよりは、寧ろ安全の策を取るに如
かずと、一たび沙洲暗礁に觸れなば船隻を失ふべき、不案内の港に碇泊したり、五月
十一日エリオットはアドミラル、スターリングに二橋船ピッターンを與へ、他の二
隻を以て露艦の逃亡に備へたり、露艦は夥多の貨物の外、ペトロポロフスクの成
兵住民を輸送するの必要に迫まりて、オーロラの大砲は無用なりしをも知らざり
き。

アドミラルザポイコは、ネグエルスコイ及び艦長と共に會議を開き、敵もし來襲せ
ば奮戦決闘覚れて後已まんと決したり、然るに五月十四日偵察士官歸へり報して
曰く、ケーアラザレツフに赴く航路開通せりと翌日全艦隊デカストリーを發して
北航し日本の地震キョウシツウチ波に滅されたる、フリグートドウウキナ號乗組員の一部を搭
載せる米國の二橋船ウイリアムメンに逢へり、是等の遭難者は初めペトロホー
ロウフクに來り、其荒廢を見て露國艦隊に合すべく、直にデカストリーに歸りしな
り、露艦は出帆の後、霧霏暴風及狹隘なる海峡の激流に進行を妨げられ、五月二十四
日漸くケーアラザレツフに着し、ムラビラツフの計畫に基て要都の警固に著手し
たり、海峡は廣さ僅に四哩にして航路頗る狹隘なり、バラダの兵二百人其沿岸に
壘を築き、五月二十八日大砲八門を揚げて戦闘に備へ、また高地に信號臺を設置せ
り、されど五月廿九日の朝ムラビラツフの使者來り、極北に退て難を黒龍江に避く
へく命令を傳へたり、ムラビラツフは此時黒龍江の下にありき。
同時にエリオットは露艦の動靜を探らんと欲し、五月十六日デカストリーに到り、
後影を留めざるを見て大に驚き、上陸して露軍を探りたれども、カムサツカの藥劑

師の家財を見出したるのみ因て思へらく北方には地峽の横はるを以て露艦は必らず南方に脱し去れりと直に南航して徒に露艦を韃靼灣に搜索せり支那海に於ける佛國艦隊は暗礁に觸れて損害を受け且つ乗組員敗血病に罹りて應援する能はず英艦は韃靼灣に無効の搜索をなせる後露國艦隊は霧に乗じて逸脱しサガレン嶋を巡航してオコック海に避難せりと決定せしか其海岸のアヤンと稱する處に新設の海軍根據地ありとの漠然たる報告に接しければこれまた不知の地方なれども次に之を攻撃せんとせり、

ムラビョッフは千八百五十五年二月十八日書を北京に發し聯合軍のペトロポロフスクに於ける失敗を叙するの後勅命に従ふて黒龍江の開通するや否や直に兵器糧食を其下流に送り聯合軍の來襲に備ふることを發表したりこの第二の遠征隊はムラビョッフの豫期せしよりも早く出發するを得たりき彼は四月十六日を以て出發せしめ黒龍江口の氷未だ解けざるも五月六日キヨ湖邊に到着せしめんと期したり而して五月八日エリョットの艦隊デカメトリ灣に到着せしめればムラビョッフの誠見如何に徹達せるかを察すべしムラビョッフは例の精敏

を以て四月六日ネルチンスクに達したれども乗船の準備甚だ後れたりしかは部下の緩慢を叱責し自から其準備を監督せんとてコサックの嚮導一人を従へ馬に跨りて危険なる山道よりシムカ河に赴きたり、

最初の遠征に經驗したる混雜を避んとて遠征隊を三部に分ち各數日を隔てて出發するに決したり第一は貨船二十六隻にコサック兵の半大隊を載せてムラビョッフ之を督し第二は五十二隻に第十五聯隊を乗せ第三は三十五隻に第十四聯隊の半を載せたり其數約三千人豫め最も綿密なる訓示を發し各自の搭すべき船舶及積載すべき貨物を忘ることなからしめたりムラビョッフの用意周到なる此の如しと雖も多少の混雜を免れざりき彼は五月の初十三隻を率ゐて出發し先發隊に屬する殘餘の小艇は幕僚に托して率ゐ來らしめたり、

同時に支那人は使を遣はして答へらく露清使節ウルガに會しゴルビツサに至りて國境問題を議定せんとムラビョッフは五月八日河を下るの間之に答へて曰く二月十八日通知せる如く予は救援隊を率ひて黒龍江に向ふて進行中なれば九月までは其地に滞在すべく然る後貴國の使節と共に緊要の問題を議せんと五月十

二日ムラビラツフは支那官吏の密に標柱を立て置きて國境を奪はんとする者四
 後のデヤンクに乗じてオルビツザに向へるに會し前述の意見を反覆し愛暉に歸
 りて北京の訓令を待たんとを要求せりされど彼等は朝命と稱して之を肯せず露
 國の官吏より交附せられたる旅券を以て河流を溯れり、

ムラビラツフは愛暉に達せし時書を該地の支那宰官に送り英佛の艦隊に對して
 黒龍江を防禦せん爲其地向ふことを述べ大船百四隻一艘は汽船を以て馬匹牛羊
 各三百男女八千餘大砲施銃等戦争の材料を運搬しつゝわれど之を抑留せざる
 事を要求せり宰官報を得て大に驚き露人か多數の遠征隊及び家畜を輸送するは
 黒龍江に永久植民地を置くの計畫に出でたりとなせり、

ムラビラツフ黒龍江の下流に達するや直に命令を發しアドミラルザボイコをし
 てネヴェルスコイの部下及其艦船を指揮せしめネヴェルスコイを以て我參謀長
 となし黒龍江及キヤ湖の便路によりてニコライフスクデカストリーと直に交通
 すべきマリインスクに本營を設けて陸海軍を統べ曩にペトロポロフスクより
 來りし軍艦運送船はニコライフスクに遣り其地に大砲を備へて之を保護しデカス

トリの防禦はコサック歩兵五百を以てせり、

勁敵の來攻するも之を擊退すへき軍備着々整頓する間にプリンスボルコンスキ
 一は國中に無上の平和磅礴せるかの如く靜然として黒龍江下流の沿岸に籍戸の
 移植を勉めたり彼等は遠征隊の第二部に屬するものにして千八百五十五年五月
 十四日船十二隻を醸して出發せしかシルカ河の急激なる淺瀬に擱して藪林盡き
 家畜斃れしかも之を他に仰く能はずして非常の困難に遭遇せり黒龍江の航行は
 水流大に増して島嶼を隠くし樹林を没する時一層爽快を覺ゆるなり既にして窒
 扶斯疾大に蔓延せしも病性餘りに劇烈ならず不幸にして二人を失ひたれども航
 行中四人の出産ありてこの損失を償ひ得たり六月十三日ボルコンスキは移住
 民を以てマリインスクに到着せし時其將來の村落たるべき處はネヴェルスキ
 の撰定に係れるを聞き思へらくこの撰定は専ら軍路上の考察に出でて移住民
 が耕作する必要に重きを置きたるにあらざるべしと乃ち老農をして黒龍江流
 の沿岸を測量し適當の耕區を設定せしむるの必要をムラビラツフに説けり果せ
 る截量測の結果ネヴェルスコイが豫定の地は唯一區の耕作に適するを發見せし

のみかくて左岸に其一區を探り右岸に四區を劃し、またマリインスタに對する島にコサツクの移住地を設けたり、移民はニコライフスクに到り、之れより下黒龍江に壘を築つゝ移住の計を營みける時、聯合艦隊はペトロポロフスク又はラガストリーより、不可思議に消え失せたる露國の艦隊那邊にあるかを探索しつゝ、巡航せり、六月二十七日英國の軍艦アヤンに顯はれしが恰もペトロポロフスク、デカストリーの如く、港内に船隻なく住民内地に退去せしを見て七月九日出帆したり、ムラビラツクの友人にして、又彼が東部西北利亞に對する策略の倔強の助力者たる、ビショップアインノセントは此日アヤンに到着し直に都會を距る十二露里の森林に退去せる住民を慰撫し其嬰兒に命名し或は祈禱をなせり、七月二十一日英艦一隻再び來り、二十二日一隻また加へ其士官は悉く上陸したり而して一珍事は茲に起りたり士官は、僧正の駐在するを聞て其家に到れば教會に趣きし後なりしかは、また其教會に尋ね行しに、インノセントは正教教會の莊嚴なる法服を着けて、跪つゝ、熱心に敵軍退治皇上捷利を祈りつゝ、ありければ士官は忍ひて其終はるを待ち、僧正に告げて曰く、恐らく

は戲言なりしならん、貴僧は我等の俘虜たらざるを得ずと、イムノセント其舉動の滑稽に附け入りて答へらく、我武人にあらざれば捕へて益はなかるべし唯養ふまでの事なればと而して士官は大僧正を携へて船に歸へり、シャンペーン酒を酌て其壽を祝ひ然る後之を釋放したり、同日聯合艦隊はドウキナ乗組員の殘餘三百を載せたるブレイメンの船を捕獲したり、

十月アドミラルスタリングはザポイコの艦隊を捕獲せんと欲し、エリオットをして琵琶湖を北航せしめたり、彼以爲へらく露軍は現今必らず各陣に退去すべければデカストリーに於て之を要撃するを得んと而して此地はムラビラツクが派遣したる、コサツク兵五百之を守りて十月の初まで敵の來襲を待ちけるが、指揮官は遂に其到らざるを見て七十人の一小隊及山砲二門を残してマリインスタに退去したり、十月三日(十五日)フリグート一隻推進機を有する砲艦二隻、デカストリー湖に入りければ、成兵大に驚きて直に使を遣はし、援をマリインスタに求め、同時に湖を擁する森林の麓に要所を占め英軍約四百の上陸するを待て直に林中より巨砲一發を放てり、英軍之に應じて榴彈を發射すと雖も、露軍の所在不明なるを以

て、ペトロポロフスクに於て不知の國土に暴進するの危険を経験せしが故に海濱の短艇に退きたり、

午後英艦は沿岸を攻撃せしも、露兵は死傷各一人の外一も損害を受けざりき、其後砲撃數日に亘りしが露軍の司令官は十月四日マリンスクより歸へり、コサック兵一隊は五日に到着し翌日二百人また來援せしかば、英軍の成功今は大に滅却したり、十月十七日英國艦隊出帆し千八百五十五年の戰爭終を告げたり、翌年エリオットは捷報灣を巡航し偶インペラトルスキー灣を發見しバラダ號の焼け残りたる船體を見出せり、此時に至るまで露人の外この灣を知る者おらざりき、極東の聯合艦隊は一は彼等の地理に暗らきを一はムラビヤツフの機敏なる防禦策によりて、全く實効を奏せず千八百五十四年僅かにペトロポロフスクを苦めたるに止まり、其翌年は露國艦隊か海峡を経て退去せしをも知らずして、サガレン島を海峡によりて大陸に接続する半島と想續し、空しく其沿岸を搜索したり、ムラビヤツフは沿岸の防禦を監督する外、既に國境問題に就て書を支那に送りしが支那の使節は其要求に遵ふて黒龍江を下り、九月八日マリンスクなるムラビ

ヤツフの本營に到着したり、翌日第一回の會議を開きたれども、ムラビヤツフは疾病の故を以てアドミラルザボイコ之を代理し、外國の攻撃に對して黒龍江口を防禦するの必要に關し、ムラビヤツフの持論を反覆し左の二項を提出したり、

第一外國の攻撃を防禦する目的に向つて占領したる所は、其沿岸たるを否を問はず、凡て露國の所管たるべし、

第二黒龍江口及内地の軍隊堡壘の間は、各夏山道に由りて來往すべからざるを以て其交通を保持するため、黒龍江の左岸一帯に露國の植民地を設立せば、以て兩帝國の天然の境界たるべく、東部西比利亞は之によりて戰艦の攻撃を防禦し得るのみならず、將來露清の不和の原因を一掃するを得べし、

支那の使節はこの提議を文書に認めんことを請へり、九月十一日第二回の會議に於て使節は病氣痊愈したるムラビヤツフに向ふて、千八百五十三年六月十六日附の露國亞細亞局の文書を朗讀せり、これ即ちネセルロードか黒龍江の問題に就いて、清國に讓步せる愚やかしき文書なれば、ムラビヤツフは巧みにこれを躲避し露

國政府の熱望は二大邦の間に平和の關係を維持するにあるを以てかゝる文書を提出せるなりと陳じ爾後黑龍江遠征隊を送りて河口及び内地に存在する軍隊堡壘の間に永久の交通を確定せんとするの企望を北京政府に通報せんことを請へり、

ムラビラツフは當時露國陸軍の焦點艦隊の避難所たるニコライフスクに於て、大砲五十門を備ふべき堅固なる砲臺三基の築設に關する示教を與へし後、米船バルメット號に搭して前回の如くアヤンに到りやがてイルクウツクに赴きたり、ネグエルスコイの發見せる南方の航路を経て、外國船の黑龍江に達せしは之を以て始とす、ムラビラツフは十月一日ニコライフスクを去りたる後、辛ふじて敵艦の捕拿を免かれ、暴風怒濤を冒して十八日アヤンに着し十二月の末イルクウツクに到着せり、

ムラビラツフはイルクウツクより翌年夏黑龍江の下に第三の遠征隊を輸送するの命を發したり、時に國境に貿易する支那商人傳へて曰く、清國政府は南の方蒙古に大兵を集めて黑龍江に於ける露人の航路を防がんとす、この風説信を措くに

足らずと雖も、若し果して信ならんにはゆゆしき大事なるを以て、精確の消息を得ること必要なれば、ムラビラツフは千八百五十六年一月十二日、氷點下四十一度なる蒙古の嚴冬を犯して、ウルガに到りアンハン即ち蒙古の官吏と頗ふる親睦なる談話の後支那の軍備を修むるの意なきを發見したり、

是に於てかムラビラツフは意を安んじ露京に上はりて直接廟堂の有司と審議するの便宜なるを考へ、且つ千八百五十五年の初アレキサンドル二世父ニコラス帝の位を継きたれば施政上大に變化の起らんを察し、黑龍江の經營に就て數年の訓練を経たる將校コロネルコルサコフウテナントコロネル、ブツスに命じて黑龍江の下流に派遣する遠征隊の準備及指揮を掌理せしめたり、

黑龍江下流の陸軍は指揮の聰明英智によりて満足すへき境遇に安じたり、千八百五十四年春ニコライフスク、マリインスクは三十八人にして數多の家屋を有せしかば、千八百五十四年黑龍江を下りし遠征隊及びベトロポロフスクより退去せる者、合せて男女約七千此等の地に集中せし時聯合軍の全海岸を封鎖しまた、黑龍江に於ける露國の驛舎空虛にして内地と通信の便なかりしにも拘はらず、彼等は

暖かなる住所及食物を供給せられたり、

ムラビヲツフの上京は、彼の先見せし如く甚だ必要なりき、時に支那政府は彼が黒龍江の各地を占領せしことを訴へければ、外務省は大に外交上の成功を收むる覺悟を以て、該河に於ける航通權、及其沿岸に糧食薪炭の貯蓄所を設置するの許可を要求せんとする時なりしなり、然れどもムラビヲツフは支那人が、黒龍江の左岸を握らんをするの要求は、固より夢幻的なることを觀破せるか故に、外務省の要求は、極東に於ける露國の利益を博するに足らざるのみか、反て危険なるものなりと論じ、支那と新條約を締結するの際は、進で其局に當らんと請ひ遂に其使節に任せられたり、

ムラビヲツフは東部西比利亞の利益を博すべきこの重要な任命を得たりし後、多難の業務殿烈の氣候によりて痛く害せられたる健康を快復するの閑を得たり、於是短信をコルサコツフに寄せ、黒龍江に於ける次回の航行には務めて支那人との衝突を避け、彼等の叫喝を忍耐すべきを告げ、愛好せる獨逸の保養地に退けり、歐洲の戰爭は巴里條約によりて局を結びたれども、第三遠征隊の組織は既に成り

て、千八百五十六年五月の央に、黒龍江を下れり、五月廿一日第十三四聯隊の兵士千六百三十六人將校二十四人を輸送する所の船筏百十隻愛暉に到着するや、コルサコツフは上陸して支那官吏と會し、説て曰く、冬季の間、夥多の船舶河流を上下すべし、糧食成兵は黒龍江の左岸に留置せんと欲すと、支那の官吏答へて曰く、我等は貴國人の航通に關する本國の示教を受けずと雖も、露船の自由なる行動を束縛せざるべし、然れども成兵の舍營及倉庫を左岸に建築するを許さずと、コルサコツフ曰く、我は總督の命に従はざるべからず、請ふ事情を北京に報せよと、支那人問ふて曰く、河口の露兵幾許ぞ、コルサコツフ曰く、約一万にして尙五千人を送り、愛暉に對するセヤ河口には五百人を駐めんとすと、支那人之を聞て益不快の驚愕を起したり、コルサコツフの談判により、リウテナントコロネル、ブツスは毫も抵抗も受けずして、第三の遠征隊を下流に送り、左岸に四驛を設けたり、グムラ河に對するシャルスキーは二十五人、セヤ河口のウストセイスキーは五十人、小興安嶺の起點ヒンカンスキーは二十四人、スガリ河に對するスガリースキーは二十四人なりき、かくて巴里條約の數月後、露人は既に黒龍江の全域に移住し、實際上黒龍江を占領

したり故に支那に向ふては其既に完成したる者に對して批准を求めんとするのみ、これたゞ少時の忍耐を要する問題にして、ムラビラツフは機略剛毅以て之を處辨したり、

成兵トランス
の
カ
イ
ア
に
ス

千八百五十四年より同五十六年に至る赫々たる功績即ち聯合艦隊に對する防禦の成功太平洋岸の占領黒龍江の左岸に於ける驛舎の建設の如きは極めて少數の人命を失ふて成就したる所、ペトロポロウスクの勝利もまた廉價を以て得たるものなり、然るにムラビラツフが故ありて與へたる命令の取捨辨別すべきを知らずして千八百五十六年の末悲惨の災難を生じたり、その恐るべき詳細の事實は今尙黒龍江に於て記憶せらる蓋しムラビラツフは歐洲の平和に歸したるを以て、黒龍江下流に駐在する軍隊の過半を、後具加爾に還へすべしとの命令を聖彼得堡より發したり、ムラビラツフが不在の間軍務を總管せるコルサコフは四月の央頃にこの命令を傳へ同時に軍隊か河を溯はる時の用に充てんとて、黒龍江畔に新設せる驛舎に二千七百人に對する糧食を輸送船三隻を蟻して送くりウストストリールク及クトマンダに五日分クマルスカ及ウストセヤに十日分ウストスンガリ

一に二十日分を分配したりクトマンダの名は地圖に見えず、クマルスカ及ウストストリールクよりの距離によりて考ふれば、アルパシンの近傍なるべし、是等の綿密なる處置は實に必要なりき歸還兵はマリインスクよりウストストリールクまで二千三百露里餘を跋涉せざるべからず、其間荒蕪たる原野にして屢些少の食物をも得る能はざる所ありまた、黒龍江の流は甚だ迅速にして秋冬の上航は殊に容易ならず、順風に帆を揚ぐるに非らざれば、岸に沿ふて徐に船を曳き若し濕澤或は巖石に遭へば櫓楫に依るの外なく進行甚だ遅し、其水低落して流勢急劇ならざる時は幹流を航すべきも汎濫すれば之を識別すること最も困難なる殊に其河口よりセヤ河口までは丘陵に夾まれたる小興安の急流百露里を除くの外、其距離二千露里幅往々三十露里に達するを以て、汗漫澎湃幹流を辨し難し故に、長き旅行に於ては岫嶼の間または屈曲せる岸に沿ふて、或は漕ぎ或は曳く間に、屢支流を幹流と誤まることあり現に歸還兵は終日クマラ河の上に舟を曳きたる後、黒龍江は今行きつゝある方向にあらざるを發見せり蓋し舟筏に乗じて黒龍江を下るに當りては河流自から之を海に致すと雖も上航に於て幹流を發見するの難き、コ

ナツク人の未だ實驗せざる所なりき、
 後貝加爾に還へらんとする軍隊はコナツク人及歩兵より成れり、前者はギリアツク人の間に雜居せるを以て土人の船を購ひ速かに出發せしか後者は船の到來を待つか若しくは自ら端艇を製造するの外なきにより遂に大なる困難に遭遇せり、而して歸還兵は三分隊に區別せられたり第一は其數約千人にしてコロネルセラピン之を率ゐ、六月の末頃即ち平和回復の公報下黒龍江に達せしより數週を経た出發し、幾多の困難を排して九月二十五日より十月八日に至るの間に於て悉くウストストリールクに達したり、

第二は兵數八百餘にしてメーソヤアヤンコッフ之を率ゐ、稍遅れて六月の終頃出發せしが既に黒龍江に於て多數の熱病患者を生じ、身體衰弱勞苦に堪えずして死亡多く、クマルスカとクトマンダとの間殊に甚しかりき、されば其距離四百露里にして通常十日を要するもの、十五日に至り二十日にも超えければ、クマルスカに於てクトマンダまで僅二十二間の糧食を受たる軍隊は、食物欠乏して大に困難を蒙むれり若し此時クトマンダに達する五十露里の地に於て、食料を積載せる貨船の、

今夏座礁したるを發見せざりしならば多數の餓死を免れざりしならん、
 第三は兵數約四百にして、コロネル、オアレンコッフの麾下に屬し、最も遅く出發せしがまづマリインスクに到りて長途の旅行に要する準備を整へざるべからざるか故に非常の迅速を以て之に着手せしも七月の終即ち第二分隊の出發一月を経た漸く整頓したり、故にアドミラル、カザキウイチはかく遅く出發するの非を擧げてオアレンコッフを諷め出發を翌年に延期してニコライフスクに越年すべしと忠告せり、コルサコッフのオアレンコッフに與つたる命令も、また固より便宜的の者にして唯早く出發するを得は宜しく之を行ふべしとの意に外ならざりしなり、然るにオアレンコッフは如何に不便なる事情ありとも旅行を全ふして自家の力量を顯はさんと希望したり、
 不運なる分隊は七月二十七日マリインスクを去り糧食の欠乏を感ずることなくして、十月八日クマルスカに達したり、然れどもこの驛を去る五露里に於て河水凍結し艇を行るに由なかりき故にクマルスカに還へりて粗造なる茅舎に投じ、堅氷に至るを待つこと殆ど三週、今や死の背後に迫まれるを以て、直に前程を疾行すべ

しど、十月二十八日此地を去れり、

兵士は衣破ふれ履弊ふれて不幸なるかな長途の進行に堪へ難く、クトマンダまで四百露里十日にして達すべきもの廿二日に遷延したり、冬季共短く夜永ければ、其間彼等は火の傍に填集して暖を取れり、時に列氏の氷點以下二十度全距離の経過に充てたる十日の糧食は日欠乏を告げて一層の寒威を感せしめたり、されば十一月三日より砂糖は常量の半を給せり、十一月六日茶全く盡きて麥稈木皮を煮たり、十一月九日隊伍を離れたる漂泊者の後退するあり其状恰も骸骨の歩行するか如く背囊の皮紐を噛んで命脈を維持したり而して遅々黒龍江の堅氷を辿る兵士の運命も必らず餓死に定まるべき情態なりと然るにクトマンダの邊に糧食を裝載したる貨舟の捨てられたるものあるを聞き、萎縮せる精神頓に振興し數日の間先發隊の既に之を取り盡したるやと胸中希望と疑懼とを交えて進行せしか、飢鬼の犠牲となるもの夥しく殘存者の間にさへも恐るべき慘劇を見るに至れり、遂に十一月十五日に至り、コサック人は馬六頭に糧食を駄して、クトマンダより到着せり、於是餓兵漸く氣力を回復し十九日目的地に達したり、彼等はクトマンダに於

く數日休憩の後、再び進軍を初めたり、爾後飢餓の害盛を免かれしも糧食尙は足らず、弊履破衣嚴寒を凌ぐへからず、十二月十二日雙脚凍傷して道に棄てらるゝもの二十四人多くは漠々たる荒原の氷上に死亡したり、十二月十六日不運なる分隊は百四十三日を経て漸くにしてウストストロールクに達したり、兵を失ふこと百二殆ど其三分の一に當れり、

この分隊の恐るべき經驗は十七世紀に於けるブサデネツフ、ポヤルコッフが遠征隊の困難を想起せしむ露人が北邦經濟のために嚴烈なる氣候に抵抗して、屈撓せざる剛勇以て見るべきなり、

ムラビラツフは十二月の始まで露都に淹留し前同上京せし時の如く東部西比利亞の安全に關する重要問題に就て、皇帝の裁可を得たり、則ち韃靼海及黒龍江に於て占領したる重要の衛所を露領に收めて、プリモルスカヤ(沿海州)には行政區を設けオコック海の沿岸カムチャツカ及黒龍江口の沿岸之に屬す、また冬季下黒龍江に諸驛の間に交通を維持すべきの命を發し、ニコライフスク及マリインスクの間に若干の郵便繼立所を設け驛毎に馬匹四頭を置きたり、是等定期郵便の外其冬初

めて馬匹犬糧を以て黒龍江の結氷を渡り、ニコライフスクより、後貝加爾に達した
り、

千八百五十七年の初、ムラビョッフは機に應じ變に臨みて、黒龍江の下に派遣する
遠征隊の準備を創めたり、爾後習慣となりて毎歲之を行へりこの時彼はコサツク
兵をして其家族と共に移住せしめんと計畫したり、而して是等兵邑の創設は皇帝
の批准を要するか故に軍務省に通報して必要の權力を興へられたり、

同時に露國政府は英佛が優勢の兵を支那海に備へ、駐劄公使を北京に遣らんとす
るを知れり、抑露國はネルチンスク條約後殆ど二百年間中華と外交の關係を有す
るを以て此際新運動に加入せんと決定したり、時に水師提督アウチャチンは日本
と通商條約を締結して其名聲外務省に達しければ政府は之に北京駐劄公使を命
じ復國境問題を議定すべき訓令を興へたり、

ムラビョッフは此の任命を聞て黒龍江の左岸に於ける露國の利益は北京の巧慧
なる執政と不注意なる商議によりて犠牲とならんことを憂慮したり、然れども千
八百五十七年三月二十一日イルクークに到着してアウチャチンと會見せし後その

支那に駐劄公
使を置つんとす

憂慮の根據なきこと太平洋に於ける露國の利益はアウチャチンの安全なる手腕
の中に存することを確認せり、蓋しアウチャチンは露骨性急なる海員氣質を脱却
して、調停者の非凡なる手腕を保ちたればなり、

アウチャチンは三月二十九日イルクウツクを去りて四月キヤクタに達し、支那國
境の官吏に到着を報じ蒙古を経て北京に赴くの許可を得たり、此時ムラビョッフ
は支那人をして公使の特に尊貴なるを感せしめんと欲し、樂隊をキヤクタに遣は
し、また裝飾電燈を懸するを命じ、軍隊をして、威風堂々アウチャチンを迎へしめ
たり、然れども支那人はかゝる策略を得意とするを以て、因循姑息回答を五月に遷延
し終に陰然たる嘲弄を以てアウチャチンに告げて曰く、弊邦殊に貴國と論議すへ
き要件を有せず、されは顯貴なる閣下にして、俄渴を忍で遠く北京に旅行を企つへ
き必要なしとアウチャチンはこの待遇を憤ほりて、愛暉占領を外務省に建議し、五
月十五日ムラビョッフを追つてキヤクタを去れり、時にムラビョッフは歩兵野戰
砲兵二大隊を率ゐて、黒龍江を下りつゝ、ありしなり、六月五日ムラビョッフ愛暉に
到着しければアウチャチンは滿洲を経て北京に赴むくの許可を得るまでは政府

の命を待すして愛暉を占領せんことを提議せり然れどもムラビョッフは政府の認可を受すしてかゝる大事を處断するに反対し濫に暴力を用ひずして太平洋面を兼併せんとする露國傳來の政略を守れり蓋し黒龍江口の占領及其左岸に於ける驛舎の設立の如きは支那が實際毫も權威を行はざりし國土に於て實行したるものなれば支那は單に形式的の對抗を試みたれ共愛暉の占領に至ては明に攻撃の行動に出づる者にして支那をして滿洲全土の安全を恐怖せしむるを以てなりムラビョッフの反対は其兵力の微弱に因るにあらず彼は全く戦争の準備をなし若し必要を認めなば北京にだも進軍せんとて其軍略を畫したりきされば六月四日愛暉に對するウストセヤに於て滿洲及蒙古の國境に配置すべき軍隊に關する文書をアーチャチンに與へたり其歩兵一萬六千騎兵五千大砲四十門を有する砲兵一千其他イルクウツクエニセースクより國境を超えて派遣すべき援兵また一千あり當時支那は太平賊に蹂躪せられ英佛に北京を落されて平和條約の締結を威迫せらるゝ際なれば兵力は之を以て足れり然れどもムラビョッフは征討の希望なく唯支那の不要と認定して占領せざる國土を占め以て太平洋に達する門戸

を開かんと努めたり、

アーチャチンは愛暉の支那宰官に向て滿洲より北京に進行すへき許可を求めたり然れども宰官は朝廷の指揮未だ達せずと稱して之を許さず故に彼は陸路目的地に達する能はざるを察し海路を取らんと決心しウストセヤに於てムラビョッフと別離を叙し七月一日黒龍江を下りて發し遼東灣に於て其港を視察し全月二十四日白河口に達したり、

支那政府はアーチャチンが海路より來るの報に接して書を露國に送り白河口に近き天津は適當の談判地にあらざるを説きたれども露國は弊邦の使節を北京に延見せよと要求したり同時にアーチャチンは天津に於て頑固なる支那官吏と無効なる外交的爭論を起したり彼等は初めアーチャチンが持する所の國書を受くるをさへ拒絶せしがアーチャチンの頭平として聞ざるを以て終に此點に於て一步を譲りたり然れども北京に入るを許さざりしかばアーチャチンまた頑として聽かず支那政府は露國政府に訴へて曰く凡そ外國の使臣我皇帝に進貢せんとするにあらざれば北京に入るを得ずとアーチャチンは暫く白河口に留まりし後

アーチャチンは北京に入る能はざるを察し

上海に赴きて當時廣東を攻撃しつゝありし英佛聯合軍の行動に注意し支那の内情及直隸灣に露艦の到着せしたため其沿海地方に惹き起せる恐怖に就て貴重なる報告を政府に送りまた其沿海にて得たる地方的智識を以て支那の頑陋を打破すへき最も有力なる計畫を進めたりこは白河口を封鎖し北京に穀類を輸送するチヤンクをして之を揚陸せざらしめんと欲するなりき彼は外交的使命に失敗せしを以て千八百五十七年十二月の末支那海に派遣せられたる艦隊總督に轉じ支那の戦亂の間西方列強の行動を視察すべき命を受けたり、

プーチャチンのウストセヤを去りたる後ムラビョッフは夏季の間黒龍江に留まり平生の精勵を以て行政及外交の事務に注意しコサック人四百五十戸を移してウストストリルカより小興安の急流に至るまで河の左岸に幾多の村落を立て、十四聯隊及砲兵一分隊の兵營をウストセヤに設け禮節を以て土人支那人と親交を結はしめたり然れども支那人の敵意を挟み若しくは愛暉に於て軍隊を召集する時は直に河を渡りて之を襲ひ其都會を占領すべきを教へたり、
愛暉の宰官は黒龍江に航行を永續すること及び河の左岸に軍隊移住民を永住せ

しむることに関しムラビョッフに抗議して曰くこの行爲は兩國間の親睦を害するのみならず貴國は之を爲すべき權力を有せずと然れども是は既に遅かりき、何となれば露人は支那の薄弱を看破して之を尊敬せざるのみならず支那人は過度の恐怖頑固によりて侵略上正當の理由を供給したればなり、さればムラビョッフは是等の事實を利用して兩國間に於ける既往の文書を指摘しまた露國の使節は曩に北京に赴くへき命を受けて現に直隸灣にあるか故に之と一切の問題を議定すへしと乃ち公書を愛暉に返却したり、

ムラビョッフは黒龍江よりイルクウツクに歸へり直に帝都に赴かんとせしか、暫時滞在の後休養のため出遊せざるを得ざりき、
同時に黒龍江地方の新殖民地は駁々として發達しつゝありき、千八百五十七年の夏外國船七隻河流を溯りニコライスコ及ウストストリルカ間の驛路は冬に至りて竣工したり、

千八百五十八年の春ムラビョッフは健康を快復して後イルクウツクに還へり、黒龍江の下流に送るべき遠征隊の準備に着手したり、其計畫既往に比すれば一層偉

大にして、コサツクの男女約一万二千を送らんとするなりき、されど事ますます頻繁ならんとするか故にこの大遠征を猶豫すること必要とはなれり。

プーチャチン上海に於て支那の全權委員に會見せんことを要求せしも、また其効なかりき而して既に黒龍江を占領せしムラビヲツフは支那をして之を承認せしむるに、最も適當の人物たること今や愈々明瞭となれり、時に支那政府は内太平賊の亂あり、外英佛と難を構へたれば、北京或は上海に於て土地割讓主權放棄を論せば、其臣民又は外敵に對して威嚴を失墜するの基なるを以て、深く世に知られざる黒龍江の沿岸に於て其談判を開かんと希望したり。

ムラビヲツフ
愛暉に向ふ

ムラビヲツフは河水の融解を待て直に出發せんとせしも、豫めウストセヤに使者を遣りて、先は黒龍江口に急行するが故に、愛暉に於て殆ど滞在の暇なきを、愛暉駐在の支那官吏に報告せしめたり、故にもし支那官吏にしてムラビヲツフと論議せんと欲せば彼の歸航を待て會見するの外なかりしなり、蓋しムラビヲツフはニコライフスクに到りてプーチャチンの報告を得んとせしが、ことさらに支那人と談判するの意なきことを、支那人に確認せしめんと希望したり、果せるかなこの術策

は期望の結果を生じたり、

四月二十六日、ムラビヲツフはストリテンスクを去り、五月六日ウストセヤに達したり、然れども之を距る八十海里に於て、支那官吏はムラビヲツフを迎へ、出發を延期して、先づ黒龍江軍務總督トシヤン奕山王と談判せんことを要求せり、ムラビヲツフは今こそ希望の時來たれりと、直に之を諾して商議を開始し、特有の機智を以て歩武を進めたり、

五月十一日第一回を愛暉に開きたり、ムラビヲツフは黒龍江を以て、兩國の境界となすべしと提議し、其必要を論じて曰く、殊に英國の支那を征服するの日は、其權利によりて黒龍江口及南方の沿岸を略取すべしと、支那の總督は之に對して、北京政府の既に屢主張せる議論により、凡て從來の條約は、ゴルビツザ、ウダ兩河に沿へる、所屬不明の地を貫きて國境を確定したるものなりと反復したり、議論紛出の後ムラビヲツフは豫め準備せる條約草案を提出して會議を終はり、以て翌日支那使節の意見を求めたり、其條款左の如し

一 兩國の境界を黒龍江と定め、其左岸は河口に至るまで露領となし、右岸は

ウツスリー河に至るまで清領たるべし、但しウツスリー河は其源頭に達するを限りとす、故に其國境は南朝鮮半島に接す、

二 國境と定めたる河流には、兩國の船舶のみ航通を許すべし、
三 前記の河流に於て、自由貿易を許すべし、

四 左岸に住する支那臣民は、三年を期して右岸に撤退すべし、
五 兩國の利益名譽に關する、一切の事件を規定する所の法律を制するため、

兩國に於て特に委員を任命し、前回の條約を改定すべし、
六 今回の會議は前回の條約に對する補遺と見做すべし、

支那人が露國と親交を希望することは、第一回の會見に於て顯はれたり、されど國境問題に關する意見を固執して、讓歩せざるの傾あるに似たれば、談判長日に至りて容易に釋けざるべしと見えたりしが、ムラビラツフは必らず簡短に終結を告ぐべしと信じ、この目的を達せんかために深く短慮を戒しめ、病に托して五月十二日通譯ペロを遣はし、談判を繼續せしめたり、

反覆長論の後、支那人は讓歩の徴を顯はさざるを以て、ムラビラツフも今は方略を

變更して、一層決心したる態度を取り、ペロをして支那人に言はしめて曰く、露國皇帝の寛仁なる先に恕すべからざる攻撃を受けたる後も、尙兩國の平和を維持したり、支那人は千六百八十九年に締結したる條約を、常に引用すると雖も、之を云々すべき權力を有せず、何となれば其時露國の使節は、單に鞏固の士を従へて來りしに拘はらず、支那は使節と共に軍隊を送りて、攻撃の態度を示し、以て威赫を加へたり、且つ支那人は先條約を破ふりて、國境外に租税を徴したればなり、又近くはブーチャンの接見を拒絶して頗る禮節を失し、露人の製造所を燒きて罪惡を極めたり、この強硬なる論議には、支那人も頗る同情を表し、遂に會議の結了に同意したり、千八百五十八年五月十六日、愛暉條約は調印せられたり、この談判はムラビラツフが平生の精敏を以て、僅かに六日間に終結したり、此時ムラビラツフは勿論支那に對して二三を譲り、セヤ河邊より黒龍江の左岸に住する滿州人は、支那官吏の所管となし、ウツスリー河と海との間に介する國土は、國境の永久に確定するまで兩國の共有たるべしと宣言したり、ムラビラツフが後者を許容せしは、ネルチンスク條約に於ても、領海の地には決定を施さずして放逐したることを記慰せしに因るな

らん露國は實に百七十年を待て、ゴロウインの定めたる漠然たる國境を確めたり、
而して愛暉條約に於ける國境は二年の星霜を経て確定したり、

ネヴェルヌ、コイは、ウツスリー河とズンガリー河の間を貫ける、小興安嶺に國境を
進めてウツスリーの全路地を要求するの必要を、ムラビヤツフに慫慂したり、され
ど彼の締結したる條約は、其管下の兵力の強盛と、當時の支那の内情より考察する
に最も其當を得たる者なりき、

ムラビヤツフのウストセヤに歸るや、衆皆至大の敬愛を以て之を歓迎したり、數日
後五月二十一日(ピシヨツプ、インノセント)は、神聖なる祭典と稱して、教堂に莊嚴な
る儀式を執行し、以て祝意を表したり、

ムラビヤツフは教堂の廣場に於て、兵士に對し感銘すべき短言を以て告げて曰く、
諸子よ我は今茲に爾を祝す、我等の盡力は空しからず、黒龍江は今や露領となれり、
正教會の祝福露國の感謝乃ち在り、アレキサンドル二世聖壽無量にして、新疆は永
く其保護の下に榮ゆべし、吁快ならずやと、其時に應じて辭を撰ふの巧之を以て知
るべし、同時にウストセヤを改めてブラゴウエシチエンスクと稱す、現今黒龍江畔

黒龍江露領
なる

畔の最も繁盛なる都會なり、

西比利亞の東境問題に對するこの最後の解釋は、聖彼得堡に於て至大の満足を得
し、ムラビヤツフはアムールスキ伯爵を授けられたり、

この赫々たる外交的成效の後、ムラビヤツフは餘力を弛へずして、黒龍江を巡航し、
ニコライフスクに至るまで、要害の地にはコサツク人及軍隊を移住したり、就中ハ
バロツフが滿州人の攻撃を破ふりたる所に程遠からぬ、ウツスリー河口に樞要の
驛を設け、この豪膽なるコサツクの探險者に敬意を表してハハロフスクと稱せり、
歸途汽船アムールを以てスンガリーを湖はり、露國の該河に於ける航行を示し、愛
暉條約によりて許されたる權利を確かめたり、

千八百五十四年彼は、黒龍江の航行を開始して、ペトロポロフスクを援ひ、千八百
五十五年露國艦隊を助け、千八百五十八年、黒龍江を露國の有となせり、而して後其
イルクウツクに歸へるや、眼をウツスリーの地に轉じ、其河邊にコサツク人の移住
を密し之を航行するため、輕便水汽船の必要を主張したり、翌年彼はウツスリー河
沿岸を巡視して、新疆界の形勢を探らんと決心したり、こは歸航の際、愛暉に於て支

那官吏と會談し、支那官吏がメイフン河邊に國境を標識するを聽きたるに因れり、蓋し露國は朝鮮國境のポシエツト灣に至るまで、南の方百露里の沿岸を要するを以て、この處置は太平洋に於ける露國の利益と相容れざる所なりしなり、
愛暉條約の後一週を経て千八百五十八年六月一日、プーチャチンは天津に通商條約を締結したり、元來支那官吏は頑陋なりと雖も、彼の堅忍確固なる遂に克く目的を達したり、露國政府は支那が外國の壓迫に屈して全權大使の北京に入るを許さんとするを見るや、千八百五十九年一月セネラルイグナチーフを以て北京駐劄公使となし、ウツスリーに於て國境問題を議定するの訓令を發するに決したり、ムラビオックは之を贊し、イグナチーフに授くるに、英國公使ブルースと同等の位階を以てすべしと勸告せり、イグナチーフのイルクウツクに若するや、ムラビオックは、千八百五十九年四月十一日相伴ふてキヤクタに到れりされど、支那人は北京に赴くべき許可を遷延に付しければ、ムラビオックは五月二日こゝに彼と別離を叙して、黑龍江の營事に従事したり、曠てイグナチーフは訓命を奉して北京に赴きしが、ウツスリー地方に於ける國境を速に議定せんとするの希望は、例の妨害的因循に

遭遇したり、

同時にムラビオックは境界を區劃せんとする地方の智識を蒐集するに怠りなく、一團體を派して國中を巡廻し其地圖を製らしめ、五月の末ニコライフスクに到着の後、大平洋沿岸の視察に赴きたり、彼は日本を視察し、英佛艦隊が太浩砲撃に失敗の後程なく、白河口に着し、然る後威海衛に到りて暫時淹留したり、されどこの遠征の最も重要な結果は、ウツスリー地方沿岸の測量なりき、ムラビオックは朝鮮國境に近き一大灣を精査して、彼得大帝灣(ウサクトリア灣ともいふ)と命名し、將來の植民地として、浦鹽斯德及ボシエツト灣を撰定せり、彼は常に斬新の事實を捕捉して其學植を充斥し、事情の變易するに従ふて宜を制したり、故に彼が太平洋に露國の勢力を擴張せんと欲する一定の經論を見るに、東部西比利亞總督として赴任せし時、千八百四十九年甫めて、ペトロポロフスグを海軍根據地となし、後ネグエルスコイの發見及聯合軍と戦争の結果によりて、ニコライフスク及デガストリーの要害たるを認め、また愛暉條約及支那の内乱外寇に乗じて、遂に南方の港灣を獲るの機會に達するに及んでは、彼得大帝灣を以て太平洋に於ける露國海軍の中心

たるべしと認定したり、

かくて千八百六十年七月二十日、四十人をして浦鹽斯德を占領せしめ、殆ど同時に歩兵の一隊をしてボシエツト灣を占領せしめたり、而してこの占領は十一月二日イグナチーフが締結せし北京條約によりて北京政府の承認を経たり、由來支那政府は言を左右に托して因循決せずと雖も、當時英佛のために屈辱を受けたれば、其慣用手段を捨てて、露國の頑強なる要求に従はざるを得ざりき、於是滿州は東海に達するの道を失へり、

露國は比較的氣候温和にして、幾多の良港を有する沃土ウツスリー全土を掩有するや、直に黒龍江左岸の植民策をウツスリー河の右岸及海濱に應用し、コサツクの兵士及農夫のため黒龍江との交通を維持し、又農業を營むに最も適當せる處を撰んで移住地を區劃したり、然るに當初露國人は其頃佛國人の東京に於ける若しくは近く日本人の臺灣に於けると同一の災難に遭遇したり、即ち支那の暴徒は政府が輕々しく割讓したる國土を蹂躪し、新來の主人公を苦めたり、千八百六十八年暴徒益々増加して勢猖獗を極め、露國の植民地を攻撃して二區を焼き、或は屢廣漠た

る地方に散在せる僅少の露兵を撃ち破れり、然れども露國は黒龍江より援兵を送り、またウツスリー地方の少數の戍兵を集中して、之が討伐に従事し遂に平和を回復したり、

ムラビヤツフが最後の計畫は、千八百七十二年に至りて實行せられたり、何ぞや、曰く露國の東方に於ける海軍根據地をニコライフスクより浦鹽斯德に移すと是れなり、該港は亞露の南東端に位し其地利ペトロポロフスク或はニコライフスクに越へたり、假令數月間堅氷の之を封鎖するあるも、當時既に改良の截水器を以て航路を開通せり、彼得大帝以來經國策の一部たる不凍海に出づるの希望は、殆ど三世紀間著々進歩しつゝありし、大膨脹の極點に於て遂に太平洋に成就するを得たり、

露國はこの新設の海軍根據地によりて、殆ど陸地に包圍せられたる黒海より、久しく排斥せられたる不便を償ひたり、されば露人は之によりて浦鹽斯德の君士坦丁堡と、地勢相類するに着眼したり、蓋し土耳其の首府はオレグカ有名なる掠奪の時代より露人の心を傾けたる所にして、イヅアン三世ツヒヤバレヲガスと結婚せ

しより其瓦解せる希臘を繼承して之を占有せんとするの志益々堅かりしかば、今や東方經營の終りに於て、浦達斯德の屈曲せる海峡には、ボスホラス、ゴルデンホルン等君士坦丁堡附近の名稱を附したり、

ムラビョッフは黒龍江及朝鮮の國境に達する海岸を獲て、亞細亞の北方に露西亞の膨脹を全ふし、エルマツクの遺業を完成したり、抑コサツクの酋長ウラル山を横断するの道を示すや、露人は其雄邁なる志氣に感激し、十七世紀の末に於て白令海峽に達したりと雖も、政府の之を助けざるがために、黒龍江占領の計畫は其効なく、北方大平洋の濱に至りて、自然の境界に止められ、南方支那の威武を恐れて、局促たる境域に踞伏し、一時亞細亞の北部を風靡したる勢は、一頓挫を來し、ムラビョッフが英才雄略を以て、内政の怠廢外交の怯懦より起る所の障害を一掃せしまで、沈滞不振百六十年の久しきに及び、渺茫たる北方の原野に於ける、膨脹の進行稍遅緩なりと雖も、原是れ露人の少數に因ることを思へば、多年の沈滞は敢て異しむに足らず、之を歐露の歴史に徴するも亦然り、見よ千三百八十年クリコハの役、露は早熟の勝利を獲たりと雖も、全く蒙古の羈縻を轉覆して其結果を廣布せしは百年の後

に非らずや、由之觀是黒龍江の沿岸に於けるハッロツフ、トリブチンの敢爲なる事業が、十七世紀に於て不朽の結果を見ることなく、十九世紀に至りて露國民の一層繁殖し、具加爾の那方に植民地を設けし時、漸く完成するに至りしは、寧ろ理の當に然るべき所なり、

尙進んで之を比較せんか、蒙古は其苛政内亂と、モスコウの漸進的勢力とによりて轉覆せしが如く、極東に於ても同一の動力ありて、局面の變化を提起するに、ネルチンスク條約の後、露の權力は非常に發達し、西比利亞の人口著しく増加し、數多の植民地後、具加爾に設けられて、黒龍江に於ける活動のために便利なる基地となり、支那は武健なる滿州人か、漢人の間に雜居するに隨ふて次第に其武幹を失し、英人の痛撃に摧けて、武名唯傳説に留まり、また太平賊の政府を轉覆せんとするに遭遇したり、この一般衰弱の外、黒龍江地方に於ける勢力は愈衰へ、清朝の原地たる滿州は次第に等閑に附せられ、其奈雄なる人民の一部は、南部の沃土に勝利の結果を收めんとて移住をなし、平靜温和なる漢族代て其跡を占めたり、故に露國の權力は確定し、黒龍江を回復せんと欲せば、この時勢の變遷を洞察して、二百年間蓄積し

たる兵力を用うべきなり、然るに露國廟堂の士は陳腐の事蹟に基つきたる舊思想を放棄せざるを以て、ムラビロツフは自家の觀察によりて、形式せる、明確なる意見を斷然實行したり、彼は支那人の弱點を確認し、後貝加爾にコサック兵團を組織するや、直に之を提けて新疆を掌握するを得べかりしも、露國外務省の因循怯懦なるか爲め先づ之を壓倒するに時日を要したり、

ムラビロツフは、又東亞に於ける露人の膨脹に新方向を與へたり、元來露人は一般に北東に進行し、十七世紀に於ては海に遮きられ、十九世紀の初此障害を排して又た進行を始め、亞米利加大陸に渡りてアラスカを占領せり、ムラビロツフ思へらん露國は活動を舊大陸に留め、良好なる條件を以てアラスカを合衆國に讓與すべしと、政府其議を納れて之を賣れり、かくて十七八世紀に於て既に露人の達したる大海は、全く東方に膨脹するを遮きりたれば、海濱に沿ふて南西に膨脹するに已むを得ざるに至れり、ムラビロツフが施政の間に海軍根據地をペトロポロフスク、ニコライフスク、浦鹽斯德等順次に選擇せしは、其新方向を示したるや明かなり、大平洋に接近せんか爲に黒龍江を併有したれば、不凍港の占領は其政略上必要の

結果のみ、故に其選擇したる港灣は、何れも順次前者よりも勝れたりと雖も、遂に南方に於て冬季氷結せざるを得るの希望を持せり、而して海軍根據地をニコライフスクより浦鹽斯德に移すの後、亞細亞の海岸に沿ふて南西に膨脹すること久しく停滯を來せり、朝鮮半島の紛亂せる内情黨派の陰謀は、亞細亞諸國に於て秩序を確立したる露國人が、施政的才能を發揮するに善良なる分野なりと雖も、事荷も之に涉らば支那日本英國は非常なる危害を加へられんとするなり、

露國が朝鮮の某港に意あるの疑を受くるや久し、然れどもこは曩昔の偶然なる出來事に由來する恐怖にして、事實誇大に失したるものなり、露國は始終謹慎にして領土の廢棄せる邦國を呑噬したるのみ、其の邊海の要求も常に靜穩にして、浦鹽斯德を太平洋の海軍根據地と定め、茲に安んずる三十年、而して輓近長足の進歩たる元露西亞の占取權に出でたる者にあらざれども、意外の事變接踵したるによりて成就したり、

黒龍江及ウツスリー地方占領の後、露國の極東に要する所甚た大ならずと雖も、東部西比利亞に於てムラビロツフが赫々たる施政を初めたる時、交通の必要を感じ

二九八
たる如く南方に於ては交通機關改良の必要あり、蓋し浦鹽斯德は大平洋に於ける海軍の中心なるも、遠く黒龍江及ウツスリー河を迂回して行かざるべからず、故に浦鹽斯德と容易迅速に交通するの問題は、更に南して要港を需むるよりは遙に緊要なりと認められたるなり、

第六編

絶東に於ける露國の現状(結論)

露は僥倖を博し得たりき。バルカン半島に於ける大計畫は端なくも蹉跌を來しクリミア陷落の後遂に又圖南の策なし。僥倖なる哉此間に於てムラビラツフが極東に於ける計畫は若々其歩を進め中央政府に於て外務大臣ネセルロード等の反對ありしにも拘らず全く黒龍江畔の地を蠶食し盡したるなり。時偶外英佛公使の訂約を迫るあり。内太平賊の乱あり清廷の頗る多事にして范漠たる北境に意を用ひざるに乘じ、ネルチンスク條約に依つてマルビツ河を境界となしたる條約を蹂躪して愛暉條約第三章を結びアルクン河より黒龍江に至る左岸一帯を露領となし侵略横奪の承認を得たるなり。時に千八百五十八年五月六日なり。翌年六月白河に清兵の英佛公使を要撃せるや、時宛も北邊露境を侵犯するものあり。大使イグナチーフを北京に派し大に屹問する處あらんとしたり。僥倖なる哉當時英佛聯合軍將に北京を衝かんとするの時なるを以てイグナチーフは居中調停の勞を取ると稱し

双方に幹施し、恩を清廷に賣り其報償として千八百六十年十一月十四日北京條約十五條を結たり。本條約に依つて更にウズキー以東の地を得たるのみならず、土耳其斯坦の一部天山南路に沿へる地方を得たり。露の貪婪なる望蜀の念に堪えざるなり如何となれば其西比利亞を跋躋し、黒龍江を探檢し漸くに太平洋に面せる港灣をば、ペトロポロウスクに軍港を築き然る後更に南に下つて浦鹽斯德に軍港を移したるにも拘らず冬季の嚴寒は飾るに堅氷を以つてし航通を杜絶するなり。初め露の希望する處はバルチック海の丁抹瑞典に其咽喉を扼せられ、黒海のボスホラス、ダータネールスに死活の運を任ずるを喜ばず唯大洋に飛躍し得可きの海を求めて其河平なるをも問はざりしなり。知る可し其ペトロポロウスクを得たる當時如何に欣喜して露國の未來を祝ひしかを然も貪婪なる露人は望蜀の念に堪えざりしなり。加之浦鹽斯德の面せる日本海は殆ど日本に依つて其孰れの出口をも梗塞せられ一朝事ある時又意の如くならざるを發見したり。彼は厚顔にも對馬を得んとしたる事ありき。朝鮮に於ける港灣を得んとしたる事もありき。

彼は屢々手を下し屢々成功せざりしなり。彼等が鶴首して希望せし時は來れり千八百九十四年日清戦争あり、日本勝つも、露は倔強の機會を得可く、清國捷つも亦恰好の口實を得可きが故に、彼は手を拱して其成敗を待てり。果然蕞爾たる小島國は麗然たる大國に加ふるに打撃を以てし朝鮮の獨立を保全するの理由を以つて遼東半島の割讓を清國に迫りて約將に成らんとす。是時を待ちつ、傍觀せし露の決然として起たざる可からざるの時に非ずや。日本が若し遼東を占領するならば彼等は遂に其望む處の蜀を捨てざる可からざるのみならず、浦鹽斯德の背後又頼むに足らざるの危機に瀕せりしなり。彼は起てり。彼はイグナチーフの爲したる如く又此機會を利用するに於て僥倖を射んとして成功せり。佛と獨と三國の同盟を以て日本を威嚇し、遼東割讓は支那領土の保全を危くするのみならず、東洋に於ける權力平均を擾乱するものなりと。其聲明する處は美しかりき。正義有るが如くなり。日本は遂に其臣民の血と骨とを以て攫取し得たる領土を還附するの已むなきに至りたり。戦争の結果は意外なる現象を呈する事多し。普佛戦争の結果はアルザスローレーンと五十億フランを得たる獨逸より、地を奪はれたる償金を取られた

る佛國の隆盛を原因したるよりも奇なり。彼は遼東の還附を恩とし深く支那と結び其報償を要求したるのみならず漸然其勢力を得、東洋外交の主人公たるが如き觀を爲せるに至つては又頗る奇ならずとせず。

當時佛國の某新聞論じて曰く露は日本が遼東占領を甘諾する事能はざる可し。是權力平均を乱すが爲めに非ず。支那の安寧を維持せんが爲めにも非ず。他に一理由の有りに存するなり。試みに思へ何人も己れの取らんと欲するものを他人に先たゝれて黙々に付するものあらんや。是れ眞理なる可し。然れども露の外交家の手腕たる實に賞す可に非ずや己の爲めに同盟を作り干渉を爲して、是を恩に支那と結ばんとす。是實に朝鮮の爲めに戦を起し意の如くに捷利を得て然も尙朝鮮に於ける勢力露清に如かざりしやの感ある吾外交家の手腕と比して孰れぞ。

露清條約

千八百九十六年露帝戴冠の式行はるゝに際し露の外務大臣ロバノフは清國の特派大使李鴻章と所謂カッシニ密約を結べり。其要に曰く露は極力清國を擁護し外國に對して其安全を保證す可く。清は露に與ふるに滿州に於ける鐵道敷設權其他の利益を以てすべし。是即露國が日清戰爭に依て得たる利益に非ずや。

露國が強東の經營に全力を盡し西比利亞貫通鐵道を敷設するに其浦鹽斯德に至る黒龍江線は地勢峻嶮又迂回し工事の最難なるものなりしに今此東清に於ける鐵道敷設權を得て千露里を短縮し得たるのみならず鐵道沿線の地方に鑛業工商業を營むの免許を得、輸出入貨物の課税を海關税に比し三分の一を輕減する事となりたり。

露人の南方に至らんとするは飢たる人の食膳に趨るが如し、争ふて滿洲に入るの露人數ふるに追わらず。忽にして所在コサツクの影を認めざるの地なきに至りし云ふ。露の滿州に對する企劃は漸く大ならんとして先づ其根據を鞏固ならしむる必要あり。孜孜として其經過政策を急きつゝありしなり。

千八百九十七年十一月露國に僥倖を與ふる機會は又現はれたり。何ぞや獨逸が膠州灣を占領したること。是なり。彼何で此好機會を逸す可き時で旅順大連を占領し清國の政府を威嚇して租借の約願を結びたり。然も旅順より牛莊ハルビン、チハハル、ニンクク等を経て西比利亞經過に接続する鐵道の敷設權を得たり。露の厚顔なる驚く可し。昔ては支那領土の保全を危ふし、東洋の均衡を保つが故に日本の占領

に反對して其邊附を余儀なくせしめたる遼東を吾から取つて旅順大連に軍港を築き直隸灣に霸たらんとするに至つては其厚顔なるに驚かずして豈に得可けんや。

滿州の眞價

北清に拳匪の亂あるや、各國孰れも兵を出して其居留民を保護せんとして天津より北京に至る。露は又是を好機會となして滿州一帯の地に兵を出して占領せしめ而も表面は列國軍隊の撤去を促し新政府の設立を容易ならしむ可しといつて清國に好意を表するもの、如く裝へり。實際に於ても卒先して北京駐在の軍隊を減少したる事は事實なり。然れども滿州に於ては一兵を減せず。却て兵舎を築き病院を建て永遠の計を立つるもの、如きは何ぞ。彼の好機會を利用して滿州の主權を奪ひ去らんとしたるものならずして何ぞや。

露國の僥倖を頼み貪婪横暴を恣まゝにする事天下何人が憎まざらん。其國際道徳に背反し國際法を蔑視するを誰か惡まざるものあらんや。英獨は支那協約を爲して支那の領土保全を宣言し、日英は攻守同盟を清韓の獨立と商工業の自由を宣言せり。是二ながら露の專横を憤つて其鋒銜を納めしめんとするものにあらすや。大勢

所謂利害關係

には抗す可からず。遂に滿州條約を支那と結びて一年半を約して撤兵せんとするに至り。北清事變に依つて獲得せんとしたりし僥倖は全く去らんとせり。

國際争議の結果は何ぞや。唯一のみ曰く戦争。文明は遍く世間に普及したれども制裁者を載かざる列國は遂に原始的時代の個人と均しく其争ふて決せざるの時んば腕力の優劣に依つて其争端の是非と爲さる能はず。國際法學者は列國の平和關係を以つて國際間の必要條件とすれども、是唯弱國に於てのみ余儀なくせられつゝあるものにして、強國は然らず。孤立するも可なり。世界を敵とするも可なり。固に戦つて勝つる算あれば掠奪も横暴も何の憚るを要せん。所謂國際團體にあるの列國にして或一國が國際法に違背したる場合其抗議し、極力敢て下らざるを得るもの利益の關係あるものに非ずんばあらず。其戦争の結果は戦争を覺悟せざる可からず。戦争の高價なる費用を拂つて争ふ可く其利益の大ならざる時には遂に不法も不徳も問ふ能はざればなり。斯の如くして國際の關係は遂に原始的時代の蠻民に異る處なし。一樹木の果實を争ふに驅けて其樹下に至り得可きものならざれば其戦争の渦中には投せざる可し。南米の一小邦に於ける國際争議には露は關せ

ざる可し。英も關せざる可し。如何に其が反國際法の行爲なりとも吾國が是に容喙して戰爭を開始するの念を爲す能はざる可し。

樺太千嶋に於て境界問題の起る事あらば争は二國の間に止まる可し。何となれば英も佛も此北邊の小嶋が日本の領土たる。露國の領土たるに於て利害を有せざればなり。國際法の範圍は唯二三比隣の國にのみ限られたるか。利益の衝突する區域にのみ限られたるか。然も其法に依つて最後の批判を爲し従はざるものとせば曠す可きものなる哉。國際の關係は單に利害の關係にして其是非は單に格闘に依つて定めらるゝものどせば世界の上に國を立つるもの寒心せざらんとするも豈得可けんや。英國の強きに於ける利益は揚子江の流域に止まるが如し。佛國は交趾支那。米國は非律賓以北に其範圍を作りたるが如し。獨逸の膠州灣に於けるが如きは誠に兇賊に類す。何の企劃する處もなく。何の必要もなく一時の興に依つて爲したるものゝ如く又論するに足る事なし。然らば即ち誰人か能く此絶東に深き利害を有し。其争ふ時は兵力を盡しても敢てせんとする者ぞ。英米佛獨も其利益の國外に在つては是を敢てするものに非る可しと信す。其残余の國は如何。朝鮮なり。支那

なり。日本なり。露西亞なり。此四國は孰も一葦の水を隔て、相望み相接し。交通の上からも運輸の上からも、商業の上からも一日も相疎なる能はざる處にして、歴史的又自然的の關係に依つて幸じて其權力の平衡を保ち得るものなる可し。然れども朝鮮は幼弱なり。支那は臥床せる病人なり。完全なる主權を有し完全なる兵力を有し完全に其權利の主張をなし得るもの、露と日本とのみ露に一を加ふれば日本は一を損したるものにして、日本に一を加ふれば露は一を損したるものなり。相近き相親ひに従つて其關係に頗る危険なるものなり。故に日清戰爭の和約に遼東半島割讓の儀あるを見て極力是に反對し日本をして其占領を敢てせしめざりしもの露國なり。是に依つて露は其利益範圍に多大なる打撃を受けたるものと信じ。彼の沿海州、黒龍江州の安全を攪亂せられたるものとして抗議したるものなる可く。露の自衛權の活動と認めて又己むを得ざるの處なる可し。日本が遼東を占領する事極東の平和秩序を紊亂せしむるものなりとせば露の遼東を占領するは如何。同じく絶東の安寧を亂すものにあらざるを得可きか。露の外交は粗笨撲野なるが如くにして實は圓轉滑脱其辭令に巧みなるに至つては驚くの外なし。其旅順大連を占

するや割譲と云はず、占領と云はず、表に稱して租借と云へり。何故に日本は遼東を租借せざりしや。今に至つて何故に抗議を加へざりしか。戦後の虚なるを突かれし事と、其租借なる文字の巧妙なるに眩せられて寛假し去りたるなり。嗚呼、租借なる哉。茲に軍港を築き、第三國の軍艦を入れず。茲に兵舎あり、東清鐵道あり。一日にして露境十萬の兵直に入つて直隸灣頭に大牙を擁せん。此の如くにして何ぞ遼東の平和を危くしたるものならざるを得んや。彼は巧みなるが上に更らに巧みなり。大連にダルニーを自由港として開き、或者の同情を博し得んとせるのみならず、商業上の中心をも奪ひ去つて己の利益圈内に誘はんとせり。露國の計畫は過大なるに似たり。其畫策は傍に人無きが如くなり、旅順大連の根底稍堅きを得たると同時に機に乗じて滿州を占領し、撤兵の期來りて未だ退かず。鐵道沿線の防護を名として劍を清人に對し、豈に横暴ならずとせんや。英も佛も獨も米も是を戰爭に訴へて迄争はんと欲する理由を有せざるに似たり。何ぞや。其利益の關する處淺ければなり。潜に思ふ、バルカン半島に中央亞細亞に遼東に常に露と利益の衝突を爲すは英國なり。英國の今寡言沈黙を守り敢て發せざるは故なき能はず。其遼東に於ける經營

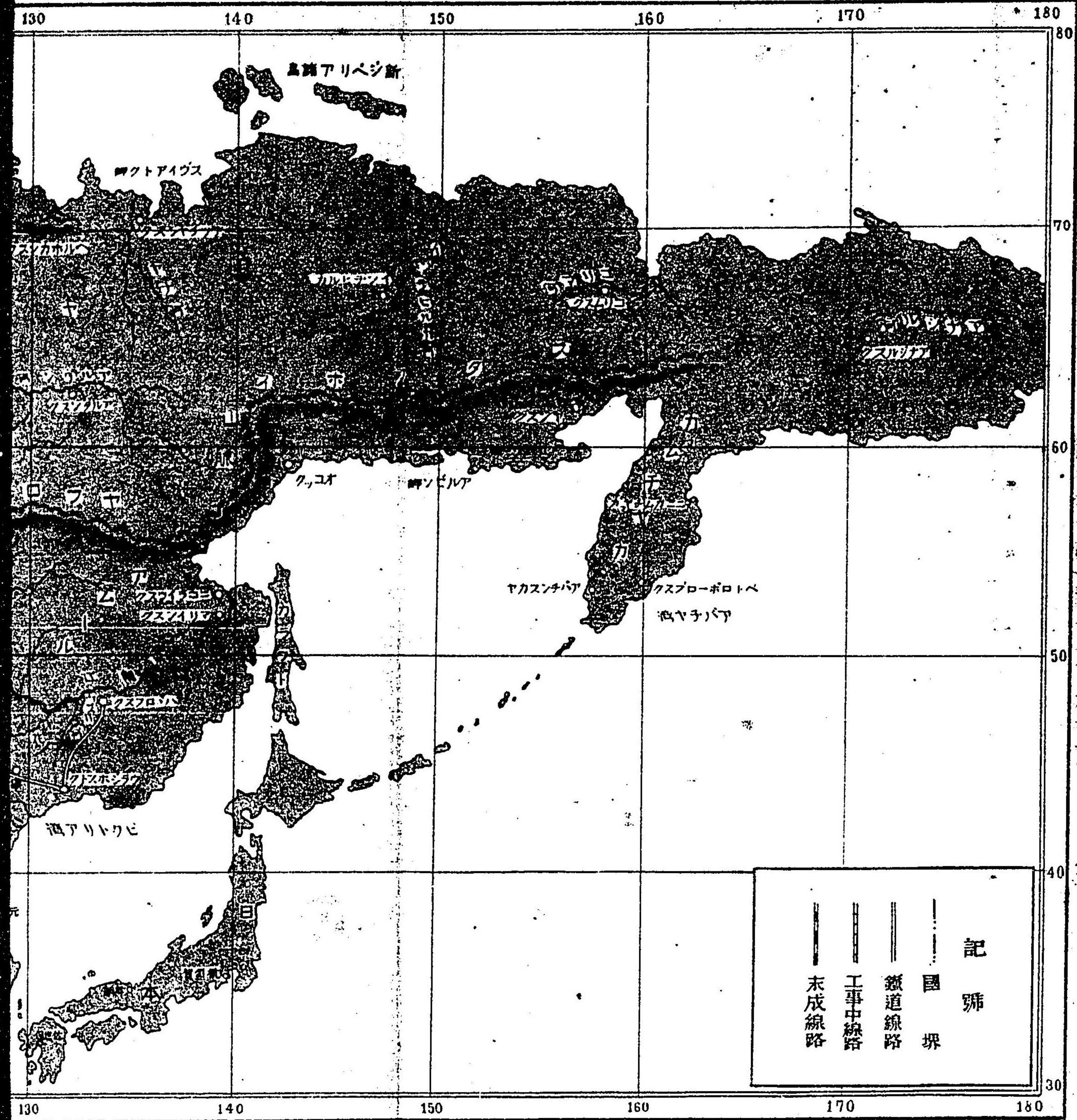
を承認して中央亞細亞に於ける畫策を中止せしめんとするの志に非ずや。如何となれば英國の利害を衡すれば楊子江に於けるよりは印度に於けるもの遙に重ければなり。然も露の滿州占領は楊子江の英の利益に影響する處直接ならず又必ずしも多からざるを打算せるが爲らざるを得んや。英國頼む可からず、吾は吾にして始めて立つ事を得可し、吾利益を保護せんとせば宜しく吾力に依て保護す可く、吾自衛を完全ならしめんとせば空しく吾權力を以つて主張する處ある可し。日清韓三國は極東に於ける兄弟の國、兄なる吾國に於て清韓兩國の獨立を扶植し、連衡して立つは吾自彊の策。其間に蜿蜒たる長蛇の首を挟むは遼東の平和に害する處なからざるか。然らざるも露は北奉天を壓して清の境に臨み、豆滿江に依つて朝鮮の脊後を窺ひ、浦撿斯德を以て吾西海を制せんとするに非ずや。清韓の安寧を維持するは吾が安全を保全するの道にして、遼東の平和を擔保するは吾が國の責任なり。起て起つて露の横暴を懲されば吾人は脊後の憂慮に熱せられたる一點の火を顧みざるが如し。聞くが如くんば、義州鐵道も亦露人の手に依つて經營せらるゝが如し。是を往事にして日を経ば滿州の大兵は北

京に入るも京城に入るも半日にして得可し。是我國の安全を危くするのみならず、清韓の運命を委して露に與ふるが如し。日清戦争の主旨は甚だ美なりし。正義なりしなる可し。然も戦後十年ならずして絶東の形勢此の如く然も其因由なる露の遼東租借が日清戦争に起原せる事を思へば、悚然たらざるを得可けんや。是實に吾人が絶東の二國に向つて甚しき罪過を敢てせるもの今にして奮起せずんば、日清戦争の功績を泥土に委するのみならず、其大趣旨を没し、其大意義を水泡に歸せしむるもの日本帝國が敢て爲すを肯づる所なる可きか。

然も露國は厚顔なり、鉄面なり、歐州の第三國が必ず其行動に妨害を與ふ可からざるを打算し、唯吾國の動靜を伺ひ、擲楡するが如く挑發するが如く。或時は鴨綠江岸に兵を出し、或時は議を曖昧にし、一面に於て戰備に汲々たるが如きは抑何ぞ。試みに露の意嚮を揣摩せんに、日本を挑發し、愚弄して戰を挑み、効を一舉に決せんとするが如し。思ふに滿州の經營は露が掉尾の一大事業なり。是を成功すれば百年の大計成り、是を失敗すれば國運永久に伸ふる能はず。滿州占領は露の死生の問題なり。奚ぞ此掉尾の大事業に眼睛を點せずして、已むものならんや。是を點せんとし

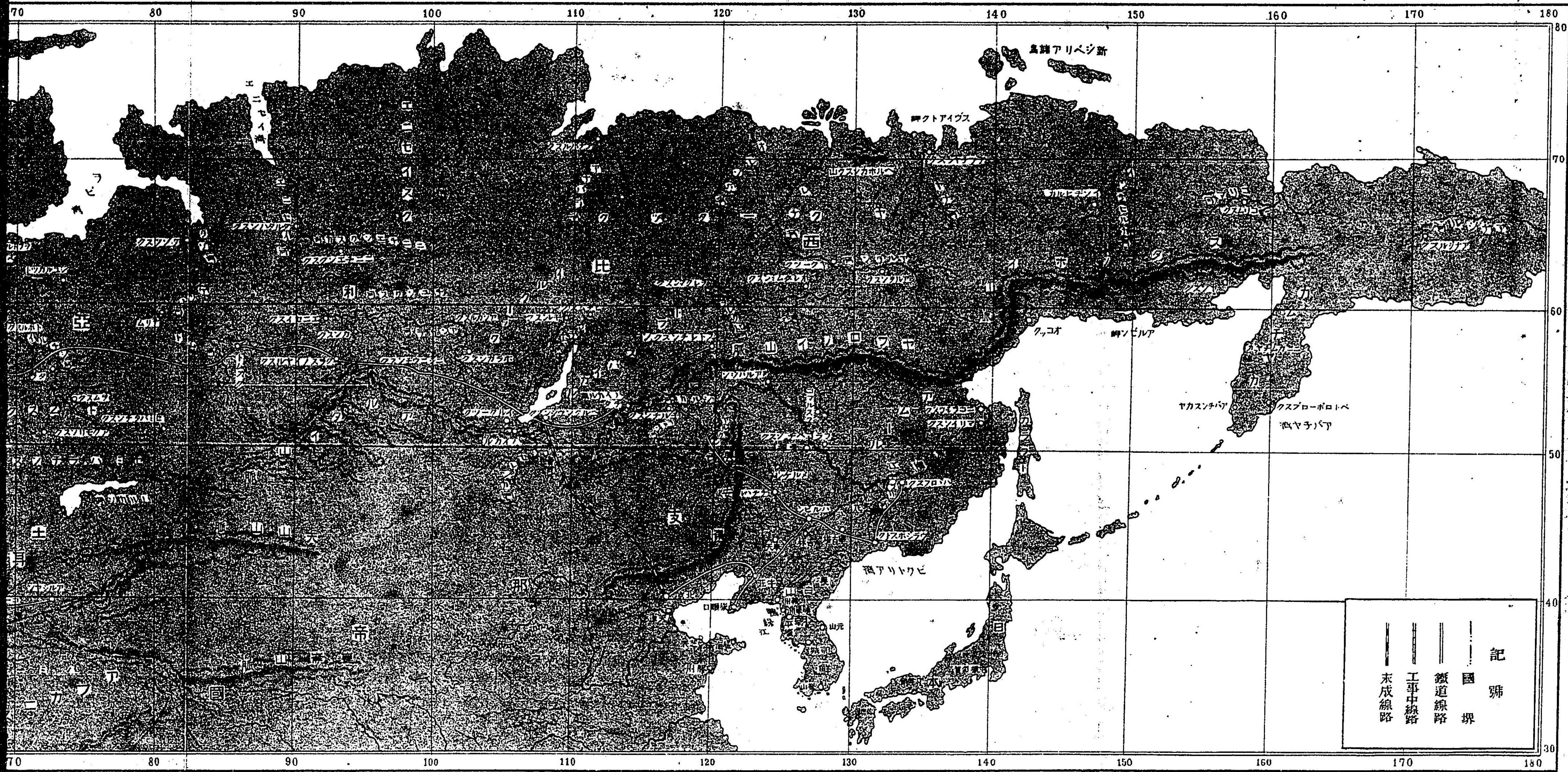
て配慮する處は唯日本のみ。日本の體度如何は彼等が事業の成否に關す。彼は日本が默認せざるを知れり。而も如何なる程度迄其抗議を主張す可きかを圖るは事業の成否に關する大なり。露土戦争を敢てしたるザーは滿州の爲めに日本を敵とする事を辭せざるのザーに依つて其企劃を繼承せられたり。然りと雖も戦争は彼が希望する處に非ず。出來得可くんば炮火を交ゆる事なくして滿州を取らん事は彼の上策。若し日本にして兵火に訴へても抗議するの意思あらば是を速めて一戰の賭博に付し、勝つて日本を黙せしむるをば中策なり。若し敗駟の恥辱を得ば遠く去り、拿破崙を苦めたるの故智に慣ひ、茫漠たる陸地に誘ひ、曠日彌久の策を以つて窮境に立たしめ、機を見て大舉一氣に企望を遂げんとする。是下策なり。要するに露の意思は滿州問題を永く曖昧に付せんとするに非ず。必ずや短日月の間に大決定を得。國運の規模を確定せんと爲すものに外ならざる可し。如何とすれば彼の行動を見よ。一動吾人の意表に出で、戦はんとするが如く。又平和を欲するが如く。一に日本の決定を促すが如くにして、然り、戦ふも戦はざるも皆彼が三策に合ふ可し。若し戦を一時に決し、露をして滿州より退去せしめん、事吾等が取る可き第一の策に

細 亞



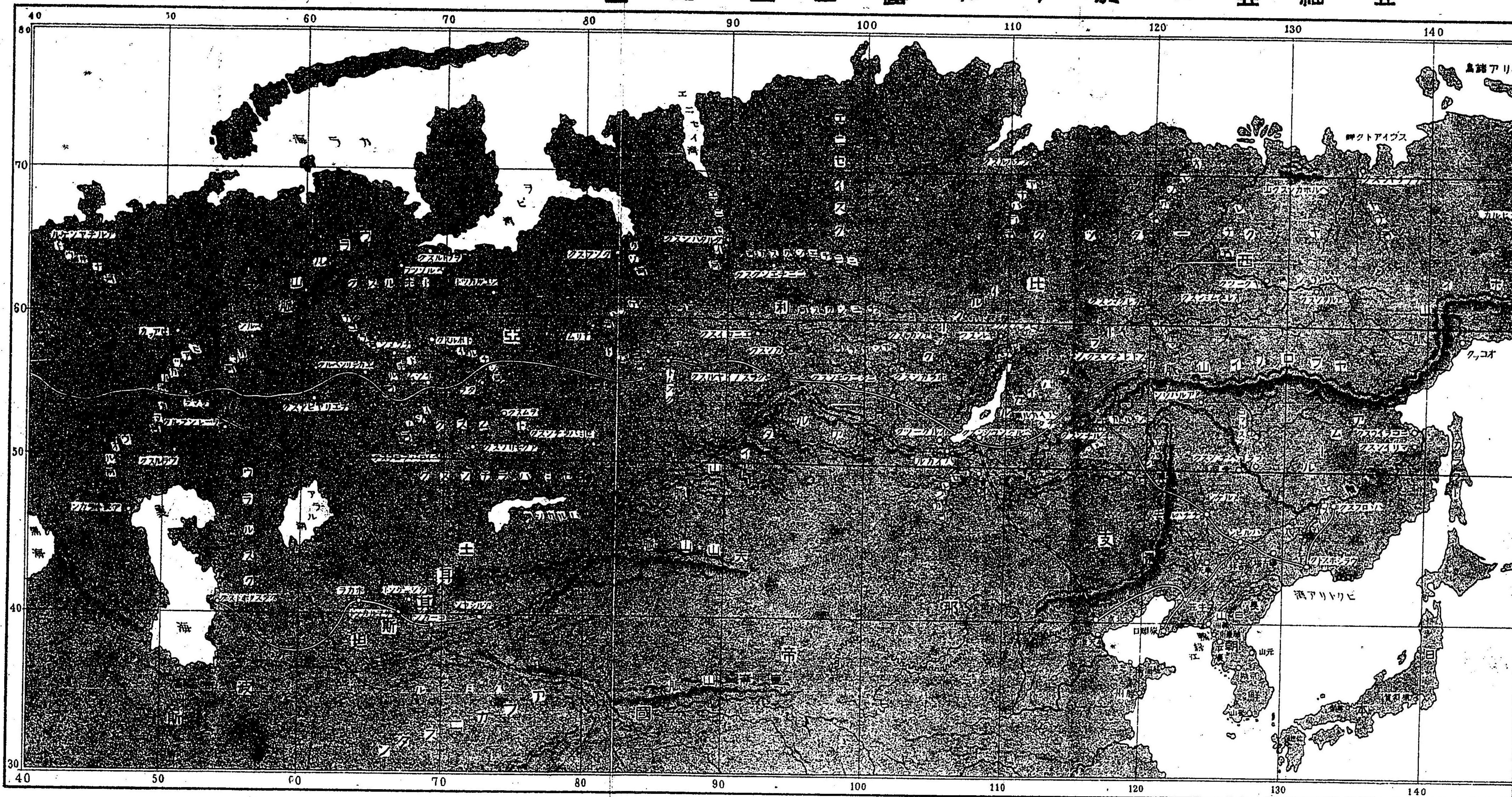
三二
 して、絶東の平和を擁護し、清韓の獨立を扶植するに他の手段なきと共に露の滿州
 を撤退せしめ、旅順も大連も再び是を清國の有となす事實に吾國自衛の爲に圖ら
 ざる可からざる處なる可し

亞細亞ニ於ケル露西亞略圖



	記
	號
	國
	界
	未成線路
	工事中線路
	鐵道線路

亞細亞ニ於ケル露西亞略圖



附 録

西比利亞の交通

此編ムラビオツフ伯の述ぶる處精練腐の據なき能はずと雖
一讀の價値ありと信し摘譯して讀者の覽に供す

西比利亞の大河及其數多の分流は征服の業を輔佐したるのみならず露人の此土を占領するに及では商業通信に最も便利を與へたり然とも露人の速に増殖して南方に膨脹し、北方より一層肥沃の地に住する武勇の土民を征服するの勢を得たる時、露人は此天啓の通路を補ふの必要に迫られたり蓋し南方は其氣候地質廣大なる植民地を設立するに適せりと雖も、北方の如く大河の分流相接近し、僅に數哩の陸路によりて往々兩河の間を連絡するの便なきが故に、植民はまづ道路を以て都會と村落とを連絡するの必要を認めたるが故なり、モスコワの主權者は露西亞の實行したる海洋を北方亞細亞に及ぼし、混亂暴烈を鎮定し部族の争鬭や原野に遊牧民の掠奪によりて蹂躪せられたる所に、強盛平和なる政を施して露西亞帝國を建設したり、則ちコサツク人の暴烈恫懾すへからざるを見て、規律整然たる通信組織を設け之を統御するの必要なるを認め、第一に驛路の數地驛舎の建築取者の移住に着手したりけるなり、千六百一年ヤムシナツク即ち取者を、西比利亞の國境の一都會チツメ

ンに移せし、其數次第に増殖し千七百十年には全口二十五万の外、彼等は家族を合して殆ど七千人に達したり、又主要なる都會の間に精密に測量して里程標を樹て、千七百十五年ヤクーツク及オコツク間に此業を卒へ、千七百二十一年之をクラスノヤルスク及イルクワツクの間に行ひ、千七百二十二年(二十二年ならんか)を發して西部西比利亞の道路を幅二十

一呎に廣むることなせり。

凡て是等の處置は、施政上にも、文書、官吏の迅速なる往復にも甚だ必要にして、人口稀少なる大國に政府を設立せしもの慣用する所なり、サイラスの西部亞細亞に於ける、ジャイレマシの中央歐羅巴に於ける、皆風に道路を改修し、政府の急使に特別の任務を行はしむるの必要を認めたり、然れども露帝は國權を西比利亞に扶植するや否や、遠隔の領地及其住民の利益を謀らんが爲にこの處置を採用せり、其所見違ひに時流を抜くものと謂ふべし。

馬匹取者の準備を有する驛路の聯絡整頓するや國家一般の用、旅客の來往、音信の傳達皆之に資れり、而して勞役に對する報酬頗る低廉にして、十八世紀の初西部西比利亞にては、驛馬の借料一露里一コハツクの十分の二或は三なりしか、千六百卅年蘇格蘭に於ては一哩に付き二志半なりき、文書の郵税亦頗る低廉にして、ソロニツク(殆ど一オンスの六分の一)を以て單位に算し、モスコウよりウエルクハチュルトホルスク、チウメンに至るまで、平均二千露里以上には一ゾロニツクを十八コペンシク、モスコウよりペレンツフ、シユルガツト、トムス

ク、エニセースク、クラスノヤルスクまで、平均距離三千七百露里以上は三十コハツク、モスコウよりイリムスク、ヤクーツク、イルクワツク及チルチンスクまで、平均距離六千五百露里對し四十コハツクを課せり、この定率は千六百八十二年及千六百九十六年に行はれたるものなり、今之を殆ど百五十年後即十九世紀の前半期に於ける西歐の開明國と比較せば、其低廉なる驚くべき者なり、英に於ては一封書に對し十四片を徵し、佛に於ては八百基の最大距離に於て、七グラム半(二ゾロニツクに足らず)に對し一フラング二十位を課せり(九百基はヤクーツクに至る距離の殆ど九分の一なり)合衆國に於ては、千八百四十六年に至るまで三百哩以上に對し十仙を徵せり、千八百三十六年英佛の會議に於て、國境を通過する郵便税は十片乃至一フラングと定められたり、斯の如く商業最も發達したる英國に於ても、今世紀の初に至るまで郵便制度は最も簡便なる徵税主義に基つき、全く公衆の金錢を食はるの目的なりしか、露西亞政府は五十餘年前バルマーの發表したる卓見を、既に西比利亞に於て實行せしは甚だ稱すべきの事なりとす、此説たる郵便事業の目的は公衆の便利を謀ることなす者にして、現今舊れく西歐に行はるゝ所なり。

往者西比利亞に於ては、郵便の配達稀有にして且つ遅延したり、千七百三十四年トホルスクよりモスコウに毎月一回の發送をなせり、其後千七百三十一年之を二週間に改定せしか、トホルスクよりエニセースク、ヤクーツクニは二個月毎に一回なりき、十八世紀に於てカムサ

四

ツカより音信のセスコウに達するは半年を要したり是等の遅滞は今日奇異の觀なりと雖も、西歐の最も閉化せる國民の郵便送達と比較すれば寧ろ驚くに足らず、紀元千六百三十三年以前はロンドン・フントロップ・ブルンセルの間は毎週唯一回一千六百六十七年エゲレボロー・アムステルダム間は一週一回、イシパル・チニスに一回千七百二年新紐克と教士頓との間は二週一回なり、英國諸島に於ても亦甚だ遅く、千六百三十五年舊信は徒歩によりて運送せられ、ロンドンより蘇格蘭我は愛爾蘭に送くる音信の往復は二個月を要したり、實にハルマ川の計畫前(千七百八十四年)に於ける郵便の平均速力一時間僅に三哩半なりしなり、是等の比較表に依れば、往昔西比利亞の郵便事業は敢て甚だ後れたりしにあらす、誠に國土の面積氣候、人口の稀疎、彼得大帝の時まで、西歐の文明の感化を達せられたる露史特有の情態を參考すれば、露國政府が其遠隔の領地に對する注意に向つては、充分の信用を與へざる可らざるなり、西部西比利亞は港濱千里の平原にして道路敷設の際には沙流激湍を横斷する外は少しも困難なく、渡船を使用するを以て交通商業少しも阻礙せらるゝの憂なかりしと雖、東部西比利亞に於ては國土の形勢しかも利便ならず、滑大なるバイカル湖は南北四百餘哩に亘り、高山之を圍繞して頗ぶる峻險なる状態を呈し、極東のヤプロニーは大平洋に向ふて峭立するが故に、カムサツカと交通の便を開かん欲せば、オコック海峡に到るに先ちて、之が大障壁に遭逢すべし、貝加爾湖は平穩の時容易に通過すべく、後貝加爾に旅客貨物

を運送する大道なりと雖も、商業の増加する時殊に恰克圖を経て支那に通ずる貿易の發達せし時、之を通ずるの不便なるや明かなり、其は冬季數月間凍結して儘に堪へず、加之春秋二季に於ては暴風に妨害せられて渡航すべからざる事勢からざればなり、是等數多の原因によりて商業屢停塞し、貨物運送の方便杜絶して、沿岸に堆積したることあり、十八世紀の終に當り、露西亞政府は是等の事實を曉得し、貝加爾湖の極東は船によりて通過すべからざる時、之に代用せんため湖の南端に沿ふて道路を布設するに必要なる費用を支出せり、是より交通斷へす行はるゝに至り、而して其道路はチルチンスク條約によりて確定したる境界に達したりしが、ムラビチツフが濠洲なる行爲を以て境域を太平洋岸に進めし時、黑龍江ウツスヴィーの流に沿ふて浦達斯徳に延長せられたり、其之を東方に延長するに當りてや海を去る數千哩のイルクワンクに標柱を建て、單に「大平洋街道」と記せり、この適當の路はムラビチツフが極東政策の目的を節約したるものに外ならざるなり、

黑龍江及ウツスヴィーに沿へる道路は豫備にして、ムラビチツフが占領の當時より實行せし運船の航通、氷霜のために果すべからざる時使用せられたり、

十九世紀の中葉に於て交通機關に改良を加へ、西比利亞を貫して其經濟上の發達を奨励したり、即ち千八百四十三年汽船初めて、オプ河を航し、千八百四十六年、コンスタンチン號、黑龍江口に入り、千八百六十三年、汽船エニセイを航行せり、而して現行西比利亞の大河及其一層

緊要なる支流には、汽船來往して商業年々繁榮に赴く、
 鐵道敷設の幾年前西比利亞に於て汽船航運の發達せしは、十六世紀十七世紀に於て哥勝克
 人が遠征の時南方に達する道路を使用する前、久しく北方の河流にありて進行せしと一對
 の奇觀たり、然り而して汽船はエルマツク及其繼續者の足跡に従ふて、殆ど西比利亞を縦横
 に通貫せり、

汽船航運は互に相倚り相助けて交通の便を與ふるものなれば、西比利亞鐵道の敷設及將來
 を檢査するに當り、河流の汽船運航の發達及現狀を一見するは必要なる事なるべし、
 西比利亞の沿々たる河流に於ける航運の發達は唯に氣候の妨害を受くるのみならず、大河
 は人口稀なる國土を経て往來稀なる海に注ぐが故に阻害せられたり、エニセイ、レナは北方
 に流れて、最近まで定期航運に不適當と看做されたる北海に注ぎ、黒龍江は概して東方に赴
 くさ、シベリヤ、ウツスリより多量の氷を併せて、直に北方に奔ること緯度五度に及び
 て、沍寒酷烈なるオコツク海に入る、何れも其地方は到る處、每方哩の住民實に零細に過ぎま
 るなり、

北方の大河中オプは遙に西方に横はりて位置最も宜しく、レナ、エニセイよりも低緯度に於
 て北海に入り、其流域の人口はレナ、エニセイの濃流する地方よりも多く、該河の大部を擁す
 る西部西比利亞は、約百萬平方哩に三百萬人を有し人口の稠密西比利亞に冠たり、且つ歐亞

に近くして未製品の輸出及製造品の輸入あり、運輸の業甚た盛なり、
 オプ及其支流は事情かく順便なるを以て、汽船の迅速に發達せり、左表はトルゴルフの
 況と、西比利亞及西比利亞鐵道より成れる者、一見して半世紀に於ける船隻の大に増加せ
 るを知るべし、

年	代	トルゴルフの汽船	「西比利亞鐵道」の數
一八八七	一	二	一
一八八八	一	五	三
一八八九	一	一〇	一〇
一八九〇	一	一六	一〇
一八九一	一	二六	一〇
一八九二	一	一〇	一〇
一八九三	一	一〇	一〇
一八九四	一	一〇	一〇
一八九五	一	一〇	一〇
一八九六	一	一〇	一〇
一八九七	一	一〇	一〇

沼河貿易の分配は以下の順序割合を以て行はれたり、チウメンより来る所の歐洲の貨物はチユラ、トホルを下り、其一小部分を上遊タブタ及ソスバに送り、トホル河口には緊要なる區別を設けて、其百分の二十五をイルチシ(第二航路の船によりて)より上流サムスク、セミハラチンスクに送り、殘餘七十五をイルチシのオプと會流する所に送り、更に其一小部をオプの下流キレンフ及オプドルスクに致し、大部をシユカツト、ナリム、トムスクに上げし、チウリン及ビーに分配したり、是に依りて考ふれば歐洲の貨物なイルチシよりも主としてオプによりて轉送せられ、西比利亞の物産はまた同一の水路によりて前者と反對の方向に運輸せられたりしなり。

チユラ、トホルの下流は、露西亞及西比利亞より交々貨物を送致する所の、河流大に相合するを以て商業上最も緊要の地なり。
オプ河の航運は、氣候の嚴烈及び用具の欠乏よりして幾多の困難に遭遇す、冬季數月間河水の凍結するや、凍船はチウメン、トムスクの如き要地にたも到着する能はず、發着表より判定すれば航行の期間僅に四個月に及ぶ、又礁標の設備なく河水に、増減落漲を適當に觀測したるものなく、是等の觀測を急報すべき電線なく航行の危険愈甚し、然れども是等の不便は商業の大に發達するに及んで渡海船を使用し、又はイルチシ、オプの河岸に電線を設けて、水量の變化するに至らば直に警戒を加へ得可きものなり。

千八百八十四年ベルムよりチウメンに鐵道の開通せし以來、商業の進歩は殊に著しきを致せり、鐵道はオルガ、オプの間を連絡したるものにして、河流の相集合せるチユラ、トホルに於ては貨物の回漕の瞬時にして左の如く増加せり。

- 千八百八十六年 三百萬ブート(殆ど五萬噸)
- 千八百八十八年 七百萬〃 (殆ど十一萬五千噸)
- 千八百九十年 八百萬〃 (殆ど十三萬三千噸)
- 千八百九十五年 千六百萬〃 (殆ど二十六萬六千噸)

西比利亞の第二の大河エニセーは地利宜しからず、其の北海の河口は極北にあり、河岸の人口は稀にして、エニセー、スク及イルクウツク州廳の管轄せる約百五十萬平方哩の地にして、九十萬の人口あり、歐洲よりも歐洲へも貨物を轉送すること絶てなく、隨ふて凍船の航運後世に初まり、其進歩殊に速くなり、千八百六十三年凍船の航運を開始し、千八百八十八年四隻を以て全體の貨物十二萬九千ブード(四千噸餘)を運搬し、千八百九十年六隻を以て二十六萬ブート(四千噸餘)の貨物を運送せり、エニセーの緊要なる支流アンガラは貝加爾湖より發し、セレンガ河と連絡せりと雖も、之に定期航を開始するは至難の事に會す、其貝加爾湖よりエニセーに合する迄の全長千七百五露軍にして、凍船の交通すべきは唯フラツキまで六百露軍の間のみ、之より下流千露軍は激湍にて頗る險難の状態を呈せり、千八百八十五年シビ

アコツフなる者五個年航行の特許を得其目的を以て汽船を製造せしむ、千八百八十八年計畫
全く失敗に了りたり、

アンガラに航路の妨礙ありて、イルクーツク、後貝加爾及モンゴリアよりの商品を輸送すべ
からざるにより、エニセーは航路短かくして大に價値を擡せり、詳言すればクラスフヤル
クよりエニセースク乃ミニエシンスクに至り、アンガラに於ては貝加爾よりバラカンヌク
に至るのみ、

運河を以てオプ、エニセー、兩河を連絡するの策は夙に露西亞政府の注意したる所にして十
八世紀の末オアの支流テムミ、エニセーの支流シムとを聯絡すべき計畫をホール一世に
獻し、後兩河の他の支流を聯絡する運河の開鑿を獻策したる者あり、これ畢竟土地平坦にし
て數多の河流相交錯するを以て、開鑿上種々の利便を有するを以てなり、然れども是等の計
畫は當時採用の運に致らず、晚近に至りて實際決定したり、千八百七十五年西比利亞の商賈
ランチュソフはケット(オアの支流)とグルートカス(エニセーの支流)を聯絡せんとして、私
費を投じ幾多の研究を企て、計畫の容易に實行なれ得べきを確證せり、この時政府も之に見
る處あり長七露里半、底幅四百二呎の運河を完成せり、グレートカスはアンガラ河口に近き
處に於てエニセー注ぐを以て運河の位置其宜しきを得たりしなり、

運河は現今短期の間、唯吃水淺き船舶を以て通航するを得へきも、商業繁盛に趨く時は其改

其を施し得可きもの多し、然れども、アンガラに船の航通すべからざる間は、之に向て巨額
の費を投するに至當船りと言ふべからず、何となれば吾人の既に論じたる如くアンガラの
航通すべからざる時は、エニセーの發達得て望むべからざればなり、故にオプ、エニセー運河
に將來も、亦畢竟アンガラに流船の航通するを否むに關す、若夫れ是等の問題幸に解釋せら
るゝの日は、イルクーツクよりチウメンに貝加爾より裕ヅラ川に、五百露里の浩大なる
水路を得へし、

第三の大河レナは位置最も悪しく、河口遙に北方にありて、其三角洲は廣大なれども、接近し
難く、其近隣居住の人民は甚だ寡なし、ヤクウツク州の面積は百七十萬平方哩にして、人口僅
に二十七萬二千、而して歐露を距ること遠く但つエニセーとの間は二千六百六十露里、即ち
四百四十哩の間運河の相通すべきなし、ムラソクスカヤ、ヤクーツクの間は流船航通すれど
も、唯毎年一回ヤクーツクに到るのみ、

黒龍江は西比利亞の大河中最も利便の位置を占め、其流域低緯度に横はり、而して船舶に常
來往する所の海に注ぐ、露國が其永久の占領は實に海より始まり、隣國の人民稀少にして
露國の占領日尙淺きに、流船の航通は堅々として進歩せり、此は政府の指導の下に奨励せら
れたるものに外ならずして、最初の流船コンスタンチンは政府の命を奉じ、千八百四十六年
この河口に入り、第二の著名なる流船アルゲンは、ムラビチツフが、シルカ河邊に構造したる

ものにして、反對の方向に進行せり、實に千八百五十四年ムラビナツフが初めて河流に試みたる有名なる航行これなり、黒龍江は當初政府の漁船のみ航行せし、千八百七十年私立會社に於て旅客郵便の搭載を始めしより、其數増加して十二隻となり、千八百八十五年諸種の會社及民間の企業家に屬する私有漁船四十四隻に上ほれり。

ストリチンヌクよりニコライフスクに至る、三千七十露里二千哩以上の間は、黒龍江に定期船あり、其ウスキーを滿ほる支線路は長八百二十露里、約五百四十哩、其他別線路にもまた同業を營むものあれども、郵便物を運送せず、尙セヤ(千露里の間)及ブレヤを溯ほり、主として上流の採金場に向く漁船數多あり。

黒龍江の航業は人口其沿岸地方に増殖し、西比利亞内地の通信機關の改良するに隨ふて益々進歩すべし、蓋し不凍海に注くは唯此一流のみなれば、萬國商業の大通として太平洋の價值増加するに隨ふて、其價值も亦愈揚るべし。

西比利亞諸江の航通すへき状態に就ては、以上畧述する所に據りて其缺點を視ふに足る、惟黒龍江は幸に東流にして近年漁船の來往繁く、實に西比利亞の北部を東西に通貫せる大道の大部たり、他の大河に至りては其利用すへき處只中區にして、定期船の通航する流域の殆ど全部は北緯五十度乃至六十度の間にあり、此地方に於ては二大河の支流相交はりて、歐露に若くは該地より貨物を運送すへき便路を成せり、此二大河の下流は殆ど正北に赴き、來往

絶無なる北海に入るを以て、現今之を使用せず、微々たる一地方の商業に利用せらるゝのみ故に航洋漁船を浮べて是等の缺點を補んとするの計畫を立てたる者有れども、其利益薄きかために敢爲なる航海者の研究は全く無効に歸したりしなり。

十六世紀に於て露船はカラ海を航行し、此處に英國の航海者に邂逅せり、蓋し當時博學多識なる執政者さへ歐羅巴と西比利亞との間に海上交通すべからざるを信じたり、然るに西比利亞の進歩を企圖したる西比利亞人シドロツフは、千八百五十三年初めて之に一矢を酬むたり、彼の説はベチヨフ、オアの河口の人民が、斷えず交通するに基つたる者なれども、全く世人の注意を惹きざりき、而も彼は意氣奮も沮喪せず、數年實行を勵みて遂に功を奏し、以て其正確を証明したり、ヅガ號の有名なる航海の如き雄壯なる航海の歴北海に行はれしは、畢竟シドロツフの畫策努力して其基を肇めたるに因るなり。

シドロツフは多年辛酸の後、千八百六十二年、遂に其目的を達するや、クルウセンステルンに就て西比利亞の沿岸に航海を開かしめたり、此航海は失敗に終りしかど、カラ海は氷の封鎖する所にあらざることを顯はれたり、シドロツフは我が應援者なきを見て瑞典に赴き、ノルデンスクウールドと交を結びて、海路西比利亞に達し得べきの説に同意せしめ、千八百六十九年自ら漁船セオルナを以て發程せし、ベツチヨラ河口に於て英國漁船ノルホルクを救助するがために、貴重の時機を失し目的を達せずして歸航するの止を得ざるに至れり、爾後彼

はピーターマンナヤール紙上に、歐州よりエニセー河口に達する船舶に對し、賞金二千磅を増與するの廣告を掲載せり、カブナンリヤンテシ之を以て發憤し、千八百七十四年オアエニセーの河口に達し、而して英國に歸れり

かくてシドロップが理論の實際茲に初めて顯はれしより、北海航路に對する有力なる刺激を人士に與へ千八百七十五年にはウヰヤン、ノルデン、スクジワルド等エニセー河口に達せしが翌年シドロップの派遣したる船は不幸にして難破したり、されど彼がエニセー河口に於て製造せしめたる一船は、千八百七十二年河を下り海を渡りて聖彼得堡に達したり千八百七十八年は、西比利亞航路に歴史に於て最も顯著なるべきなりき、二隻の漁船はオアに達し、「サイツサ」モスクメはエニセー河に著し、「モスクハ」はエニセー河口に著し、ノルデン、スクジワルドは「ウヰヤン」「ラセル」及「エクスプレス」を以て發程せしが、後に二隻はエニセー河を溯ほり、レナはレナ河を溯ほりて、海岸を距る二千七百露里(約千八百哩)のヤクーツクに至り有名なる「グサガ」は「ベリヤン」海峡に達して、氷のために停航し翌年夏大平津に入りたり、ブルテン、スクジワルドは之に因りて、英國和蘭の航海者が十六世紀に通貨るんを競争したる、北東航路經過の名譽を獲たり

此有名なる航海は、海路西比利亞北方の大河に到るべきことを證明したり、故に翌年英國に於ては西比利亞の海土貿易を發達せしむる目的を以て、二會社を設立したれども皆失敗に

歸したり、此海上貿易の利たる西比利亞人口の増殖、内地交通の改良、漁船貿易品の精製、貨物積卸の便宜に基因するものなれば、一朝一夕の間に望むべきにあらず、而して西比利亞の要求に對し海路に由りて僅少の貨物を供給するの計畫は常に變はることなし、千八百九十七年磚茶をこゝに輸送せんがために、上海に於て漁船に搭載し之を龍動に送りたり、然れども西比利亞鐵道の一部開通せしより、既に北方の河流と相關係せる海上貿易は漸く増加し來れり、

西比利亞の河流は交通不便にして、且つ海洋に公共の出口を見出すこと困難なるにより、獨立の交通機關としては、現在水路の補助として、鐵道の必要自から社會の注意を惹くに至れり、この目的は甚だ緊要なれば、其將來の影響は吾人の深く注意すべき所なり、

抑西比利亞に鐵道を敷設するの計畫は、ムラビヤツクがこの等閑に附せられたる邦土に斬新なる生命を注入せし時に初まれり、即黒龍江及其下流探險の後、僅に一狹土を以て、キシ湖に境せるアカストリ湖の要害を窺見するや、千八百五十七年コロネルロマノフは該地とソホースクの間、に車道を敷設し、然る後之を鐵道に變更するの策を立てたり、こゝは商品な

龍動に送くるに、當り北方を迂回すること及黒龍江を經過するの困難を避くるの考案なりし、資金欠乏して之を實行するを得ざりき、されどムラビヤツクは其必要を認め、千八百五十八年四月三日書を其兄弟に送りて、黒龍江近傍の諸港に交通の便を開かんせば必ず

鉄道を要するを暗示したり

千八百五十七年英國の技師、ノーゴロドよりカサン、ヘルムを経て大平洋の一港に、馬車鉄道を敷設するの議を提出しなり、現時より之を見れば奇怪の觀あり、雖も當時は未だ商業發達せず人口稠密の地方なりしこと及びその鉄道は最初頗る遅緩なりしことを記述せざるべからず、また西比利亞の馬匹四百萬にして、石炭の採掘甚だ少かりしを考ふれば、この計畫は實地に適當せるものにして、恐らくは、遠距離の間に施すべき唯一の方法なりしなり、されどこの提議は費用の豫算附帶せざるにより、政府の注意を受くる能はざりき、同時に米人コリンズは、イルクワツクよりチタに至る短距離の鉄道を設けて、黒龍江の上流と東部西比利亞の首都を連絡せんとする計畫を立て、之が會社を起して必要の資金を西比利亞に募集せんことを建議したり、ムラビチツフは、之を以て、新領地の交通を自由ならしむる者となし、この計畫を賛成せしむ、政府は尙早を唱へて之を却下したり、

千八百五十八年全國を横貫する大鉄道敷設の議は、モリソン、ホーンスレー、ガモスコ、大平洋とを連絡せんと建議せしより再び觸起するに至れり、彼等は至も助力を露國政府に仰かざるを公言せし、一旦斯る緊急の特権を賦與せば、長く西比利亞の商權を全く外國人に委ねざるべからず、且つは特に政府に於て斯の如き廣大なる計畫を實行するの意なかりしかば、又之れを斥ぞけたり、

千八百五十八年ソフロノツフは又廣大なる規模を以て他の計畫を提出したり、こばサラトツフよりキルギス原野を経て、セミパワチンスク、ミニウシンスク、セレンギンスクに赴き、黒龍江及び北京に達する鐵道を敷設せんとするものなり、しが前者と同一の非運に際會したりされどこの説は著しく社會の注意を惹き新聞紙上討論の題目となりしが、他の一個の議論遂に勢力を得たり、即ちニニノゴロドよりキヤクタの間に存在する大道の方向に従ふて鐵道を敷設すの必要これなり、こもまた伴生の計畫によりて配慮すべき者となれり、凡て是れ等は其土に關する實際の智識よりは、寧ろ想像に任せて其形狀必要を設計したる者なり、これより十年を経て、一層妥當なる線路敷設の計畫を提出する者あり、之れ地方的智識に基き實際上の目的に出でたる者にして、露西亞と大平洋との連絡を求むる代りに、現存せる商業のために一線路を設けんとするなりき、

千八百六十二年コロンフ會社はラセツトの計畫に基きてウオルガ、オプの流域を連絡する一線路を建議したり、ラセツトは其間に介するウラル地方に多年使用せられて同地の事情に精通せる技師なりき、この計畫はヘルムよりニニタギルを経て、チウメンに達する六百八十八英里、約四百五十哩、を幹線として、イルピットまで十三露里の支線を有するものなれば、線路の敷設すへきウラル地方採掘冶金を業とする者は、自然之を賛成したり、千七百六十六年コロネル、ボクダノウキツフはこの好評に動かされて、ヘルムよりエカテリンバーグを經

てチウメンまで別に同一の線路を開かんことを建議し、兵略上商業上の目的に向て、之を支那國境に延長し得べきを附言したり。於是世人は眼を西比利亞に轉じたり。かくて千八百六十九年商賈リウビンツアはまたヘルムを發して、エカテリンバークを經過し、クルガンの北四十九露里約三十二哩にして、トボル河に達する第三線路に就て建議したり。其全長七百一十一露里(約四百七十二哩)にして、ケカテリンバークよりの支線百三十一露里(約八十七哩)を以て、ワラル地方を通過せんとするなり。以上提出せる三線路の共同起點はカマ河のヘルムにして、前二者はタラ川のチウメンを終點とし、河邊はクルガンの下四十九露里なるトボル河邊となせり。斯の如く終點は吾人が既に記載せし如く、西部西比利の河流航運上樞要の部分な占めたるチエラ、トホルの downstream あり、故に是等の端線はイルチツシ河の往來最も頻繁なる支流カマ河を連絡し直線を以て、露西亞及西比利亞の航行すべき巨流ウオルガ、オアの流域を連するの大利益を存す、而して諸線また均しくエルマツクが西比利亞征服の時踏破したる古來熱路に隨へり、こは昔時より移住せる露人のため、及び將來歐洲と北方亞細亞の間に發達する商業に便せんがためなり。

次で鉄道設計者は露西亞鐵道と是等諸線の聯絡に注意し、千八百七十二年と 全四年に種々の計畫をなせり。其計畫の線路は第一キチシマ……ウツキアツカ……ヘルム……エカテリンバーク間九百三十三露里、第二ニニカザン……クラスマ……ヒムスク……エカテリンバ

一、千七百七十二露里第三アラチル……ウハ……チエラビンスク間千七百七十三露里にして、今や第三線路は西比利亞大鐵道と接續せり、かくてヘルムよりチウメンに至る線路は露國鐵道に加ふると共に、將來鐵道の途かに地方に擴張せらる時は、西比利亞より及び西比利亞への貨物を運送するに至るを以て、頗る活氣を帯び來れり。されど此時ワラル山の隆盛なる礦業の實益は、西比利亞に敷設せらるべき大鐵道に影響する所の憂よりも、遂に緊要なれば、千八百七十五年政府はワラル地方の需要を供給し、又ウオルガ、オアの沿河貿易を連絡するの目的を以て、露西亞鐵道とは毫も關係なきホクダノウ井ツチ線を採用するに決したり。夫れより直ちに事業に着手し、千八百七十八年鐵路ヘルムよりエカテリンバークに達し、千八百八十四年チウメンまで竣功したり。

該線路布設以來、別に規模一層廣大にして、同じく西比利亞の河流を利用する所の計畫を起せり。千八百八十年技師オストロフスキは、西比利亞の富源を發達し露西亞と商業上の關係を高めんと欲せば、ワラル山外に露國鐵道を延長する前、西比利亞内地の交通を改良するの必要ありとの説を宜べ、西比利亞全國の鐵道を造るは尙早なりとして左の局部線路を説き示せり。

- (一) ヘルムよりトボルスクに至る八百露里を以て、カマ、イルチツシを連絡すべし、而してトボルスクは常に交通すべきイルチツシ河の邊にあれば、當時布設中の線路に改良

を加ふべし、チエラ河畔のチウメンは減水期の間流船接近するを得ず、其の間、流船はチウメンを距る二百四十六露里のエブレバに停航せざるべからず。

(二) トムスク、ラシノヤルスクに至る五百六十露里の線路を以て、オプ、エニセーを連絡すべし。

是等の二線と現在の河上航運とを以て、貝加爾湖とウラルが河間の交通を謀るべし。

(三) オムスクよりハルノールに至る線路を以て、オプ、イルチシを連絡し、富裕なる亞爾泰地方の物産輸送のために、トホルスクまでの長江路を短縮すべし、この線路は支那の國境に延長するを得。

オストロフスキー思へらく、西比利亞の中心たるイルクウツクと、露西亞の中心たるモスコウとを連絡するに就て、實行すべき方法は現在諸流に交通する流船を大に使用するに若くはなし、而して全通鐵道の敷設は、西比利亞の多少迅速なる發達に伴ふべき今後の問題に屬す。然るにこの將來の線路は、リアザン、スパスク、ウハを経て、遂かに、ズラウーイスト、チエラピンスク、ペトロホーロウスク、オムスク、カインスク、トムスク、マリインスク、アツチヤンスク、クワソノヤルスク、カンニク、ニウゲンスク、パラガンスクに達し、遂にイルクウツクに至るま

で、西比利亞の最も緊要なる行政地、商業の市邑人口稠密の區域を曉ます。ウラルがよりエニセーに至る豊饒なる黒土帯をば、殆ど全通せざるべからざるを見て、彼は其設計を省略せり、現今の西比利亞鐵道は殆ど全くこの線路に従へるものなり。

技師ステンスチルは、オプ、エニセー間の運河の開鑿を研究する遠征者の一人なりければ、恐らくは局部の研究に偏たる爲め、其所説前者よりも多く水路に頼らんことをせり、彼曰くオプ、エニセー間の運河成功し、アンカラ河の下流に改良を施さば、貝加爾よりチウメンまで五十露里の巨大なる水路を開くべく、且つ此の流は大平洋に注ぎ、黒龍江と九百五十露里を隔つのみ、この距離すら貝加爾よりストイチンスクまで、多くは河流通貫するを以て、荷客を運送すべきの地は極めて短し、乃ち以下の方法によれば、地圖は短縮するを得べし、西貝加爾湖とレンガ河に百五十露里を利用し、東シルカ、アンゴラ、兩河に於て三百五十露里を利用し、殘餘の四百五十露里は幾多の小流に頼ることを、ヤプロニー山道十八露里を獲するを以て、之に鐵道を確證せんか、大平洋より烏拉爾よりウラルが海に延長するを得べし、と政府はこの説を納れたれども、資金欠乏して實行に至らざりき。

其他私人より幾多の計畫を提出し、西比利亞諸州の知事よりも、管内の局部に鐵道を敷設せんことを請願せしも、時機未だ熟せずして、遂に十九世紀の末葉に及べり、千八百九十年露西亞鐵道は三派に岐れて、東方に延長せしが、卒然ウラル山の附近に於て工

事を停止したり、北は所謂烏拉爾鉄道にしてチウメンに達し、中央はズラツキストシアス鉄道にしてミアスを其終點として、南はチレバーク鉄道にして同名の都會に達せり。
 西比利亞鉄道全通の舊計畫今や再び注意を喚起するや、浦壇斯德を以て東方の終點となすべき大鉄道の、西方の終點は烏拉爾山外の三線中何れに決定すべきやの疑問起れり、第一線即ちベルムよりチウメンに達する者を採用せんや、西比利亞鉄道はヤルウトロフスク、ガインスク、マリインスク、グラスノヤルスク、ニウサンスクを通過すべしとの計畫は、幾多の障礙に遭遇すべし、蓋し其北走するが故に、所要なるオムスク府を通過するを得ず、其長三千四百七十四露里、且つベルム、チウメン線は全く烏拉爾の探礦地のため、若しくはカマ、チュラ兩河を連絡するがために設けたる孤立の線路なれば、ベルムよりニノオエロドまで更に千露里の鉄道を設け、露國鉄道を續接するに非ざれば、西比利亞歐洲間の輸送に適せず、第二ミアスよりの線路はクルガン、カライインスク、マリインスク、グラスノヤルスクを経て、ニウサンスク延長すべく、全長二千六百八十三露里にして、前者より短きこと七百九十一露里、第三線はオレンバークよりオムスク、アトバサル、アクモリンスク、パウロダール、ビンスク、ニウシンスクを経て、ニウサンスクに延長すべく、全長三千四百露里なり、この第三線は長程にして非常の困難あり、其西部は水無きの平野を互り冬有烈風大雪の災に遭ふべく、東部は非常の險なる山國を通過すべし、是等の理町により、西比利亞鉄道西方の終點は第二線を採

用すること、はなれり、乃ち千八百九十一年二月廿一日政府は、ツラツキスト……ミアス線をチエラビンスクに延長するに決し、は將來西比利亞鉄道の最初の停車場なるべきの地なり、十一年前オストロフスキーが發表したる意見は、今や勝利を得たり、而して新線路の方向は西比利亞の富源を發達せしむるを第一の目的として、兵略上の企圖或は露國の物品を販賣すべき、大市場を開設するの希望は第二の目的となれり、
 西比利亞鉄道の建設は遂に千八百九十一年三月十七日勅令によりて確定したり、かくて五月十二日浦壇斯德に於て其要に相應せる儀式を擧げ、ニコラス二世は、同十九日を以て其第一基石を安置したり、

規模大なる事業を圓滑に進行せしめんがため、天然の區域に隨ふて線路を數區に分割すること必要となれり、この方法を以てせば、各行政上の獨立を得て、各地に均しく事業を經營するを得べし、其配屬すべき所要の區分は東西の間凡て七個所にして、即ち左の如し、

第一區 西部西比利亞線

チエラビンスクよりオプ河に至る千三百二十八露里(八百八十哩)

第二區 中央西比利亞線

オプ河よりイルクウツクまで、千七百五十四露里(千六百六十二哩半)

第三區 サアカムバイカリア線

イルクルックより湖を廻りて、ミソバヤに至る、十二露里(百九十四哩)

第四区 ツランスバイカリア線

ミソバヤよりストイテンスクに至る、千九露里(六百六十九哩)

第五区 黒龍江線

ストイテンスクよりハバロフスクに至る、約二千露里(千三百二十六哩)

第六区 北ウスリ線

ハバロフスクよりクラフスカに至る、三百四十七露里(二百三十哩)

第七区 南ウスリ線

クラフスカより浦鹽新橋に至る、三百八十二露里(二百五十三哩)

合計七千七十二露里(四千七百十四哩)

第一區西部西比利亞線は敷設最も容易なり、何となれば平地を通過するが故に其障礙はたゞトボル、イシム、イルチン、オプの諸川にして殊にオプ、イルチンには各七百碼及八百四十碼の橋梁を架すべきのみ、其通過する所の地方はみな肥沃にして、イシム、ムラビンスク原野の如き殊に然り也。

中央西比利亞線は一層稀なる天険に逢着すべし、其地方は初め丘陵多く漸次に山岳となる西部西比利亞線に於ては道路の勾配〇、〇〇七(四(百三五分の一)を超過せずと雖も、ニウナ

ンスクを過ぐれば〇、〇一五(六十六分の一)に達す、諸川橋梁を架すべき中にエニセイ、ウダの如きは九百三十碼及三百五十碼の橋梁を要す、本線は北緯約五十五度なるオプ河より起りて北東に奔り、北緯五十七度のマイインスク、カンスクに到り、南東に廻りて北緯五十三度のイルクワックに達す。

オアカムバイカリア線にもまた巨大の困難あり、湖水と山岳との間に介する沙地は往々峻険にして巖石多く數多の激流ありて堅牢なる橋梁を要し、國土平坦となれば屢沼澤に墮む。或は豫定四千七百七十碼の鐵道を穿ち得ば三十露里を短縮すべき事實によりて推知せらるゝ如く、時に大迂回を執らざるべからず、されど露國の技師は鐵道の開鑿に熟練せざるによりて成るべく其勞苦を避けんとしたるなり。

後貝加爾線は區域小なれども又大困難の横はるあり、長七百碼の橋梁を以てセレンガ河は通過すれば、ウダ、フリアナの貫流せる豁地に昇り、遂に海拔千四百十二呎のヤプロロニー山に達し是れより太平洋に面する斜丘を降り、チヤ河、ネルチヤ河の豁地に到る、チルナヤ河には三百五十碼の橋梁を要す、一帯の地氣候最も不順にしてカプロロニーの絶嶺の如き、六七月の候は日中華氏七十七度に昇り夜同華氏二十三度に降る、雪は殆ど皆無なりと雖も土地は深く氷結す、曾てチヤの豁地に於て、試験する所によれば、海拔二千三百八十呎の高に於て、冬季土地の凍結する二十四呎六吋、夏日融解して十二呎十吋に達すれども、十一呎八吋の層氷は

候然として存在せり、黒龍江の測量は完全ならざれども、巨大の困難あるべきを知るに足るべきものあり、支流は數多の長橋を要し、本流は二千碼の一大橋を要す、冬大雪なきも氣候の不真なる殆ど彼貝加爾の如く又沿岸の住民稀疎なるを以て一倍の困難を経べし、而して鐵路の河岸は遠かるや必らず人民住居せざる深林地方を通過す、是に到れば交通の便なきが故に日用の需用品を得、又は鐵道の材料を運搬するを能はず、

南北ウスリー線は困難斯くの如く多からず、然れども路はウスリー河の狹隘なる豁地を昇りて、ホルロビキン、イマンは百八十碼乃至四百六十碼の橋梁若干を要す其ウスリーに要するを二百八十碼とす、ハンカ湖を涉れば線は降りてスイフン河の豁地に入り、浦潮斯德のゴルテンホルンに達す、

この疎略なる説明は、西比利亞大鐵道の東部イルクウツク、ハバロフツク間三千露里は存在する困難を示すに足れり、就中至大の困難は幾年前より汽船來往して運送迅速に赴きたる、貝加爾の邊及び黒龍江に沿ふて發見せらるべきを記述すべし、この事實は全線の完成上必要な工事の分配に緊要なる影響を有する者なり、

柳木工事終局の目的は、烏拉爾より太平洋まで、乃ちチエラビンスクより浦潮斯德に至る迄で鐵道の交通を開くにあり、故に充分に此目的を達せんと欲するには、多年辛酸の勞固より許すべからず、唯々、この鐵道の成るべく速かに竣功して現今河流を航行しつゝある汽船と

共に迅速なる汽車交通の便を得んことを切望すべきのみ、この目的を達せんがため、七區の事業を三葉に分ちて順次に經營せんとすこれ則ち切要なる自然の順序なり、

第一葉 第一區 西部西比利亞

第二葉 第二區 中央西比利亞線

第三葉 第七區 南ウツリ線

チエラビンスクよりエカテリンバークに至る支線は、烏拉爾線を西比利亞大鐵道に接続するやう建設せんとす、

第四區 クランスバイカル線

第五區 北ウツリ線

第六區 サークムバイカル線

第七區 黒龍江線

第一葉は直に着手せしを以て千九百年内には竣功すべし、其工事の方法は両方より漸次中央に進行するにあり、而して鐵路の陥落は實際に存するよりも寧ろ外観にして、成可く速かに交通の便を得んとするに當りては、勢免れざる所なり、第一第二葉を終れば、舊所貝加爾湖畔、黒龍江沿岸のみ、是等の地には汽船常に來往して鐵道の川流を執るべし、かく汽船或は

鉄道を以て西比利亞全土に絶つた交通を計らんとする設計は、千八百九十五年即日清戦争の終に終らんとするの時、大に政府の補助を受け、千八百九十八年竣功すべき第一第二案の工事は同時に順る進捗したり、

前掲の順序によりて工事を督勵し、千八百九十八年八月列車初めてイルクツクに達し、同年鐵道またハメロフスクに達せり、ツランスマイカル線の工事は千八百九十七年の夏、非常の降雨によりて、黒龍江、ナタレカの上航百有餘年未曾有の汎濫となり、堤防は破潰して幾多の村落を掃蕩せし時、ストイテンスクより約八十露里に達したる鐵道を失ひしが、本年工本列車の運轉しつつありシルカ河岸に於ては、機關車覆覆して鐵軌擡げ堤防もまた洪水によりて潰決する等の慘劇を見たり、千八百九十五年は一日も早く竣功せしめんを焦心せし時なるに、サアカムバイカヨフ線工事は中絶の情態なりき、この廢弛の原因二あり、流船交通の便なること及び鐵道敷設の困難なること是れなり、蓋しイルクツク及ツランスマイカル間の商業上の交通は概して夏は流船冬は陸によりて貝加爾湖を涉り凍結融解の時湖の南端を通る所の驛路を用ふるなり、然りも雖も之に沿へるサアカムバイカル線は前に述べたる如く困難なるが、上に露國の技師は從來峻々たる山地に驛路を敷設するの機に接せざりしなり、さればストツグ井ニツザよりミソマまで流船を以て貝加爾湖を横きり、舊の如く書客を運搬せんが兩地に於て積卸に時間を費やすのみならず、其費用附帯するにより

西比利亞鐵道の効益を失ふべし、故にいふ貝加爾湖邊は西比利亞鐵道第一の難關なり、是の困難に對する解釋は、米國ミチガン湖に使用するものと同一の流船を使用するにあり、この流船は冬季全列車を運搬し氷を破碎するを得べし、若し之を採用せばミストマイツザよりミソマまで、六十六露里の間を來往し以て湖南二百露里の迂回を避くべし、また費用を削減するの點より見れば、サアカムバイカル線の工費二千四百萬留に對し、流船は千五百萬留を以て足れり、故に此議に従ふて流船一隻を購入し、千八百九十七年之を横附にして列車を陸揚すべき埠頭をミソマに築造したり、

然るに頃日この計畫に、非常の反對起りてサアカムバイカル線復好況を呈せり、抑貝加爾湖は暴風激霧の航運を停止することあり、されはかゝる事變によりて兩岸に列車の停帶する時は、全線の營業は墮動を來すべく又氷を破碎する所の流船は西比利亞の嚴冬の間に凍結せる厚氷の中に一條の通路を開き得べきや所謂費用の削減すら適當なる議論によりて疑はしくなれり、實に流船二三隻の費用を計算すれば其利たる明白なるも、兩端列車を運搬するにせよ七八隻を要すべし、一隻は運備七隻の流船は價千七百五十萬留にして、船渠埠頭に八百萬留餘を要すべし、しかれば鐵道の工費よりも少しく多額に上ぼるなり、勿論列車の數を増加せば隨ふて流船を増加せざるべからず、かくては湖南に鐵道を敷設するの、勝れるに若かず、西比利亞鐵道の熱心なる主張者は商業の盛に發達すべきを信じ、毎日兩岸に於て

列車二十輛を要すべしといへり、されば多少汽船を用ふるも、サアカムバイカル線の敷設せらるべきは信を措くに足れり。

第三圖の第二區たる黒龍江線は工事の困難最も大なり、此は僅に二百九十二露里を有するサアカムバイカル線の如く、線路短かくして其工事の難を償ふなく、時に深林を穿ち沼河を涉り或は無人の境に入るに約二千露里航候厳烈にして地下深く凍結せるにより、夜々として挽ます之を破壊せざるべからず、剩さへ地方の經濟は必要なる巨額の工費を負擔する能はず、黒龍江省の生民僅に十一万五千國土殆ど荒蕪せり、河沼の住民が商業に従事するは今後幾星霜を経過せざるべからざるなり、されば本線路の必要たる、モスコよりストロテンスクに達する鉄道を浦蘆斯維よりハバロフスクに達するものと連絡するにありのみ、露國が鉄道敷設に關する近時の活動を了解せんと欲せば、極東に方ける露領の地勢に注意せざるべからず、抑露國は北京條約によりて、黒龍江の南より朝鮮の國境に達する露國ウツスリ地方を得、其極端浦蘆斯維を以て太平洋に於ける露國海軍の重鎮となし、又西比利亞鉄道の終點となせり、之のため鉄道に無益に約千露里の距離を増加したり、

太平洋の海軍根據地たる浦蘆斯維は遠く南端にありて長路を迂回せざるべからざるが故に、露國は殆五十年前に於けると同一の困難に遭遇したり、始めムラビオツフの東部西比利亞總督となるや、太平洋の海軍根據地をカムサツカのパトロホロフスクに設けたりしが、是

は西比利亞の他の要地を懸絶しければ、遠く迂路によりて交通するに敷置を要したるも、當時の情態にては大なる不便にもあらず、若し之に鉄道を敷設せば二日許にして達すべかりしなり、然れども世態一變せしよりこの時日すら大に國家の体威に關することとなれり、ムラビオツフ即ち之を察し賢しくも政治上の變動に乘じて、其赫赫たる政治の及ん限り是等の困難を排除したり、クリミア戦争の際彼は支那が太平洋に苦しむに乘じて黒龍江の航權を得、又支那が英佛と戦争の時に於ては黒龍江ウツスリ地方を併せたり、其後露國は同様なる政變の機に乗じ、西比利亞鉄道の東部に於ける困難を除去するを得たり、

千八百九十四年日清間に破裂せし戦争は、延ひて千八百九十五年の春に及び、露國の人心深く之のため動きたり、之はこの戦争の地は滿州にして西比利亞鉄道の東端に近き所なれば、其結果將來の利益を害せんことを恐れしなり、既にして下關條約によりて支那の滿州の一部を割讓するや、露國は太平洋に於ける自由の發達を妨害すべき政治上の新役者を大陸に放つ可らずとて之に干渉せしが、これ又正鵠に的中して報酬を要求すべき基礎を得たり、於是直に滿州を経て浦蘆斯維に鉄道を延長すべき許諾を得たり、之より黒龍江に沿ひて迂回するの事は、其地方に必要な起るまで不必要となれり、かくて或は疑ふらく、北京に於ける露國の勢力の増長、滿州に於ける測量隊の活動及び浦蘆斯維の冬季航氷船を以て航路を開通せざるべからざる事實より考ふれば、露國が究極の目的は冬季全く氷結せざる航路を開

獲んとするにありき、然れども露國は急に自ら進んで是等の計畫を實行せず、獨逸が膠州灣を占領するを待てしかる後に同等の報酬を要求し、而して旅順大連の貨物及西比利亞鐵道の支線を以て、是等の港灣を連絡すべき權利を受け太平洋に較近き出口を得たり、思ふに爾後商業上鐵道の終點は必ず牛莊、露人の一層精密に稱ふる所によればインズウに定めらるゝならん、

是等の緊要なる租借は、終に西比利亞鐵道東部の敷設に影響したり、即ち滿州を経て浦鹽新線に直線を延長するの許可は、黑龍江線、後貝加爾線、烏蘇里線をして贅物たらしめたり、何となれば是等の線路は太平洋と交通する上に就て必要を見ざればなり、今や露國の技師は後貝加爾線の例の部分を以て滿州線の起點となし、烏蘇里線の何所を以て終點となすべきかを確定せんがため、千八百九十七年測量に従事し、幾多の線路に就て擲擲の後、後貝加爾線のカイタロホより發し、南烏蘇里線のニコルスフに至るに決したり、この方法によれば第一區の最大部分即ち八百六露里、及び第二區の少部分たる百露里を以て大幹線に利用すべし、この豫定の州滿線は世に東清區と稱するものにして、また非常の難所あり、遂に北方に於て黑龍江を貫ける大小興安嶺これなり、前者に於ては幸に便路を發見せし、後者は頗る冒險なるにより更に測量を施せり、かく局部の巧究を遂げたる後、幾多の方面及終點は指示せられたりしが、曠者多くは東向して日本海に面する浦鹽新線に出でんよりは、南向して遼東

灣に赴き牛莊或は旅順に達するを可としたり、

其カイタロホより發するものは、ミユトナカ河(アバグイナエ)の南の支線の餘地を経て、アグニチエロン山脈の南を渡り、些少なる難所を有する地方を貫流せるナンホ河と、トルチヨル河との連絡路によりて大興安嶺を踰り、松花江河畔よりローホ河畔に達すべし、この間は落のカンシー帝が兩河を連絡する爲め五十露里の運河を設計せしことある工事容易の地にして、夫のローホの餘地は延て海に達せり、牛莊は其盡頭にあり年中多くは船舶の出入し得べき良好なる商業上の中心たり、又旅順口に達する支線は冬季自由に海邊に達するを得べし、この線路は東清線よりも短距離ならん、

若干の設計の中に、東清線の基點をヤプロニー山の退西コロ河畔の停車場に移すべしと唱ふるものあり、この設計に従へば全長百六十露里の路程を短縮すべし、而も該線は後貝加爾線のヤプロニーを越ゆる前分岐するにより、其山上に別路を造らざるべからずと雖も、尙有益の望あり、何となれば後貝加爾線は分岐點より三十九露里を以て完成すべきし、後者はコロクの餘地より山脊に沿ふて較平爽なる嶺道百四露里を開きて、インズウ河の餘地に達すべければなり、

線路はカイタロホに由ることをタイゲネットに由ることを問はず、孰れも著しく距離を短縮するの効あるべし、兎にも角にも速達の距離を減せんとする其堅忍耐苦を觀るは、實に快心の事に

三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

屬す、視よ、黒龍江線を包含せる原設計は莫斯科より浦蘆斯德まで九千露里餘、滿州を通過する東清線を採用せば以て八千露里に減すべく、太平洋面の終點として牛莊を撰定せば七千二百八十露里となるべきに非ずや、商業上より之を視んか、段富なる都邑に接する牛莊の終點として浦蘆斯德に勝れるは万々なり、然れども浦蘆斯德に達する線路は日本との通商に於て有益なれば、又必要なるは瞭然たり。

世界に於ける此最大鉄道は亞米利加鉄道加那陀の鉄道西方に於ける如く、東方に於て大西洋と太平洋とを連絡するものにして二大目的を有す、西比利亞の財力を發達せしむる是其一なるが、果然商業上の進道となりて東西物産の交易を交け、迅速なる旅行の便を與ふべし、其二は一層人目に眩惑する所、殊に極東に達する必要の大に減少したる時、かく遠國に接近せんとするを以て著しく社會の注意を引起したり、西比利亞鉄道の完成によりて生ずる最も緊要の結果は極東に旅客郵便物を迅速に運送することとなるべし、現今西部西比利亞の旅客鉄道は停車の時を合して、毎時平均二十二露里を走る、この速力を以てせば約十五日を以て莫斯科より浦蘆斯德に達すべく、十四日を以て牛莊に達すべし、今若し世界商業の大中心龍動を起點とせば、龍動より莫斯科に達する日子約二日を加ふれば可なり。

註に曰く、現今龍動より聖彼得堡に瀟車の便あれども、莫斯科までは迅速なる瀟車の便なし、されど西比利亞直通の曉ば必ず敷設せらるべし。

しがる後上海に達せんとするには浦蘆斯德より五日を要し、牛莊より約三日を要すべし、故に前者を經申せば二十三日、後者を經由せば十九日を要すなり、現今海路蘇士運河に賴れば一個月餘に亘るが故に、鉄道は比較上著しく時間を省減すべし、更らに香港を取りて比較せんか、西比利亞鉄道に要する日子に三日を加ふるも、尙ほ海路の日子より減せざるべからず、前者の迅速知るべきなり。

予が今比較のため引用したる瀟車は、西部西比利亞線に使用するが如き單に人口稀疎なる地方に使用するものにして、速力最も遲緩なりと雖も、全線太平洋の濱に達する時は、萬國交通の要衝となりて、一層迅速を要するに至り、通常列車毎時三十五露里、急行列車は四十五露里を快走するや期して待つべく、殊にこの急行列車を用ゆれば、全線に於て一週間を減じ龍動より上海香港までは約十二日若くは十五日を減すべし、尙將來西比利亞鉄道に行はるべき事項を示せば、毎時九十露里の速力を以て駛走する所の瀟車は、莫斯科より牛莊若くは浦蘆斯德まで四月を出でざるべく、龍動より上海まで僅かに九日にて達すべし、勿論かゝる列車は長く使用せらるゝ事なかるべしと雖も、現今旅行の速度大に進歩しつゝ、あれば、恐らくは中年の人と雖も、少くも毎週かゝる列車の太平洋に來往するを見るを得可し。

西比利亞鉄道は尙運賃の低廉を以て、諸國政府は西比利亞を通じて旅客郵便物を安値に運送せんとして、幾世紀大體なる政策の忠實なれば、他國に於ては嘲笑すべき

程度まで鉄道の運賃を低減すべし、莫斯科より浦鹽斯德までの運賃は宿泊料を合して一等百留、二等六十留、三等四十留を要するならん、之れに龍動より莫斯科までの百二十五留、浦鹽斯德より上海までの八十留、十七日間の賄費八十五留を加へば、龍動より上海まで全額三百九十八留なり、而して海路ブリンナシを経て来る者は七百七十二留を要すべし、運賃かく低廉なるを以て、旅行中臨時に支出すべき費用は容音に辨じ得べし、而して加奈陀太平洋鉄道の如く、殊に夏日は蘇士運河を経て、紅海印度洋を渡るよりも快適を覺ふるならん、是等數多の利益合同するを以て、西比利亞鐵道は極東に赴く旅客の爲めに最も便利ならん、以上西比利亞鐵道の爲め、二三の尤も明白なる事實を釋當に説明せしが、熱心にこの線路を維持する者の要求は遙かに之れに過ぎたり、彼輩論じて曰く、旅客の歐洲より蘭領印度に赴く者はこの線路を擇ぶべし、新紐克東方諸州より支那日本に至らんとする者は太平洋を横きりて舊大陸の鐵路に頼りて低廉なりと認むべしと、議論の甚く較計甚だ誤まれりと雖も、西比利亞鐵道の速力著しく發達せば、實際の根據を有するものと稱せらるゝに至らん、極東より若くは極東に貨物を運搬する上に就て、西比利亞鐵道の鐵船と競争するは、旅客の場合に於けるよりも困難なるべし、何となれば、現今蘇士運河經由の河船に於て實行せる運賃の低減は、歐州支那日本間の貿易と寧ろ流船を喜ばしむるを以てなり、故に極東に或は極東より運送する貨物にして、西比利亞鐵道によるものは其價格の爲めに、流船に於て高き運

賃を徴せらるゝか、若くは通航によりて、濕熱の爲めに損害を受くる恐あるものなり、されど西比利亞鐵道は露西亞の内部より来る所の商品を吸集すべし、現今モスコウよりオアテッサ及び蘇士運河を経て浦鹽斯德まで、汽車及汽船によりて運送する費用は、浦鹽斯德に直通する鐵道の豫定の運賃に比して較高きを見るなり、而して浦鹽斯德に接する露國の東部地方は殊に流車に頼るを便なりとす、

西比利亞鐵道の緊要の目的は三の貫通せる國土の發達これなり、抑該國は天然の富源饒多なりと雖も、從來交通不便にして利用せられざりしを以て、鐵道はこの欠點を補ふのみならず、西比利亞河流の流船の航運に著しく勢力を賦與すべし、既にヘルムよりナウソンに達する短線は、ナブ河の航運に一大刺戟を與へたり、故に全區完全せば尙夥しく航洋流船を北海に招致するに至らん、また政府は鐵道工事の進行中、ナブ、エニセーの最も必要なる東部の支流チニールム、アンガラに改良工事を施しつゝあり、この工事竣功せば東方後貝加爾まで河流によりて交通するを得べし、若し夫れ歐露に至りては、運河相通じて、蒸海、白海、波爾的海の間に絶わす船楫の便あり、西比利亞に於ても新鐵道が歴大なる國土に活氣を與ふるに及んで、之れと同一の組織を見るべし、(續)

233

明治三十六年九月廿一日印刷
全 三十六年九月廿四日發行

定價金六十五錢



校閱 高橋作衛

著者 落合昌太郎

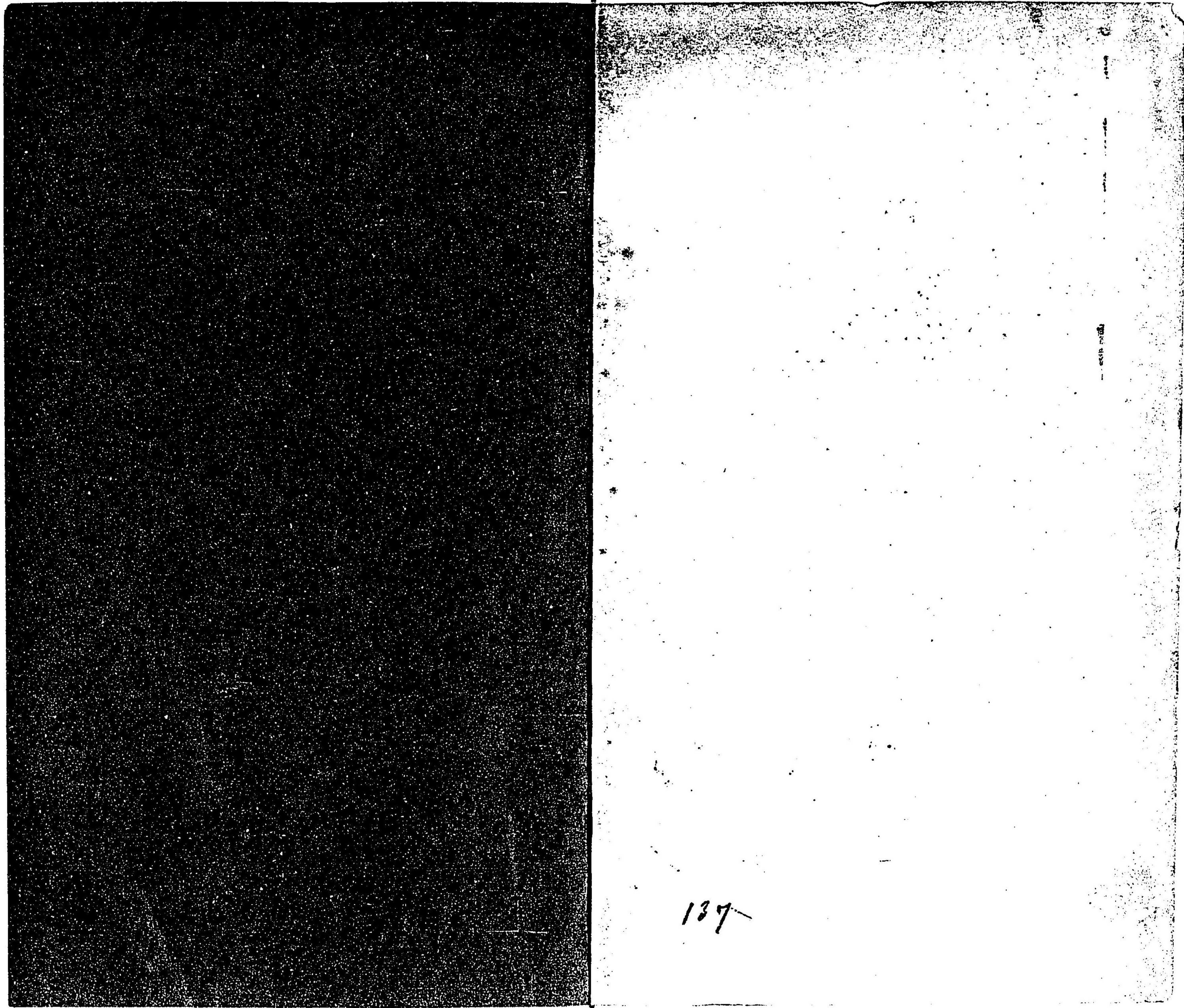
全 森田龍起

發行者 小林慶

印刷所 今津隆治

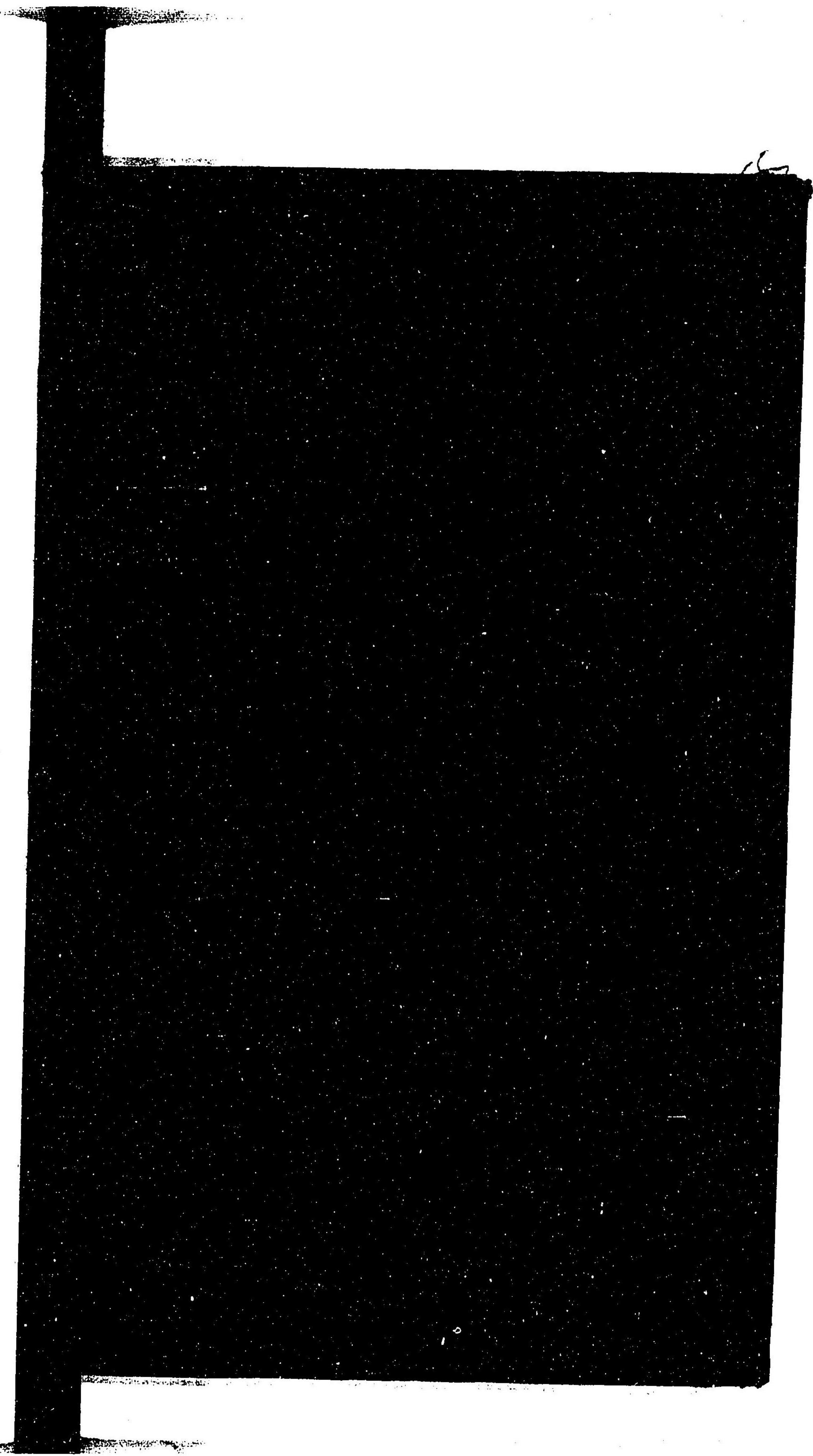
發行所 愛善社

發行所 東京市日本橋區通三丁目十三番地 電話本局西九十五番 嵩山房



137

77
238



77
233

026710-000-6

77-233

亞細亞ニ於ケル露西亞

落合 昌太郎/著

M36

ADD-0406

